

# 甲府市史研究

第 10 号

—市史完成特集—

序	甲府市長 山本栄彦 (1)
序文	甲府市史編さん委員長 磐貝正義 (2)
〈座談会〉甲府市史編さん事業を終えるにあたって	(3)
〈委員・協力員コメント〉市史編さん事業を終えて	(26)
市史編さん年度別事業報告	(51)
参考資料	(70)
甲府市史編さんの基本的構想(案)	(70)
甲府市史編さん基本構想(案)	(71)
甲府市史編さん準備委員会設置要綱	(74)
甲府市史編さん大綱	(75)
甲府市市史編さん委員会設置条例	(78)
市史編さん調査協力員設置要綱	(79)
甲府市史執筆要項	(79)
甲府市史述史編執筆要項	(81)
甲府市史等の著作権の帰属並びに行使に関する覚書	(89)
『甲府市史研究』編集要領	(90)
年度別市史編さん事業経費(予算・決算)	(90)
甲府市史印刷仕様書	(90)
「甲府市史」の売買に関する契約書	(94)
市史編さん年間スケジュール	(95)
甲府市史執筆・編集計画	(96)
市史編さん刊行物一覧	(97)
市史研究(1~9号)総目次	(98)
甲府市史編さん委員会機構図	(102)
甲府市史編さん関係者名簿	(103)
市史編さん事業日誌(写真・新聞記事)	(105)
あとがき	(191)

1993.3

甲府市市史編さん委員会

## 序

本市の大文化事業であります『甲府市史』の編さんは、昭和五十八年の事業着手以来は順調に進展し、本年二月を以て終了する運びとなりました。

『甲府市史研究』は、この間の史料の調査研究過程で得られた興味ある事項を、市民の皆様や研究者に公開することを目的としたもので、年ごとに発刊し、〇号を数えるに至りました。

本号は甲府市史編さんの総集編とし、十年に及ぶ事業の全貌が克明に記されており、必ずや将来の参考となるであろう貴重な資料であります。

また、創刊号から九号までに掲載されました論文・調査報告等は九八編に及び、その内容も新鮮で学術的水準の高い記述であり、甲府市史編さんに伴った研究論文集とは申しますものの、多くの研究者から本県指の学術論文集として高い評価を得るまでになっております。これも磯貝正義委員長はじめご執筆を賜った諸先生方の貢献なご研究の成果と存じ欣快の至りであります。

どうか、郷土の歴史を学ぶ市民の皆様に広くご利用いただき、研究の深化にお役立ていただければ幸甚に存じます。

平成五年三月

甲府市長 山 本 栄 彦

## 序文

甲府市市史編さん委員会では、このたび市史編さん事業の概要をまとめた『甲府市史研究』第一〇号（市史完成特集）を行なう運びとなりました。

本書には、十年に及ぶ編さん事業を振り返った座談会をはじめ、基本構想や条例・大綱等の各種参考資料を収録し、また編さん室の動向を詳細に記録した事業日誌なども掲載しておりますので、長期にわたって取り組んで参りました当編さん事業の全容がご理解いただけますとともに、これから着手される自治体史誌の編さんに些かでもお役立て願えればと考える次第であります。

『甲府市史研究』は本号を以てひとまず終刊となります。一九八四（昭和五十九）年の創刊以来、当初の計画どおり年一回ずつ（一九八八年には二回）順調に刊行を重ね、九号までに研究論文六四編・史料紹介三編・座談会三編・遺跡発掘調査報告四編・古墳分布調査報告一編のほか「市史の広場」への小論三編を掲載することができました。この中には学界で高い評価を受けた論考も多く、本格的な市史研究のための機関誌としての役割を十二分に果せたものと自負しております。

本誌には、ほとんどの委員に日頃の調査・研究の一端をご執筆いただき、その成果を市史本巻の記述に充分に生かすことができましたが、外部の方々から、二編に及ぶ論文のご投稿をいたしましたことも特色の一つと言えましょう。これは、発刊当初から誌面を研究者に広く開放し寄稿を呼び掛けたためであります。この方針により国内外の若手研究者の斬新な研究成果をも市史の編さんを取り入れることができました。

『甲府市史』の編さんは本年二月を以て幕を閉じますが、本誌に掲載された論考や報告の成果が、今後、地域史研究の中で広く活用されることを念じて止みません。

終わりに、ご執筆いただきました各位に厚く御礼申し上げますとともに、編集にあたられた市史研究編集小委員会及び編さん事務局の諸氏、並びにご支援いただきました市民の皆様に深甚なる謝意を表します。

一九九二年二月

甲府市市史編さん委員会委員長 磯貝正義

## 甲府市史編さん事業を終えるにあたつて

出席

山本 荣彦

甲府市民

市史編さん委員長・山梨大学名誉教授

磯貝 正義

市史編さん委員・山梨大学名誉教授

服部 治則

市史編さん委員・法政大学教授

村上 直

市史編さん委員・法政大学教授

飯田 文秀

市史編さん委員・山梨大学非常勤講師

高木 善弘

市史編さん専門委員・山梨県立女子短期大学教授

司会 高木 伸也

市長室専門上幹

日時 平成四年十二月二十一日

場所 レストラン桂や

十年を振り返って

高木 それでは始めさせていただきます。

市史編さん事業については、昭和五十七年の一年間を準備期間に充て、本格的には翌五十八年に着手しましたので、丁度十年になるわけですが、ほぼ当初の計画に沿った進行をみております。今日はこの十年を顧みて何かとお話を伺いたいということで、委員長はじめ、各巻の監修的立場にある先生方に御出席をいただき、また、市長さんにも特に時間をさして御参加をいただきました。時間の許す

限りお話を伺えればと思います。

座談会のテーマは、「応大さくは「甲府市史編さん事業を終えるにあたつて」ということにさせていただきます。本当は「終えて」にしたいんですけども、来年三月の年度末に向かまして、現在印刷進行中のものが一部ありますので、そういう現状に即したテーマとして設定したわけです。

最初は、この十年を振り返ってということで一通り、順にお話を願えればと思います。

まず市長さんの方から火を切つていただきます。

市長 いま、話がありましたが、一年という長い期間、先生方にはこの事業にまさに心血を注いでいただきまして、ようやくここに完成を目前とすることができたわけでございます。この間の多大な御努力に対しまして、衷心より敬意を表する次第です。

過去、甲府市においては、大正七年に三十年史ともいべき『甲府略志』が発刊され、以来四十年あるいは六十年というようなそれぞれの節目で編さん事業を行つてしまつたのですけれども、今回この市史は、まさに甲府市の正史と呼ぶにふさわしい出来栄えたと考えるわけでございます。大変貴重な資料をこれだけ立派に残していくだけ、後世に受け継いでいくべき大切な財産を作ることができたと私も思っております。

とかく、歴史事実として伝えられているものの中には曲がった、あるいは間違った伝えられた方を仕立ててされているものもあるんじゃないかなと思いますが、そのような中で、正しく昔から今日のことをまでを私どもが学び、さらにこれを受け継いでいくということは、尊いことであると思っています。

この一月二十一日に、奈良県の大和郡山市と姫路市の結婚を行いました。私もあちらへ伺いました。柳沢文庫等の資料を拝見させていただきましたが、柳沢氏の甲府幕時代の歴史を物語る、木次甲府市にあるべきものが、向こうにたくさんあります。大変驚きました。同時に、今まで私は、甲府の人間が知らなかつたことを、大和郡山の方々がよく知っているという状況があつたわけです。これらもそうした資料を、正しく郡山の人たちが受け継ぎ、学んでいるということじゃないかと思いました。いかにこうした文献というものが大事であるかということを感じたわけでございます。

そういう意味では、今後も様々な面で先生方には市勢の発展のために、御協力を賜わっていかなければならぬと思います。何とぞよろしくお願い申し上げます。

また、今回の市史は全十六巻という大変なものになるわけでござりますが、この間の御努力に対しまして、改めて感謝を申し上げます。

高木 球貝先生には、準備段階からかなり密着してご指導をいただいてきました。おかげでこれでも、振り返ってみていかがですか。

球貝 大変うれしいという気持ちでいっぱいです。ほほ予定の期間内にこれだけの大部のものを出し得るとは、当初予測していなかつたんです。正直言って、一年や三年の遅れは当たり前という気持ち

でしたが、非常にうまくいったなあという感じが強いので、それはなぜだろうかといろいろ考えてみると、編さんに関係された先生方は非常に忙しい方々ですが、かなり優先して甲府市史に力を入れていただいたというようなことがあったんだろうと思います。

それから、事務局がしっかりとしていたというような、いろいろな点があって、予定通りにこういうものができたということは、うれしいという気持ちでいっぱいです。

高木 考古・古代・中世部会のお立場からはいかがでしょうか。

磯貝 そうですね、私が直接担当いたしました原始・古代・中世部会では、史料編・通史編各一巻ずつを出したが、何しろ数千年に及ぶ期間を対象にいたしておりますだけに、まとめるのにかなりの苦労もございました。幸いに編会所屬の委員のほか、他の組会の先生方や事務局、さらには外部の方々にもご執筆いただき、まずまずの成果を挙げることができたと喜んでおります。いろいろ思い出もございますが、上ノ森遺跡や一の森跡遺跡の発掘などで思われる成績が挙がつたことで、後屋町の勝持小の私道如来像から全く子期しない大文の胸内銘が発見されて驚嘆したことなどが強い印象に残っております。

それから、戦国時代は武田二代の時代ですが、さりとて甲府の歴史イコール武田二代の歴史ということにもなりませんので、どこまで武田の歴史を書き込むかということでは、執筆の先生方も一苦心なさったようです。でき上ったものを見ますと、多少アンバランスな点があり、もう少し調整すべきであったかなあというのが今の私の感想です。

高木 飯田先生と村上先生には近仕のご担当ということで、拜啓



—座談会出席者—

左上より                  右上より

山本市長

服部委員

村上委員

島袋委員

磯貝委員長

飯田委員

高木主幹





画をご覧いただければおわかりのとおり、この事業の先陣を切って昭和六一年に史料編三巻を同時に発刊したという実績をお持ちなんですが。

鶴田 甲府市史の編さん事業の中では初発として、近世の史料編のうち町方の三巻を刊行したわけですけれども、考えてみますと、市史編さん事業の期間が全体として十年というのは長いとか短いというのか、仕事の上ではかなり強行軍だったというのが第一の感じです。

それから、個人的には勤めの上で現役が五年、退職してから五年、ちょうど半々の期間が市史の編さん事業にあつたというわけで、私の人生の中では、非常に思い出深い仕事となりました。

ところで近世部会、これは県内が四人、県外からが三人のあわせて七人の構成なんですが、みなさき前々から仲間だったものですから、そういう点では非常にチームワークがよくとれて、仕事を進めていく上で都合でした。結果としての出来如何は別として、非常に苦しいけれども、それはあとで申し上げことがあるだろと思いますけれども、同時に非常に楽しくもありました。鶴田先生がおっしゃいましたように、出来上がったものを見ますと、よくこの期間内にやれたというのが実感です。まず「日それだけ申し上げておきたいと思います。

高木 村上先生は、東京都内を中心に、川崎市あるいはその他多くの市町村史に關係されていらっしゃるわけですが、そういう立場で甲府市史を眺められた場合いかがでしょうか。

村上 私が山梨県の研究をはじめたのは昭和三十年の頃からです。鶴田先生や藤井先生の研究会、「甲斐歴史学会」に参加して論文など

を書いたのが始まりなんです。私は東京周辺に住んでおりますので、今から二十三年も前ですが、昭和二十四年に初めて日出区史の編さんを参加して以来、大体関東周辺の市史に携わってきました。しかし同じ市や町の中でも、甲府は武田信玄の拠点でしたし、また近世では甲府藩から天領への展開を中心として、コットンれば、地域の歴史ということと同時に、日本の歴史の移り変わりを示す代表的な都市であり、町であったわけです。このようなことからぜひ機会があれば甲府市史の編さんにお加わしたいと思っていましたところ、市史の計画が具体化していく段階で、編さん委員に加えていただくことになりました。思い出多い、一生の記憶に残るような仕事をさせていただいたということで、本当に感謝しております。

ただ、私が他の市史をやりました経験からいいますと、十年間で十六冊というのは大変なことなんですね。しかも近世は最初の計画を増改して、結局史料編で町方三巻、村方一冊、そして通史編と、合計五冊を出したことになります。これは私の経験では大変なハンドスケジュールの中ではなされたことだと思います。それだけに部会長である鶴田先生を中心によくまとまって、皆さんが協力して行ったのできたのだと思います。東京方面からも参加した者の一人ということも含めて大変感謝しています。

東京周辺の研究者は、甲府市史に関心を持っているんです。甲府は歴史的に重要な町の一つであり、風土、歴史においても、地域としても、日本の歴史に早くから登場するようなところですから、多くの研究者が注目しているのです。遠くは大阪とか関西の人からも市史の事をよく尋ねられました。最近亡くなられた、大阪府立大学の森杉夫先生も、大変関心を持っておられた一人です。甲府に住ん

でいたことがありで、亡くなる前に、「随分甲府市史は買つてゐるんだ」とか、「関心を持つてゐる」といわれていました。森さんは、非常に署名な研究者ですが、そういう方々が関東、東京以外からも注目していました。私も大変感動しました。多くの方が、甲府市史に対しては、本当に他の市町村史とは違った意味で興味を持っていたと思います。

高木 製部先生にお伺いしたいのですが、民俗、美術・工芸というジャンルの異なる二つの専門分野が入った部会の部会長というお立場で、公議の持ち方などは非常に難しかったことだと思います。その中で六十二年に民俗編、美術・工芸編と、同時に一巻を出されました。その頭を振り返つてみていかがでしょうか。

服部 私はこういった市史の仕事を初めての経験でした。民俗編を受け持つたのですがどのように作業を進行させていくか非常に迷いました。

美術・工芸の方では、社寺建築・仏像彫刻は伊藤相孝先生、美術・

工芸は守屋正彦さん、近代建築は植松光宏さんがおられますし、お任せしても専門的にやつてこられた方々ですから安心できたのですけれども、これに対しても民俗編といふのは、県史にしても市町村史にしても執筆の仕方が難しいんです。全体の構成はどうするかとい

うこともですが、どなたに執筆していくかが問題でした。山梨県には民俗学会の会員は何人かいますが、それぞれに個人的な興味と申しますが、癖と申しますか、よく言えば専門分野とか調査方法の違いがありまして、体系的な民俗編を作るというには難しいところが多々ありました。結局調査項目を挙げることから始めたのですが、どこまで書けるか心もとないところがありました。結果的に自

分達でやれるところをそれを受け持つて書くということで、民俗編という形ではまとまるかどうか心配でした。しかし、遂に執筆者は頼まれから、特徴が出ているということはいえるかもしれません。例えば小沢秀之先生は以前から信仰とか、衣食住などの方面を研究なさっていて、そのことについては大変お詳しいです。このように、他の先生方も部分についてはどんなことを書くかということはよくおわかりでいらっしゃるので、それぞれ得意とするところを記述していただきました。

執筆協力者の内沢第史さんや、望月（健男・惟子）さんご夫婦などは民俗の研究を続けていらっしゃる方々ですので、援助をお願いしました。「語の中の「方」」の項は嚴密に民俗学と言えるかどうかわからませんけれども、清水茂夫先生や執筆をお願いした鈴木正幸先生、口向（敏意）さんなどが言論学的にやつておられますから、民俗編全体の構成はともかくとして、それぞれの人が自分の得意なところをやつたということで、その特徴は出していると思います。

高木 当初、先生のおえ方の中に、今生きていらっしゃる人から聞ける範囲の聞き取りをとにかく急いで行う必要があるということで、委員会ができた九八年のかなり早い段階から大里地区や宮本地区などの聞き取りをされてましたね。

服部 部会を作った時から、それぞれ村へ入って調査はやってきました。最初の集まりである五十八年の七月、八月に民俗編の目次案の検討をしたり部会の調査計画を立てたりしました。その段階で、小沢先生は背からやっておられるし、私自身も村落については山梨大学時代からやっておりましたので、すぐ一緒に調査するということはありませんでした。ヒヤリングのやり方でも個人個人で得意な

やり方があるわけで、個人芸なんです。民俗の場合は、各個人ですぐ取りかかるるので、五十八年から調査を始めました。宮本村の調査も、緒には行きましめたけれども聞く時はバラバラでした。

私の場合は、調査項目を作りました。何人かの学生に受け持たせて十か所ぐらい聞き取り調査をしました。項目を、十くらいあげて、B5の調査表を事務局の敷野君に作ってもらつたりしましたね。その段階で私の場合は少しだのは一人で歩いておりますけれども、ところどころ事務局の方で地域ごとに何人かの有識者を集めさせていただき、座談会形式でヒヤリングをしたこともあります。先ほど触れた地区の方にも、何か所かでそういう方法をとりました。小沢先生の方でも得意なやり方でやっておられましたし、まあ、皆さんそれを聞きましたことは確かですね。

高木 当初の段階で意欲的にヒヤリング調査をされて、その後代替わりで亡くなられた方も大勢いらっしゃって、早い時期にそういう調査をやった結果、記録として残すことができて良かったというふうに聞いたことがあります。

福部 各地区の方々に非常に協力していただけて、いろんな話を伺うことができました。そういうのも全部は盛りきれたかどうかと云うことが心配ですけれども。

高木 近現代の方に入らさせていただきます。古史の最後を飾る、「通史編第四卷現代」の校正作業が現在だけなわという状況にあって、まだ島袋先生の部会では終わつたという御心境ではないかと思いますが、近代編、現代編と史料調査や編集過程を振り返つていただけますか。

島袋 本日は、部会長の伊東祐先生が、山梨大学の学長に就任され

た直後で、大変多忙なため、代わって出席させていただきました。

近・現代部会では、現代の史料編が二冊に増えましたので、その分余分に仕事をしたという気持ちであります。

近代というと、新しいから史料が豊富だらうというふうに考えやすいのですけれども、実はそうではなくたところが大変苦労したところなんです。

一つには、戦災で甲府市が焼けたということが大きかったです。もう、つは、残しておく方の気持ちとしまして、古いものは価値を認めて、新しいのはいいだろうということなんでしょうけれど、本来残っているはずのものが残っていないことが多いあります。そういうところで苦労しました。

特に、甲府は農業と製糸が産業の中心だったわけですが、その關係の史料がわざわざ集められていました。農業関係でも宮本村みたいな山間の所では残っていましたけれども、中心の辺りがほとんどないような状況でした。このように、当初私たちがイメージしていた史料の残り方と、実際に残っていたものとの間にかなりのギャップがありました。執筆者が古勞を抱えながら仕事をするということになりました。当初、史料調査を何箇か行いましたけれども、全体にならいました。古史の最後を飾る、「通史編第四卷現代」の校正作業を何箇か行いましたけれども、全体はないかというような形になつたと思います。

現代については、史料が昭和三十年の前と後、つまり、高度成長に入る前と後とで社会状況も変わりますけれども、史料の状況も変わるものであります。昭和三十一、二年を境にその前のものは表書きを見ま

しても史料の趣じ方を見ましても、歴史の史料らしい雰囲気がありまして、史料の残り方とそういういた史料の性質の違いの両面から考え合わせまして、史料編は前後に時代区分した方がいいだろうということで二分間になつております。

また、近代につきましては、日本史全体でも地方史、市史や県史なんかでも、叙述のスタイルはある程度固まっているというか一定のスタイルがあります。これに対し現代の方はスタイルが決まっていないところがございまして、史料をそれぞれ探ししながら、試行錯誤するというような経過がありました。

ですから、これは大変効率が悪かったというべきなのか、表現は難しいけれども、現代編の編集に入りましてから、部会の開催回数が大変多くなりました。通常に比べると二倍ぐらいの回数になったかもしません。ということで、書くスタイルを決めるまでにいろいろと苦労がありました。

それとは別に、現代部会には折藤（昭良）先生と荻原（克己）先生という両の行政にかかわった一人の方がいらっしゃるのですけれども、私たちには書いてみれば生き字引みたいな方々ですから、そのお話を参考にしながら市の歴史を考えることができて、大変良かったと考えております。

現代についても、近代についても、欲を言えば切りはないんですけれども、執筆者間で調整をする時間が足りなかなあという印象は残っています。最初は勉強会をしながら、書き始める前に調整をしようということを話したことがあるんですけども、一、二回やったところでなかなか難しくなつてしましました。

そういう中で、伊東先生は近代と現代の両方を取りまとめる役割

でいろいろと苦労をおかけしました。部会のメンバーとして、感謝しています。

私個人としては、地方史とか地域史、あるいは自治体史などは全くやったことがないわけではなかったのですが、十年かけてやるということはそうありませんでしたので、大変勉強させてもらいました。感謝しております。

高木 今のお話の中で、三十年代の前と後ろで、大部分史料の様相が違うというふうなことがあります。市長のお父上は第二十代の市長（山本達雄氏）で、昭和二十四年から一十八年まで在任なさつていて、「甲府市制六十年誌」もその当時作られています。復興期のことで何か伺っていることがありますか。

市長 当時、GHQとか軍政部とかよくこの言葉を耳にしたことがあります。終戦直後ですから、領下の中での市政というものは、今は全然違う情勢のことで、今考えれば苦労をしていました。どうなあという感覚を抱きます。

それとは別に、二十代といえども、仕事表や整備事業の着手が二十六年からでしょう。甲府で町名変更が進んで、城下町としての町名、こういものも大きく変わってしまいました。昔からの町名である八日町だとか白木町とか、ああいうものを残しておいてもらえば、今になると非常に残念に思っています。

高木 自治省でも反省をしたと聞いています。今はできるだけ古い地名を残す方針に変わっているようです。

市長 所々に立っていますよね、町名由来の標識、若い人達には余り興味がないようですし、段々忘れられていくのは寂しいことだと思います。

服部 東京なんかは元の町名に残しているところもありますね。

市長

よく私どもは他県からおみえになるお客様に、「甲府市は自然に恵まれた、自然の景観の豊かなところ。史跡の豊富なところだ」というような、観光の面では史跡と自然ということを強調しているわけです。私ども中にはいる、それはこういうふうな資料などで部分的にはわかっているんですけども、さりとて、一般市民が余りにもそういうことを知らないことがあります。それがためにそういう面での観光的に案内するとか宣伝をすることに乏しいよう気がします。

今回の市史の編さんと、いろいろなものをきつかけに、今、各地区ごとに地区史を作ることが盛んになってきてています。こういうことを機会としてみなさんが関心をもって勉強するようになると、より甲府市に対する理解も深まり、ひいては、外から来た人たちへの大きな宣伝にもつながっていくわけで、中の人人が自分のことをまず知るというところから始まっているんじゃないかというふうに思いました。

### 盛んになった地区史の編さん

高木 地区史編さんの動きが目立つというような話があつたんですねけれども、最近のものだけでも拾ってみると、「御納戸自治会の歩み」、北口自治会の「写真で見る平成初期の町なみ」、「富士見自治会史」、「錦町の歴史」、さらに、「あるさと」という書名で

小笠町でも出しております。また、自分史の編さんなども非常に盛んで、そういう面で市史が始まつてかなり影響があったかなあと、感じをもっています。

磯貝 それも甲府市史なんかの編さんと関係がないとも「えないと」思います。近・現代のような新しいところでは自分の子供の頃のこととで、自分たちの方がよく知っているということもあるでしょう。偉い歴史家が本を書くと思っていたんだけれども、自分たちにも書けるんじゃないか、そういうふうなものが出てきていると思うんです。民衆史はそれでいいと思います。民衆史、民衆史といつても、信玄の悪口ばかりを書くのが民衆史じゃないと思います。

階級史観で被支配階級を要に出して書けと言つても、それには無理があります。史料的な制約があるし、社会の一つの組織というものは支配階級が一元形を作り上げるもので、民衆もその枠の中で生活しているんですから。そういうものを序念に拾い出すようにすれば、民衆の歴史もある程度までは書くことができます。

歴史といえば古い時代のみを対象とするかのようなどらえ方があるけれども、これらの地区史を見ると別と新しい時代を対象としたものが多いようで、これもいいと思います。自分も知っている、これは違っているというような身近な歴史を、ということで地区史を書こうとか自分史を書こうという気運が全国的かもしませんけれどもあるようですね。

村上 私は甲府に住んでいませんが、戦災を受けた百貨店の岡島や松林軒のことや、戦後復興の様子を見てきました。市史が始まつた当時、甲府駅はまだ古い建築でしたが、いま見ると甲府も随分変わりましたね。そういうことから考えてみますけれども、文化都市づ

くり、文化行政というものは重要ですね、産業経済の発展はもちろんです。文化行政というのは金もかかるし時間もかかると思います。当然市史の編さん事業もそういった文化行政の一環として捉えていかねばならない性格をもっているわけですが。

高木 市史というのは、市民が参加してこらえていくのが理想的ですが、直接参加するのではなくか難しいことです。だから地区史であるとか自己史などの編さん事業が盛り上がりを文化行政と良いことだと思います。そういう市民の盛り上がりを文化行政と一体化して、市の発展のために努力していく点で、市民さんに抱負とか今後の展望をお聞きしたいと思います。

市長 最近感じたことを一つほどお話ししたいと思います。

昨日もまたまた、池田小学校がボランティア活動で厚生大臣から表彰を受けました。また池田地区PTAが地域と一緒にした事業推進ということで文部大臣から表彰されたという、二つの表彰の授賞会がありました。

その席で地区的元老の方々がこの池田地区は、昔はああだった、こうだったと語って昔のことを語つていらっしゃって、いまこの地域でも新しい人たちが大勢住んでいるけれども、元々は池田村はこうだったんだということをどうどうと話されていたんです。それを聞いていまして、今これだけ地域が一体となって一つのことをやれるというのも、そういう歴史の上に積み重ねられてきた今日があるからこそなんだということを地域の他の人たちも是非知つて欲しいというふうに思いました。

もう一つ、過日、ヨーロッパへ視察に行きました、甲府市の姉妹都市でもあるフランスのボーという、アンリ四世の生誕地で歴史的

にも由緒ある都市を訪ねました。町自体は小さいですが、非常に整備が行き届いていて、ここだけに限らずフランス、イタリア各地をまわって感じたのは原気が非常に低迷している中で史跡の保存にはものすごく力をかけているなということなんです。

なるほど、ヨーロッパの人たちは、そういうものを特に大事にするんだなあという印象を受けました、甲府に住んでいると、余り感じないことが多いですが、京都あたりは、所轄帝やっているようですがれども、甲府でも史跡の保存であるとかあるいは教育の分野で、そういう意識を広げていくことを考えていかなければいけないですね。余りにも無関心層が多いというか、関心のある人が割合少ないのではないかでしょうか。そのことは専門家に任せればいいんだというふうな感じで、先ほど職員先生がおっしゃったように、これについては自分が正しいんだというような、それだけ興味をもつていただけるだけでもすばらしいことだと思います。

どうすればそういう方向に向かっていくかというところの重点施策を、今後の行政の中で考えていく人達というのは、今ここにいる職員の高木課長以下わざかな人たちだけじゃないかというふうに思っています。たまたま昨日も、やっぱりこうして歴史を学ぶというふうな仕事を携わっていた大手方は、今の世情のドロドロしたものはまた全く別の世界を持っていて、研究を通して楽しく生きておられるということを課長と話したんですけども、そういうもののすべての人に持つて欲しいということを願っています。

市史に市民が直接参加するのはなかなか難しいかもしませんが、ぜひ日頃研究に携わっている先生方に指導的立場で、一般の人た

ちに地区ごとに話をしてやったり、地区ごとで、今日は近・奥代をやろうとか、あるいは民俗をやろうというふうな勉強会的なものを、エコープラン推進委員会も出でますから、そういうものの中に整合させて、そんなことを考えていただければ、まさに文化的な町づくりができるのではないかというふうに思っていますが、どうも全体的な世の中の傾向として、日先のことだけにとらわれ過ぎて、過去を忘れがちじゃないかという気がしております。

村上　市民の方が持つ甲府の町に対する愛着も、自分の地域の風俗や歴史を理解していくことにより、非常に深くなっていくのではな  
いでしょうか。よそから来る人も、甲府の遺跡とか文化遺産とか、そういうものを見ることによって、甲府への親しみとか甲府の歴史への郷愁、そういうものを持っていきますね、そういう意味では甲府市史というのは重要な役割を果たしていくと思います。

(市長暫時中止)

### 民衆史としての立場

高木　ところで、甲府市史は特色といいかねらいとして民衆史を目指したのですが、その辺について懸念を、大事なところだと想いますのでお聞きします。

磯貝　史料によつてわれわれは物を書かなくちゃならないから、なかなか民衆の生活は出しにくいのですけれども、古代では一応法律制度といふような制度から、農民がどのような負担をしていったかと、いう面などで農民の生活実態が出てきているとは思います。それから、古い時代だけでなく、いわゆる歴史時代といえども考古学の成果を取り入れるようになっています。特に古代なん

か見ますと、当時的人は、どんな生活をして、衣食住はどんなであつたろうか、あるいは信仰生活はどんなものであったろうかというようなことを、遺構や遺物から見ていくということは今回の甲府市史でもある程度やつていて、「のうな古学的成果の活用は戦前はもちろんのこと戦後といえども、以前の市史にはなかつた特色だと思います。山梨県としても今向市史がそういう古学的の成果というものを取り入れていることはよかつたんじゃないでしょうか。そういう点はあるし、それから中世一特に武田時代について、できる限り民衆の生活に視点を置くようにして、支配者の動きや行政史だけに終始したのではないといふことがいえるのではないかでしょうか。以上の点から民衆史を目指すというねらいはある程度到達できていると思います。今日のいわゆる学問的水準においては、古代から中世までをざつと見てこの程度のことといいんじやないかという感じがします。

高木　中沢信吉先生なんかは極力そういう点に力を入れて書いていたように思うんですが。

磯貝　民衆の視点でものを見るということは普通の人ではなかなかできません。中沢先生だからこそできたんじやないかという感じはします。

それから、中世でも遺構や遺跡の調査結果をかなり取り入れている曲があつて、いいことだと思いません。

また、最近では絵巻物とか、絵図みたいなものから中世史を見るというのが盛んになってきていますが、そういう点ではまだ今回の市史ではそこまではやれなかつたし、そういう資料は山梨には今のところ見つかっていないんじゃないかと思います。

高木 民衆史という視点は、特に近・現代史についてはかなり命題になっていたわけですが、史料のセレクトの段階で人変更しいといふ話が何回か部会でも出ていました。その辺、島袋先生いかがでしょうか。

島袋 近・現代部会では、できるだけ生活に密着したところを扱いたいということで、つまは聞き取り調査を何回かやりまして、当時の農村で生活をしていたり、社会運動のリーダーだったたりした人の話を聞きました。その中で戦前であったり戦後であったりしますけれども、当時の衣食住、それから生活の様子を随分伺いました。

『市史研究』に聞き取り調査のことを何回か書いたり、山本多体子さんが農業工の生活や仕事のことを書いたりということで、ある程度調査を進めてきました。

史料編でいうと、生活史、民衆史の史料というのは、何がそれにあたるかということで難しいところがありまして、これなのかなあというのを幾つか掲載されておりますが、そんなにたくさんは入つてないと思います。

当時の生活ということでは、記録に残っていることと話を聞いたことと、違うところが出てきて面白かったですね。当初、昭和初期のころの農民は貧しい生活をしていたらう、と思つてしまふしたら、当時の史料を見ますと、農民運動の指導者は着古しの服を着ていたんじや務まらない、ということが書いてあるんです。どうしてかといふと、貧しくて指導力がないから格好も貧しいんだろう、というふうに、当時の農村で見られていたといふんです(笑)。村に来る時は、ちゃんと立派な服を着て来いといふんですね(笑)。記録がちゃんと残っているんです。意外でもあつたし、どちらが眞実に近いかと

いうことは簡単には言えませんが、そういう意味でおもしろいと思えることが幾つありました。

それから、通史編でも、民衆の生活に重点を置くという共通の認識で始めたんですが、特徴といえば、生活に密着した上下水道・ごみ問題などをその時代でどう扱っているかということがかなり取り上げられている点でしよう。現代編ではごみ問題や福祉問題もうですけれども、消費者の問題とか生活スタイルの問題とか婦人会活動であるとか、どういう影響があつてどういう反応があつたかとか、また市民の日常生活の楽しみ方もわかるような事例も入つています。

飯田 難感的なものになるんですけども、福さんへの取り組みといいますと、民衆史ということがすぐ出てくるわけです。あるいは近世の方から古と近世像を明らかにするとか、一回にそういう言葉が出て来るんですけど、実際にやってみると、民衆史というのは、体どのように書けるんだろうということで、非常に大変なんですね。言葉を換えておきますと、民衆の生活史とか社会史という、そういう面での取り組みが求められたんじゃないだろうかと、こういうふうに考えたわけなんです。

脇部 民俗学で聞くことと、近・現代の人がヒヤリングするのと内容は同じようなことがあるんですね。山本多体子さんなんかは私達と同じようなやり方でやつてましたね。例えば小作争議とかごみの処理とか、民俗編ではほとんど書かなかつたけれども、その話はちゃんとノートに記録はしたんですよ。結局近・現代編の方で入るだろうということではなくと触れなかつたのです。

## 地域文化の重視

高木 さて甲府市史のセールス・ポイントと申しますが、そんな点について触れていただきたいと思うんですが、例えば近世・近・現代を通じまして古い時代もそうですけれども、文学ジャンルのウエー卜が甲府市史ではかなり高くなっています。各時代一〇〇ページくらいは紙幅を割いています。これはよその都市に比べて相当多いんです。そういったボリュームの点だけを考えても文化的な側面を重視したということが言えると思うんですが、他に先生方から特にお話をあれば、触れていただきたいと思います。

村上 地域文化というのは難しいですね、われわれ社会経済史的な発想で書く政治史みたいなものに比べると、ですから、文化などとの自治体史でも弱くなっちゃってます。ところが、今回の市史で、かなり地域文化・甲府の周辺の文化というものに力を入れたというのは大きな特色ではないでしょうか。われわれはやっぱり文化の伝統的なものを理解できないと書けませんからね。そういう点、飯田先生は苦労されたんでしょう。

飯田 山梨県の中で考えますと、ほかの市町村史ではちょっと無理だろうと思われるような、文化の問題、文化史、そういうものが、甲府の近世では、割合多く書けました。恐らく近・現代もそうでしょうけれども、この点では非常に良かったと思います。要するにそれだけ城下町甲府における町人社会が成熟して、豪商層を中心とする文化のかなり華やかな展開があったということなんですね。

一方では、最近特に守屋正まささんが中心になりまして、相沢文化というものがクローズ・アップされているわけなんですけれども、

いわゆる庶民文化ということでとらえるならば、むしろ相沢の時代を過ぎて甲府が人間になってからの時期に注目すべきでしょう。十八世紀の中頃以降ですね、例えば松本武秀先生は俳諧とか狂歌、舞曲というようなものを書いていますが、松本先生が育つておられるように、どうも一般に文化についての叙述が歴史とうまくかみ合っていない例が多い、ともすると作品論的なものになってしまっているんです。これではいけないと、時代の社会状況とかかわる文化現象として意識して書かれたようです。

私もその後をうけて遊芸文化として、生け花であるとか団扇・将棋などの藝能・遊戯、それから音楽と歌舞音曲、そういうようなものを取り上げました。あれは実は非常に楽しく書けたところなんですね。私自身初めての仕事なんです、そういう分野に目をつけたのは、そういう点では何とか格好をつけられたという気がします。

ところで、今回の甲府市史の中で、江戸文化の流入といふことをしばしば書いているんですが、その具体的な一例として十八世紀中頃に書かれた「裏見寒話」という本の中でも私、一部分見過ごしてしまったところがあるんです。

こういう記述があつたのです。「瀬川の菊之丞と名付けし物大分甲府へ来る」というような「瀬川菊之丞」の一代目として、當時有名な歌舞伎役者です。俳名の路考の名で、庶民の間で非常に人気がありました。染色は「路考茶」といって淡い色の茶色の染が非常に流行したりしました。他に「路考櫻」や「路考桔梗」という帶の締め方もありました。その「裏見寒話」の記述から、こういった江戸でもはやされた路考風俗が直輸入でそのまま甲府へ来ていましたことがわかります。

甲府というのは、現在もファッショングなど東京からすぐに入つてきますよね。ちょうど当時の菊之丞は今までいうDCならぬTCブランドで、そういうものが甲府へ入つてました。非常におもしろいと思いまして、別の甲府の史料で見ましても、路考茶というのは書き上げられているし、他にも圓七輪といって人形淨瑠璃の圓七が着いていた柿色の大柄な格子縞が、やはり風俗の中に入っていることがわかりました。

江戸の消費経済、消費文化というふうなものが甲府へ直に入つて来る、その辺のところをもう少し注意してみれば、それを受容する甲府の町人社会と、庶民の文化や風俗がもつと書き込めたのではないかと、少々残念に思つております。

村上　一般には江戸文化とか上方文化、つまり江戸と大阪を中心にお文化が発展するといつてゐるわけですが、飯田先生がおっしゃったように江戸の文化といふものは、江戸だけが繁栄して榮えるのではなくて、天領の場合 地域文化として甲府のような直轄都市に意外に早く入つてきて、そしてそれがむしろ、甲府独自の文化へ転換しながら発展していくところが、今度の市史から読み取れます。江戸と関係を持ちながらも甲府の固有の庶民文化が見られたこと、これを観察できたことが今回の大きな特色だと思います。

高木　市史を始める前に、幾つかの課題について先生方と協議したことがあります。特に山梨については一つのイメージとして、古い時代は「甲斐は文化不毛の地だ」というふうな余り有り難くないことを、県民自らが言つてゐるようなきらいがありました。本当にそうだろうか、これを何とか払拭するような史料の振り起こしなどをしながら、実際に違うんだという実感を出していきたいということ

で、特に美術・工芸の守原先生なんかは意を用いて下さった。美術、工芸編を別冊にしたというのも、一つの狙いでございますけれども、山梨県における初の洋画家である中丸精一郎、そういう人物を発掘したり、近世では飯田先生からお話をありましたように、多彩な町人文化ですか、俳諧が非常に盛んであったとか、幾つかの特徴的な現象をおさえる努力がなされた経過がござります。そのためかどうか「文化六々」は今は余りいわれなくなつたかなあという感じがしますがいかがでしょうか。

磯貝　最近では余り書われないかもしませんが、殿様文化といふようなものを「文化」と見る目から見ると、甲府の文化が遅れています。しかし、町人文化とか庶民の文化となれば決して遅れはとつていません。近世期の俳諧の流行は現在のもの、例えば飯田蛇笏・龍太父子に連なるものだと思いますし、その他にも大勢いると思います。よそから来たものでも辻屋外のようないたちが来ていて、辻屋外なんか結構甲州を営めていますよね。全国各地を廻つて甲州に来て、「甲州の気風は大したもんだ。武田の遺風が濃々」として、ひまがあればだれもが剣術の稽古をしている」というようなことを言つております。

それから、寺子屋の普及も近世の後期ではかなりのものになつてます。それはいかいろいろな面で庶民の文化ということになれば、決して人後に落ちないと思います。甲州人がいろいろ「われたのは、甲州人のめざとい連中がよそへ行ってすばしこいことをやつたら、のびり生活している方の人達にしてみれば、してやられた」ということじやないでしょうか。

私が甲府へ来るとときも、親戚の叔父から「何で甲州のようない氣

の悪いところへ行くんだ」といわれました。帝國大学を出て、わざわざあんなところへ行かないでもいいんだろうというわけですね。

村上 甲府勤番も「山流し」といいますね。あれもおかしな話ですね。考証・羅筆家の三田村爲島あたりが言つたんじゃないですか。

磯貝 こっちに居ついちゃう勤番も結構いますよね、勤番支配は戻るけれども勤番十は上着しちゃう。親も勤番、子も勤番というのが結構います。

村上 「山流し」というイメージで捉えないで、もっと別の角度から見直すことが必要ですね。

磯貝 なぜ甲府というところを邊境とか徳用が大事にしたかということを考えれば、そう意外なところじゃないと思いますね。

島袋 そのことは、経済をみましても文化でもそうだと思いますが、山梨と東京との距離みたいなものが、直接ではないけれども關係するんじゃないかと思います。経済でも甲府で蓄積して中央に出でてきますよね。そういう關係がありまして文化でも恐らく目がある方へ向いていたんじゃないでしょうか。そういう印象がありますして、そういう面からみると文化が定着しないということも根拠があるのかなあという気がします。

近年美術館ができたりしまして、甲府市の文化が、かなり高いところで作られるようになりました。そういうことも恐らく個々にいつてみれば、未來にそういうものを作りだすような条件が整えられてきたところがあるのではないかと思います。  
有泉良夫先生が、「なかなか文化が定着しないのはそれなりの原因があるんだろう」ということをお書きになつたことがあります、それなりに納得ができるという印象を持ちました。しかし、これか

らの人たちが作り出すのにいい条件は整つてきているのではないかと考えています。

磯貝 近世後期も前期のように殿様がずっといれば、今とは別の形で文化が発展したでしょう。

荻生徂徠のような人物は、天領時代には甲府には来ていないです。徂徠も殿様がいたからこそ来たんですね。例えば同じ近世期でも人情落が当時の日本の中でも文化的水準がすごく高かつたのは、

殿様がいて家臣団がいて、頼山陽が入らてくるとか、殿様文化という形で発展したからです。

村上 津和野藩とか日山藩とかいう小藩の方が、いつも緊張感がありますよね。そういう藩とは違い、甲府のような一國大領の中心は、結局、幕府領としての大きな地域性の中に包摶されていくわけです。特に関東と甲州は一体化して捉えられています。

幕府側はそういう天領全体を、統して巨大な政治的・財政的な基盤として捉えちゃうから、大領でないほどの藩は小さく固まっています。それは死活の問題ですから。東京の多摩地区などは、ほとんど天領ですから、やっぱり藩とは違った気風がありました。

#### 自治体史の果たすべき役割

高木 この辺で地方史研究と自治体史ということで、自治体史の果たす役割というような点についてお話をいただきたいと思うんですけれども、自治体史の編さんについてはどこの都市もそうでしょうけれども、大変長い歳月と多大な人労あるいは経費を投入します。また、史料調査などいろいろな史料が振り起こされることにより、一般市民の関心も高まり、地方史研究の底辺を広げるとい

うような面でも影響があると思います。そうした意味で自治体史の果たすべき役割とは、研究の活性化と真価を發揮できるような発展を作り出すことだと思いますが、実際、その辺はいかがでしょうか。

**村上** 太平洋戦争が終わってから、日本の歴史に対する取り組み方も変わりました。いつも中央の歴史を中心であった時代には、地方の歴史というのは「郷土史」という形で長くありました。ところが、敗戦を契機として「地方史」というものに変わったままですね。地方史は郷土史とかなり内容が違います。史料の扱い方とか、歴史事実への取り組みが非常に客観的で、上観的に自分の地域のお話自慢ばかりやるというものじゃなくて、できるだけ客観的に見ていく、という全国的な研究なんですね。

ところが、昭和四十五年、一九七〇年頃から「地域史」という名前が変わってくるんです。このような郷土史—地方史—地域史という変遷は、單なる名称の変化ではなくて内容面でもかなりの違いがあります。

具体的には、地方史の場合、地域の歴史を非常に重視していくことはいいんですが、全国的な問題を各地域において検証・確認するということを考えていく傾向にありました。ところが、地域史になると各地域社会の独自な发展のあり方を見ていくとする方向に変わってきます。自治体史の編さんというのも、むしろ私はそれまでの中央集権的な志向型に対する疑問、それに對しての地域の自立とか地方の復権というような問題を踏まえながら、地域史研究の中で重要な位置を占めてきているんだと思います。

歴史学の全般的な發展の中で、自治体史は郷土史研究、地域史研

究の中でも重要な位置を占めています。ただ、自治体史の場合では地域の行政区画を主体に組みますから、一般的な地域理論のようなものとはちょっと離れていたりします。それをどのように克服しながら地域史の研究の中で自治体史を生きしていくかということが大きな課題だと思います。甲府市史なら甲府の行政区画だけ主体にして終わっちゃうんじゃなくて、甲府という町が、甲斐国全体へ影響、または日本全体にも影響していくというような発想も持つていいべきで、甲府の自治体史は単なる甲府の中のことだけでは終わってしまうという形ではないと思います。つまり地域史の發展の中で自治体史を位置づけていくことが重要になってくるわけですね。

甲府市史の場合、かなりそういう面では頑張って、例えば近世でいうなら甲府自体が甲府だけの問題で終わるのではなくて、これが全国の直轄都市の共通の問題に発展していくというような意欲的な問題意識をもつて自治体史に取り組んでいったわけです。そういう意味では新しい自治体史のあり方に向かってかなり進んで、これからは新たな課題にアプローチしていくこととしたら、みることができるのではないかと思います。

**磯貝** 自治体史というのは割と古くから出ていますね。明治時代は余り活発じやないのですが、明治の終わりから大正にかけて山梨県では郡志（誌）というのが出るようになりました。しかもそれは当時の小学校の教科などによる編さんで、ああいう郡志が出たということは、すばらしいことだと思います。甲府市でも「甲府縣志」というのが大正時代に出まして、そういう動きは進みますけれども、全体的にはどうも「甲斐國志」から余り多く出られなかつたということ、明治國家の至上命令というか天皇の支配する國の中の一地

域であるという制約がどうしてもあった。ですから地方独特のものというのはなかなか書けなかつたんです。郡志なんか見てもみんな同じで、形式がワンパターンです。

神社の祭神なんかでも中央の神様をみんな祀っています。各地域にはもともと中央の神様とは関係のない神様がいっぱいあつたわけですが、そういうようなものもこれは中央のどういう神様を祀つたもので、本家はあつちのだれだというような本家は中央の方にあるという意識があるんです。そういうものを打破しようという動きが、昭和の初めの不況時代に自力更生運動というのが起きたときに文部省が全国的に奨励した、郷土研究なるものなのです。

当時、小出内通敏というその道の大家がおりまして、彼は「地方には地方の特色があるのであって、中央のものをそのまま流用すればいいというものではない」という立場で地域の研究をしていました。そして、当時全国で秋田・茨城・香川と山梨の四つしか作れなかった『総合郷土研究』の内の一つである山梨県を、彼が立案・指導したんです。四つの中では山梨が一番いい出来ですね。昭和十一年（一九三六）に行われております。しかし、戦争でそういう方向へも渡されてしまいました。

戦後になると、地方史研究、また地歴史研究という新しい意味合いの、先ほど村上先生がおっしゃったような形で出てくるようになります。しかし、現在は、戦後に出て来たものをさらにもう一遍作り直しているという段階になつています。それは取りも直さず新しい地域的な視覚というものを目指しているということだと思ふんですね。

高木 「徹細郷土研究」というのもありましたね。

磯貝 「徹細郷土研究」というのは、昭和十二年、加納岩（山梨市）だけを対象に山梨県女子師範学校が編さんしたものでこれも良い本ですね。西園の執筆者のうち、佐藤八郎さんとか佐々木（岩間）桃江さんとか何人かが今もご健在です。

村上 昔の自治体史というのは、精通した郷土史家の方が一人か二人で全部書いてしまってことがしばしばありました。

ところが、今はわりといい研究が専門的に分化して、郷土研究の成果も多いし、分野も広がってきてます。だから、現在の自治体史は一人や一人の研究者の力、郷土史家の力では編さんできるものではありません。そういう点に大きな特色があると思います。

飯田 地方史研究というのは、それぞれの地域における個別的な問題意識に基づいて研究しています。これは間違いないだろうと思います。自治体史というのも、そういった従来の地方史研究の成果を参考にというか学びながら、市町村域を中心に、また周辺をも含めた地域を対象に、できるだけ特色あるものを作り出そうとして書くわけですけれども、一応網羅的に様々な歴史事象を扱うことになり、問題の所在といったものを提供する。市長の話にもありました地区史というようなものが作られた地域ではそういう面が多分あるだろうと思います。

それと同時に、地方史研究の上でも深化されていくだろうと、こんなふうに考えます。きわめて一般論的なことです。  
高木 執筆者によつてはそういう傾向がありまして、たとえば有泉先生の場合は、近代編で明治期の市政について、特徴的なものだけをピックアップしてそれを中心に据えてお書きになりました。決して絶対的、網羅的にはお書きになりませんでした。

飯田　たしかにそういう手法もあるでしょう。私の場合は、応と育てていますが、自治体史であるがゆえに市民サイドに立って考えた場合、広くいろんな問題に触れておいて、その上で甲府市史の特色、甲府市なるがゆえに何を書かなければならないかというところにいくんだろうと私は思います。

島袋　その辺が難しいですね。

近・現代は、一番自治体史的なことを念頭において取り組むべきなんでしょうけれども、近・現代編の細さんでは自治体史的なことはそんなに余念になかったと思います。地域史的な自治体史へ遡るかな自治体史的な地域史というのかな、地域史とか地方史ということに重点を置いて考えてきたということは、恐らく皆さんそうだと思いません。どうしたことかと申しますと、今の近・現代史の研究の中では、甲府市のような産業・経済上から、特徴があるところでの地方史なり地域史なりで要求されているものは何かということ、そこがまず出発点になるんだと思うのです。有泉先生のスタイルは、明治維新から十年代前後について、今、研究史上何を明らかにするのがおもしろいのか、いいのだろうかという意識が強く出たものだと思っています。このスタイルは近・現代編の執筆者にもかなり共通することじやなかつたかと思います。地域史なしで地方史、一般的な通史の現在の研究状況とにらみ合わせながらやるという、これは方法としては……。

村上　市史や県史にはそれぞれ役割があると思います。県史は当然対象のエリアが広いし、市史の場合はそれより狭い。まず飯田先生が言われたことを踏まえた上で、島袋先生の「われた」とも考慮していくことが必要だと思いますね。

磯貝　古代あたりになると史料不足で甲府市域だけではためですね。その結果、県史との境界線がちょっとあいまいになってしまいまして。それから、地域の特徴を出すことはもちろん大切ですが、わかりきったことは省けばいいという考え方ではないと思います。例えば甲府市がいつ市になったか、山梨県にいつ県庁が置かれたかなどいうことは、基本的なものだから書かなくていいというわけにはいかないんじゃないでしょうか。我々にとつてわかりきったことだといつも市民にとっては必ずしもそうだとは言い切れませんし、やっぱり書いておいてほしいと思います。

それから、私個人の考えになるかもしれません、地方の自治体史というのは客観的にある事実を叙述すればそれでいいんじゃないでしょうか。それをどのように解釈するかというのは読者に任せた方がいいと思います。解説の方は『甲府市史研究』などで、個人の名で出す方がよかつたのではないかと思うのですが、そういう点が部分的には少し出過ぎたところもあったのではないか、というのが私の反省点ですね。

高木　近代・現代の場合は、冒頭市長も触れましたけれども四回の修史事業を行っています。

そこで既に触れたことをもう一度今回おさらいをするかどうかといふ問題もございまして、有泉先生なんかは、明治の中ころの市の行政としての主たる課題は、本道問題、他ではごみの問題だったというふうなことで、それをかなりピックアップしてお書きになっています。そういう点現代も難しいんです。昭和二十九年に出した『甲府市史 市制施行以後』というものもありますし。これは行政史と見ればかなりよくまとまっていて、市政全般に

わたってしかも詳細に書いてあります。これと同じことを書いたのでは塗り直しになってしまいます。しかし、委員長が言われたように市の基本的事項やある程度の史実關係は押さえておかなければなりません。漏れたところ、あるいは視点を変えるなどしてどのようにつなげていくか、という問題で大分、近・現代の先生方は御苦労が多かったのではないでしょうか。むしろ、既刊の市史はない方が書きやすかったという話もあります（笑）。

### 難しかった史料の活用

高木 近世の方では熊田先生が坂田日記の活用を十分することによって、今まで振り起こされていなかつたような事実關係が発見できるのではないかというそんな期待をお持ちでしたが、あの日記の活用という点から見てはどうですか。

坂田 それは大いに反省点として上げられます。史料編の編集の際、通常原始から古代・中世までは史料があれば原則としてみんな載せることで、近世以降のものになりますと非常に大変な量の史料の中から、甲府市史の史料編に掲載するにはそれがふさわしいのか、その選択が非常に大きな問題になってきます。これが、冒頭申し上げました苦しかった問題の大きな一つなんですね。

さて、史料編に基づいて通史を書くときには、いわゆる社会・経済的な分野になりますと、それらの史料だけでは不十分なんですね。もちろん専門委員さん、みなさん近世の場合はそれ以外の史料も活用しながら書いているわけですが。どうしても史料編だけに頼りますと、前述が点になりがちなんですね。そこで坂田家の御用留な

り御用日記というものを細かく見ていくことで、線が見えてくるようになる、それを非常に感じました。私はそれでできるだけ坂田家の日記を使いました。しかし結局最終的に時間不足ということもあります。その辺のところがちょっと惜しかったなあという気がします。坂田家の御用日記の類はもっと活用すべきでした。

史料でもう一つこれも落ちてしまつたものですが、寛文・元禄の時期になりますと、甲府へ近江商人であるとか江戸や京都の商人たちがいろいろな商元のためにやって来ます。近江商人であれば小間物あるいは呉服商売のために甲府へ来て宿を取った、こういう宿取り書上の史料から商品流通に目を向けるべきだったなし、あるいはその時期に並行しまして、僧侶出替り書上—住家人の出入り、興動についての文書ですが、そういうしたものから少し丹念に見ることで甲府の町内での民衆の生活史といらものがもつと書き込めたんじゃないかなと思います。現存する史料を十分活用し切れないので終わってしまったという感じをもっています。

野球じゃないですが、凡打でも立振りでもいい、しかし見逃しは残念です。そんなことを反省点として一つあげたいと思います。

もう一つ、今まで甲府というと城下町の面ばかりとらえられてきていたんですが、実は甲府城下を取り巻いて近世八十九か村があるんですよ。これは、史料とすれば膨大なものがあつただろうと思うのですが、これにつきましては、森藤典男さんが指導している甲府市古文書研究会の方々が非常に精力的に調査をやつていて、市史にも熱心に協力してくださった。これは非常にありがたく思っています。

したがって、史料編にしましても、八十五か村のもの、三百何点を一冊で收めてしまつたのは、ちょっと淋しい印象を持ちます。

ですから、町方に重く村方に軽かったという点も反省点としてあげたいと思います。その辺のところもう少し時間が欲しかったな、そんなところです。

高木 村方文書については、北の方、廣瀬家文書をはじめ、山付地帯には割と豊富に残っていました。中央線以北に多く、南の方は非常に少なかつたため、史料が偏重して残っているということで、各村押し並べて取り上げることはできませんでした。そういうくらいは確かにあつたですね。

飯田 そんな中で、甲府北端の水晶の史料はわりあい豊富にあります。もう一つはお話しの廣瀬家の湯村温泉に関する史料など、こ

れらはまとまつた形で掲載できた、そんな点は村方のものとして、一つの大きな特色になるんだろうという気がします。

高木 今話題に出ましたように、甲府市の特色の一つとして「温泉が湧く町」ということがあげられると思いますが、安藤市長のお宅でも草薙でおやりになつてているということで、温泉について何かありますか。

市長 県都で温泉が出ているのは甲府だけで、そういう点ではめずらしいと思います。お隣りの石和はまだ新しく、最近の温泉郷ですけれども、何か歓楽街的なとらえ方をされているようです。

私は温泉という歴史的なものを感するわけです。草津の温泉であるとか熱海の温泉であるとか、昔からのイメージが残っております。そういう点甲府はとり残されたような感じがしますが、かつて、湯村温泉は志麻の湯と呼ばれ、弘法大師が開いたとの伝承を持ち、

私どもの積翠寺温泉も伝玄さんの隨い湯と呼ばれています。あまり我田引水になつてもいけませんが、もっと宣伝してもいいかも知れませんね。

高木 さて、通常こうした大きな修史事業ですと、どうしても懐みというかあとでそういうものが残ると思いますが、鳥袋先生の方で何かありますか。

鳥袋 幾つかありますが、史料の見つかり方がなかなかうまくいかなかつたという点をまずあげたいと思います。それなりに探してもなかつたということですから、しょうがないんですけども、甲府市の一番中心になる製茶業であるとか商家の史料がなかつたことが大きかったです。空襲で焼けたということもあるのですが。それが、大変残念でした。

叙述方法の問題としては、民衆史に重点を置くということだったんですけれどもその共通認識をつくる経過、というか、手順がもう少し必要だったかなあという気がしています。

ただ、民衆史というのは何かわかつたようでわからないところがありまして、社会史とどう違うのかといわれてもこれまで難しくて、最初から危惧されたんですけれども、最後までまとまりのある共通認識があつたかというと、ちょっと心もとないです。大きいことではその点が今でも気にかかっています。

履部 民俗史というか、民俗の扱う領域というものは民衆そのもの生きですから、その点ではまさに民衆史だと思うんですが。われわれとしてはできるだけたくさんの人にお会いして、いろんなことを聞いて、いかにそれを執筆者がまとめるかということですが、人數の関係でそうたくさん聞けなかつたかもしれません。

最初申し上げましたような学生を使っての聞き取り調査も学生の人数が限られていましましてから、十地点ぐらいにとどまってしまつてその点、もっとほかのところへも行っておく必要があったのではないかと思います。

また、高木さんと相談してできるだけ集落というか、旧村の名前を出すようにしようということで、記述に羅列みたいなところも出てしまつたのですが、それも反省点です。

また、民俗学という場合、含まれる分野が広くて、たとえば、方言などを扱う領域は私の研究領域とは方法論も全然別個です。清水先生や福垣先生とは相談することもなかつたわけです。そういう点がありますから難しかつたですね、民俗編といふのは。

村上 この福岡さん期間において、近世編で一番大きな話題になつたのは、甲府城跡で行われていた発掘調査で、穴太積みの技術や金管丸が豊臣政権下の甲府城の築城工事にかなり用いられていることがわかつたことです。これについては今までの甲府の近世史では触れることができませんでした。それが間に合つたんです、書いているうちに。そのために豊臣時代における甲斐の位置付けというのはかなり明白になつたと思います。こうした浅野時代を書いたのは、この甲府市史が初めてということで評価されました。

また、渡辺洋子さんが、甲府城販賣と永慶寺の造営について執筆されましたね。われわれはどうしても文献だけで書いていますけれども、近世考古学とか建築学などの成果を、総合的に入れることは、これから必要になっていくと思います。

それから、織田・羽柴氏の時代、横浜氏の時代などは藩政面と文化面とをトータルで評価していく方向が少しでも打ち出せたらと思いま

ましたが、なかなか現段階では十分にはできなかつたですね。藩政面と文化面とはやっぱり総合的じやなくて、個々の問題を擧げるにとどまつてしまつた。それをトータルに、構成時代は幕政と文化をどう一体化させて評価するのか、甲府藩に対する総合的な評価をもう少し時間があれば突っ込んでできたんでしょうか、時間が足りませんでした。

飯田 甲府城の石垣の問題、これは間に合つた例です。間に合わない例、そういうればわかるでしょう（笑）。近世では通史が脱稿したちょうどその頃江戸時代の甲府の豪商である、大木家から美術関係のコレクション、それと同時にかなりの古文書類が幕に寄贈されました。今整理しているわけなんですが、大体近世でも一千点は下らないですね、近・現代はさらに膨大な……。あれを活用し切れなかつたのは非常に残念でした。

史料は、近世の方では大木家が有力な豪商の仲間入りをした十八世紀の末葉政年間あたりからずっと東期にかけてあります。もちろんそれが近・現代につながっていくわけです。

人木家というのは興服商・古着商、そしてその一方で金融商として質屋・古物・札差、と多角的な経営をやつていました。そういういろいろ付き合い上の問題に関するもの、あるいは学芸にかかるようなもの、そういう史料が相当収められているんです。

高木 部美術資料については当初の段階で使いました。あの全貌がもと早く出していたら編さん事業の完成がもう二、三年伸びたんじゃないでしょうか（笑）。

それから甲府市と同じぐらいの県序所在地あるいは同規模の市の

自治体史の卷数、あるいは編さん期間を調べてみたことがあるのですが、卷数でいうと甲府市はその中でも大部の方です。で、期間でいうと短い方なんですね、編さん体制で申しますと、執筆陣は甲府の場合二十人ぐらいの先生方、それに若干外局の方をお願いしたということがありますけれども、一そうした面では人変更無理を申し上げた中での密度の高い編さんだったといえると思います。

そのようなこともあります、それぞれの先生方には御専門を若干広げてお書き願ったため、やはり目の届かない部分も多少は出てきているかもしれません。

特に新しい時代の方になりますと、市民の動きにも様々な分野がございまして、そういう動き、個々の歴史が、必ずしも全部は捉えられていないという点については、今後何かの機会に補足する必要もあるかなとうふに思っております。

村上 これだけの巻数のものが十年という期間でできたのは、事務局が非常にしっかりしていたからだと我觉得います。事務局に高木土幹を中心頑張っていただいた、これがないとできなかつたと思っております。へたすると二十年くらいかかるてしまうんじゃないですか。この巻数を期間内に刊行するというのは人変なことですよ。

高木 その点については、むしろ最初委員長をはじめ、先生方に大変御労苦いただいたいということです。

職員 委員の先生方も力を入れてくれたということですね、ほかの仕事を後回しにしても、ということもあったと思います。

高木 市史の編さん事業は各専門部会あるいは全体公職的なもの、さらに年に一度の公開講座である市史の夕べの開催だとか、非常に

多角的な、住民参加という話がありましたが、いろんな形で協力者を含めて御協力をいただきましたが、総括的に進めてきました。市民的主業として取り組んだことがいえると思います。他にも市内意見とか県外での合同研修会もありましたし、また、市史独自で四回の学術発表調査を行ったり大要欲張って事業を進ましたので、

そういう意味では先生方にもいろんな御苦勞があったのではないかと思います。

改めて私の方からも御礼を申し上げる次第です。

村上 それと磯貝先生と山口柱一磯貝先生がおられるからみんながまとまることができたと思いますね。

#### 事業終了後の展望

服部 甲府市史の編さんが終わった段階で、市史編さん室は解散するんですか。その後は研究の継続機関として残すようになっているんでしょうか。

市長 来年度の機関改革については、まだ具体的な話は出ていませんね。課長の方はどう。

高木 今の段階では一応平成五年の二月三十一日をもって市史編さん事業については終了するということで、関係部局ともいろいろ協議を始めているんですけれども、一応その時点で市史編さん室については終了の予定です。調査・収集した史料をどのような形で保存するか、また活用していくかという問題については、まだ煮詰っていませんため、山長のところまでいってない段階です。

服部 史料の保存、活用もですし、研究も続けていく必要があります。そういう研究体制はずっと残していただきたいですね。

市長 新しい市立図書館を今度造るのですが、その中で、もちろん行政の情報を提供していくわけですが、それとも、もう一つに、生涯学習的な視点としてこういうふうな市史の関係資料も新図書館の中へ含めて、なお一層市民に広く理解をしていただく絶好の機会をつくれるのではないかと考えています。

村上 資料館とか文書館を造って、集めた資料を保存・活用するという形では存続していかないのですか。

市長 新図書館の方へ今言つたような形で移して何らかの方策を講じていくべきだなあといふふうに思います。

新図書館の中へ資料室というふうな形で一区を占めまして、ここに市史編さん事業を通して調査収集した資料についても、そこへある程度収録して整理・活用を図っていく、そういう必要がありますね。

高木 私の方でも（新図書館建設）講習会議の中で、同様な意見を出しております。

市長 それまでの間は現在の図書館で保管していくという計画をもっています。

磯貝 図書館は大きなものを送るんですか。

市長 納屋大きなもので、平成7年前後開館予定です。

村上 私のように甲府に愛着を持っている者は、将来独立した歴史資料館が出来ることを期待します。最初は難しくても、ぜひ山本市長さんの時代に実現していただきたいですね。

市長 納屋大きなもので、平成7年前後開館予定です。タ」という大きな情報発信地を作ることになっております。駅を降りてちょっとした時間があるという時のため、資料館があつたり、

あるいは絵画でも何でもいいのですが展示室というか美術館的なものなんかをその中に置くべきだと考えています。

県立美術館に行くといっても、駅からタクシーで往復一時間じゃあります。電車に間に合わないからといって帰ってしまう人も多いようです。それよりも甲府の駅前にそういうのができれば、時間がかかるなら三十分見て来ようということも可能になります。そういうことをやっぱりあの中へ考えていくべきではないかと、私は思っています。

磯貝 それは駅の南ですか北ですか。

市長 北口の広場です。これを何とかそういう方向で実現したいなあと、私は密かに考えています。そういう意味ではこれからも先生方にいろいろ御指導、御提言を賜わりたいと思います。ぜひよろしくお願い致します。

高木 それでは話は尽きないわけですが、時間が過ぎてしまいました。中沢信吉先生が途中でなくなられ、今日の喜びを分かち合うことができませんのは残念でなりません。竹山先生は前途有為の身で惜しまれつつ世を去りましたが、ご自身もどんなにかご無念であったかと思うと痛情の念に堪えません。また中沢先生は病床にあっても執筆を続け、通史編のあの雄大な論考を完成されました。第一管に人生を託された先生のひたむきな生き方にほ頬の下がる思いが致しました。改めて竹先生のご冥福をお祈り致したいと存じます。

それでは長時間、どうも有難うございました。

(記録 大森美智子・宮沢富美恵)

## 市史編さん事業を終えて

（市史編さんを終えて）

専門委員 秋山 敬

月日が経つのは早いもので、委嘱を受けてから既に十年、まもなく終焉を迎えるようとしている。なつかしく思って、初めの頃の書類をひっくり返してたら、当初の刊行計画が目に入った。昭和六十年度完了予定としながらも、昭和六十七年度まで計画表に載せてあった。実際の進行をみると、計画より一年遅れたものの、計画表記載の昭和六十七年（平成四年度）の今、刊行を終えようとしているには驚いた。事務局は当初から一年遅れを念頭においていた如くである。もちろん、このことは単なる偶然かもしれないが、期間的にほぼ計画通りに事業の終了を迎えることができたのは、行政的に大きな成果である。その成功は、事務局の方々の御子奮迅の沾潤と委員会に対する歓しくも暖かい叱咤激励があつたらばこそと、事務局のご努力に深く敬意を表す次第である。

近年、行政では「文化」なるものが大きくなり入れられ、さまざまな施策が行われてはいる。市史編さんもその一つであろう。しかし、一般的にいって、ハード面はともかく、ソフト面においては、方法論が確立しているとは言い難い。行政において施策効果や実績が絶えず問題とされるのは当然だが、数量的把握の困難な文化行政においてはその評価基準も立場によってかなりの格差がある。これをしていくしかない。

## 中世編の編さんに関係して

専門委員 柴辻俊六

十余年の歳月をかけた『甲府市史』の編さん事業が今終らうとしている。当初から関係させていただいたものの一人として感謝深いものがある。

私が担当させていただいたのは、中世編のしかも後期である戦国期の、しかもその一部分であったが、終ってみてその結果を顧みると、最初の五年間は基礎調査のために市内の見学や関連文書の実地踏査が多くあり、それまで地理概念や史料所在の把握が曖昧であったが、何とか最小限度の市内現況を摸ることができた。しかしながらえてみると、この実地踏査も大変に局地的なものであって、すでに良く知られているものの確認調査が多く、全く未知の新しいものの発掘という点では、努力不足であり、もう少し別の方法がなかったかと反省している。

最初に具体的な形としてまとめさせていただいたのが『甲府市史史料日録』（甲斐武田氏文書目録）であつて、これはそれまでに明治大学の高島謙氏とともに進めていた武田氏発給文書の所在調査の結果を目録化していたのである。武田家臣附のものも含めて総数二八〇点の概要を目録化したのであるが、反響はかなり大きくなり、その後、追加や訂正をさせていただいたものが、割強に及んでおり、まだまだ武田氏関連文書発掘の可能性の高いことが確認された。

ついで『史料編』第一巻として戦国期約一〇〇年間を担当させていただき、前述した武田氏関係文書を中心にして、甲府に関係したものと編年順に配列し、若干の解説を加えた。この方は、先年亡くなられました。

専門委員の中沢豊吉氏のご協力を得て、関係する記録や金石銘文も加えることができ、県内での編年史料集としてはかなりの成果を収めたものとの自負を抱いている。とはいへ見落しや無年号文書の年代推定の誤りも若干幾つてしまい、この種の作業の限界も種々感じたことが多い。

『通史編』第一巻は、関係者多数の分別執筆であったが、私は戦国期武田氏の領国經營の部分を分担させていただいた。日々の立て方から試行錯誤し、結果として史料編に多見する事項を項目立てしが、他氏執筆分との調整が不充分で、重複した記述と不足した項目が日につき、通史叙述のむずかしさを感じた。この間、「市史だより」や『甲府市史研究』に小文を書かせていただいたが、本誌に多少とも反映させることができた点はよかったです。

最後の仕事が通史ダイジェスト版の執筆であったが、これも思つ外にむずかしい作業であり、先行する『史料編』『通史編』の成績を取り込みながら、かつ読み易く面白く、しかも高度な内容を保つといった編さん目標をどれほど達成できたのか大変に不安に思っている。

## （市史編さんを終えて）

専門委員 田代孝

考古学の分野から市史に関わらせていただいたから、早十年が経つ。この間、上土器遺跡、一の森塚遺跡、川田館跡、湯村山城跡などの発掘調査が印象に残っている。

とくに、発掘作業に熱心に参加していた方々、協力的であつ

た地植者の方々、助ましの言葉をいただいた方々の暖かい心が思い出される。

各々の発掘調査の成果は、史料編や通史編の中に反映されたところであるが、一方では新知見が得られることによって、次の問題の提起がなされたともいえよう。その究明は市史以後も続ければならない課題となつて私たちの前にある。

私にとって市史は、多くのことを学ぶ機会となり、感謝の気持ちでいっぱいである。なお、市史編さん事業の今後に期待することとして、蓄積された大量の資料の保管や活用を図る方法を検討していただければと思っている。

願わくば、「甲府市博物館」等の構想に結びつくことを大いに期待したい。

### 市史編さん事業を終えるにあたつて

専門委員 萩原三雄

約一〇〇年という歳月を費やして、甲府市史の編さん事業が終了することに、無量の感がある。この事業には、職員正義編さん委員長をはじめとする委員各位、市長他市当局者及び関係市民のご努力とご協力のほか、特に編さん年の任にあたつて事務局の方々のご尽力に並々ならぬものがあつたものと、深く敬意と感謝を申し上げる次第である。

原始古代より近現代まで全十六巻にわたって甲府市の歴史を通してこの市史は本市を歴史の舞台として展開されたさまざまなものと云ふことが詳細につづられており、本市の今までの歩みを見つめ直

すための貴重な財産となつた。もちろん市史は、単に過去を振り返るだけのものではなく、むしろ今後のあり方を展望し、新たな方向を見出すためにあり、市史に載せられた種々の内容は、これに十分応え得るものになつていると思う。

私が担当したところは、原始・古代と中世の一部であったが、年々増えつつある資料をどう分析し歴史的な評価を与えるか、また考古資料を駆使する歴史叙述はいかにすべきか、とまどつた点も多々あり、意を尽くせなかつた部分が多くた。考古資料は近年急速な増加をたどつており、まだ学問的に機が熟していないこともあって、歴史叙述もいきおい不安定になりがちであるが、現時点での学問的成果としてくみとついたければと思う。

市史編さん事業によつてもたらされた成果は、市史という活字による大著のみではない。市史の広報誌である「市史編さんだより」や、「市史の夕べ」という市民対象の講演会でもうかがえるようだ。市史の歴史を理解するためのわかりやすい事業も展開されてきており、多くの市民にとって身近な歴史を見直すまたとない機会になつたのではないかと思われる。地味ではあるが、こうした事業の継続によって、新たな歴史と文化がしっかりと根づいていくにちがいない。

市史編さんそのための種々の調査活動によつて新たに発掘された資料は数えきれないが、重要な点はこれらの資料類を今後どのように保存し、そして市民のために活用していくべきかということであろう。それらの一つひとつが市民にとってかけがえのない貴重な歴史遺産であり、広く公開することによって、まさに生きた歴史教材となり、文化活動の糧ともなるからである。

本市には現在、そうした資料類を広く展示公開する博物館や文書

館といった施設が見当らないが、資料類が逸散しないうちに早期に設置することが必要であろう。甲府市史が活字による市の歩みを示すものとすれば、博物館などの文化施設は具体的な歴史資料によって今までの歩みと、さらに伝統や文化を実際に見せる場となる。

百年の大計とも「われる市史編さん事業に対する情熱を、こうした文化施設建設へとさらに大きく展開されることを切に希望するところである。

## 甲府市史編さん十二年

編さん委員　斎藤典男

昭和五十七年八月二十六日、甲府市史編さん準備委員の委嘱式および委員会が、市長室で行われた。翌五十八年四月に正式に発足する編さん委員会の準備のためである。

筆者は、これより半年あまり前、市長室広報課から甲府市史編さん事業が着手されることになり、高木伸也氏が担当することになったので協力してほしいという依頼を受け、高木氏と何回か基本構想の話し合いをした。市史の編さんがどのような展開となるか、まったくの未知の段階での打ち合せであった。

そして、編さん委員会が発足すると、しばらくは史料調査の毎日であった。これより十数年前、筆者の古文書講座の終了生を中心として結成された甲府市古文書研究会の会員と調査を進めていた金接神社文書の整理が市史の管轄となつて継続され、ついで湯村の古文書の整理が古文書研究会との共同調査として始められた。

その後、史料調査の基礎となる所在調査を行うための市史史料調査協力員が任命され、各地域の調査協力員さんにより報告された所蔵者のお宅に調査に出かけた。近代史の斎藤康彦氏・事務局の斎藤伸氏・近世史の斎藤典男という複数でもない二人の斎藤氏が、調査によく歩いた。二者の無関係の関係を説明するのに、苦心したものである。

昭和二十年の中府大内裏のためほとんど灰塵に帰した甲府の街には、まったく古文書などは残っていないのではないか、という当初の予測が見事にはずれ、史料編の近辻町方編の一巻の刊行の予定が、のちに三巻とするほどの多くの多くの文書が見つけられた。私どもにとっては、うれしい誤算であった。

村方編の史料調査も、ほとんど同時並行で行われた。各家に残された史料には古文書もあれば書簡骨董もあり、昔の教科書や俳諧もあるという種多な場合が多い。こうした大量の史料を調査・整理しながら、市史に使用できるかどうか、一点一点を判断していく調査である。しかも、ときには自分の担当分野以外の史料も調査するところもあった。

暑い夏の日、木枯らしの吹く冬、季節に関係なく市民からの情報があれば、調査に出かけた。良質の史料が残されている場合が多くたが、空振りに終わるときもあり、一晩一要の毎日であった。こうして、三年あまりは史料調査に明け暮れたが、これは本筋の毎日であった。史料編に掲載できるか、あるいは本編に利用できそうな史料が発見できたときの喜びは大きかったものである。

市史編さん委員への辞令交付が、原忠三郎市長の就任後の最初の仕事であった。原市長が「こういうことは、まだ慣れていないの

である。といいながら辞令を渡してくれたのも、いまは懐かしい思い出である。

編さん委員会が、発足したときの十年先は遠い時間であったが、河口・原・山本と三代の市長が代わり、完成の時期を過ぎて、ようやく終わったなど、感慨も新たである。

### (市史編さんを終えて)

専門委員 北原 進

もう十年も経ってしまったのか、という思いが改めてしまいます。史料を探している間は、テーマについて自信がもてる迄と考えてしましたら、そのうち時間もなくなってきて、それぞれ分析不十分なまま市史にとりかからねばならなくなりました。その執筆も力不足の上に、なぜか勤務先の多忙も増加するようになって、中途半端な内容になってしまった。もともと非力ではあったが、取り組み方が不十分であったことを深くお詫び申しあげたい。

甲府から離れている者が市史に関わるという場合、遠くから全休が見られるような、客観的立場がもてるようと思われる。それは実は期待したほどではないのだが、逆に上地感が乏しくて、史料の理解に手間どつたりすることもある。編さん室や現地委員の方には連絡なしに調査にお上した折には、夜などあちこち歩いて、つとめて「下情」に通じようとしたこともあつたが、文字通り「夜漬け」で、執筆テーマに実感を添えるまでに至らなかつた。まことに申し訳ない。

かくて余りお役に立てなかつたのに、終了となると気がかりなこ

とはある。自治体の歴史編さんが行わると、その過程で収集された資料類は、田行書・原史料・写真フィルムなどの形態を問わず、通常は図書館郷土資料室などに引継がれる。しかし最近ではもう、歩進んで、市史編さん事業が古文書館設立にそのまま発展する例が多くなってきた。甲府市史でも、当初はそういう議論がなかった頃ではないのに、もっぱら「編さん事業」の推進に集中してしまい、これが「甲府市文書館」の方に発展性をもち得なかつたのは、残念というほかない。

江戸時代・明治期やそれ以後の、比較的新しい非現用文書を収め、活用をはかる機関を作ることは、市民による市史研究をその後も継続させ、正しい釋意意識に裏付けされた市民を育成するために不可欠である。甲府市ともあらうものが、いまだに文書館設立の話がないなどと云われないよう願いたい。最近ある会合で、山梨県史も文書館(歴史資料保存利用機関)の構想をもっていない、編さん事業の一環に組み込んでいないと、関係者から聞いた。これでは県も市も、文書館法成立以後の研究や全国的な動向にまったく無関心であつたと評価されるであろう。だが県史はまだこれからでも態勢がとれる。甲府市史だって、その検討をこの編さん事業に繰り返して始めることが、最も終結の仕方である。

そのようなことを考えると、この「甲府市史研究」誌も、市として何らかの形で難解し、研究のみならず、編さん事業に浅れていた問題を検討していく機關誌とすることができないだろうか。

# 上代・中古の文学

専門委員 清水茂夫

甲府市史通史編第一巻序編第七章「古代の社会と文化」の第五節の「一文集」には1「上代の文学」として『古事記』・『常陸風土記』の伝説と歌謡、『万葉集』と甲斐、2「中古の文学」として『古今和歌集』に表れた甲斐、中古時代の物語に表れた富士、『後撰和歌集』以下六勧撰集に見える甲斐の歌が記されている。

1 上代の文学 『古事記』の景行天皇の条には、倭建命が酒折宮で御火燒の老人と歌問答をした伝説がある。『新治 篠波を過ぎて幾夜か寝つる』と命が尋ねた所、その老人が「かがなべて夜には几夜口には十日を」と答えて歌った。一人の歌は凡・七・七の二句を基本とする最も短い歌謡で片歌と呼ばれる。片歌は二つ組み合わせて完全なる歌の片方という意味であり、また左右向き合って歌う歌の片方という意味もあって、上代歌謡の形式の一つとなつてゐる。

この倭建命と御火燒の老人の唱和に連歌の起源を求めて「連歌道」のことを「筑波の道」とい、『菟葵波集』(一〇卷)「一条良基編、延文二年(一一五七)閏七月一日付准勅賜)をはじめ連歌関係の書に筑波の名を冠することが行われた。

『万葉集』と甲斐 『万葉集』では歌の句々は、ほぼ五音句と七音句に一分される。最も広く好まれた形は五・七・五・七・七・計三十一音で短歌と呼ばれ、短歌に対する長歌は、五音句と七音句を繰り返し、最後を五・七・五の形で言い収めたものである。大化改新前後の作品では、長歌の後に「反歌」を付ける習慣が始まった。反は繰り返すという意味で、長歌の内容をもう一度五・七・五・七・

七の短歌の形で繰り返すのである。また旋頭歌は五・七・七・凡・七・七の六句、二十八音の歌体で、皆作者不明の歌で庶民的な内容を特色とする。

甲斐の人々に關わりの深い歌としては、富士山の歌が目に付く。不思の嶺を高み恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを

人の原富士の榮山木の暗の時移りなば逢はずかもあらむ  
室草の都留の妻の成りぬがに見らは言へどもまだ寝なくに

2 中古の文学 『古今和歌集』は最初の勧撰和歌集で、遣唐使の

派遣によって唐の文化を攝取し華やかな宮廷生活が營まれ、漢詩も盛んで、優れた歌人も出て新しい和歌の図が迎えた。また擬國政治の支配下で後宮社会をめぐつて新しい和歌が育つた。それと共に假名文字が流布し、表詞の自由が和歌を解放し、内容・技巧に新分野を開いた。古今集を貢く耽美精神・知的な藝術的表現・現実を踏まえた美的想像などの一体となつた歌風が成立した。歌合は晴れの場の行事となり宮廷文藝としての短歌の位置は高まり『古今和歌集』という勧撰集が成立した。

(1) 恋心を託した富上

きみといへばみまれみずまれふじのねのめづらしげなくもゆる我  
こひ

あなたのこととなると迷つて いようがいなかろうが、富士山が変わることなく常に燃えているように、絶えず心の炎をかきたてている私の恋心であるよ。「恋」は「火」を戀け、「燃ゆる」の縁起となつてゐる。

ふじのねのならぬおもひにもえはもえ神だけにたぬむなしけぶりを富士山の火のように、成就しない悪い火に燃えるならば燃えなさい。神でさえ消すことができない煙を立てながら。

「おもひ」に「火」を懸ける。「古今集」卷一九に「俳諧歌」が

五音ある。俳諧は浮遊の意で、古今集の俳諧味は、懸詞や諺謡を滑稽的な技巧として用いている点、卑俗な語句を用いている点、擬人手法を用いている点にあることが指摘できる。

(2) 平安における生活を反映している和歌

かひのくにへまかりける時に、みちにてよめる。

夜をさむみおくはつしもをはらひつつ草の枕にあまたたびねぬ

(「詠歌歌」四・六みづね)

かひのかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける。

宮へ人いかにととはば山たかみはれぬくもむにわぶとこたへよ

(「詠歌下」九三七をののさだき)

しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみよをばやちよとせなく

(「詠歌」一・四五)

塙の山や差出の磯に住んでいる千鳥はあなたの寿命が八千代まで続きますよと、ちよちよ鳴いていたことだ。塙の山は山梨県塙山市、差出の磯は同山梨市にある。塙の山は笛吹川の東岸にあり、差出の磯は西岸にあって笛吹川はその中央を流れている。昔から風景の名所として知られている所である。

以上は上代文学と中古文学、「古今和歌集」について、作品をかけ解説したのであるが、歌謡や和歌が古代の作者の感情を素直に表現しているのを深く感する。「甲府市史」の中にこのような文云が豈かに取り挙げられているのは嬉しいことだと思う。それにつけても細さん寧に苦心して集められた編纂資料を整理して図書館とし、甲府市ののみならず、県下県外の研究者の研究に貢献することを願ってやまない。

## 所 感

専門委員 手 塚 寿男

いまままでに関係してきた自治体史（誌）はいくつかあるが、調査執筆しているうちに親近感が深まり、新聞の地域別欄にいち早く日

が行くようになつた。甲府市の場合は、市史編さん委員会専門委員を拝命したのが昭和五八年（一九八三）七月一日であるから、現在

までの約一〇年間は、私の生涯のうちの重要な一部となつてゐる。

大正一年（一九二二）の関東大震災より少し前、まだ学齢に達

していなかつた私は祖母につれられて、新潟尾町で豆腐屋を営んで

いる親類に二、三泊したのが、甲府の町に触れた最初であった。盛

り場の様子などはほとんど記憶にないけれども、鉄道馬車に乗せて

もらったことと、親類の家には同年の女の丁がいて、「イキンセイ」

などと発音しながら話すのをひどくハイカラに感じたことだけはあ

ざやかに覚えていた。井動番の武士が甲府の娘をからつて、くる

わ言葉を教えた名残であるとわかつたのは人分後年であるが、庶民の歴史を重視する「甲府市史」の執筆に一〇年前から参加でき

たことに、何か因縁めいたものすら感ずるのである。

「甲府市史」の既刊一四巻のうち、私がタッチしたのは史料編第二と五巻と通史編第一巻であるが、それらの執筆を終えて発刊されたのちに、正誤表と年表の作成を担当したことは、近世関係全五巻をおよそ一、二回ずつ読む機会を持つことになった。それを通じてのおまかかな印象としては、鋭利な論述のみのコンペイトウ型ではなく、ふつくらとした老舗の饅頭になぞらえられるような市史になつてゐる。

『甲府略志』は、成立当時の史觀にわざらわされた点があるが、それを十分吟味した上で史料として用いた部分も少なくない。近く完結する『甲府市史』も、将来いつかは改訂されるときがあり、略志が果たしたような歴史的な役割を演ずるかもしれない。その場合に近世時代については、享保九年（一七二四）という遅い時期に成立した直轄都市甲府が、甲府家・橋沢家の藩政を前史としながらも、勤番支配制度のもとにおいて、商工業の発達や上下両層町人の生活と文化が、どのような特徴を持ちながら展開したかを中軸に据えたらすばらしいと思う。

### 『甲府市史研究』最終号発刊にあたって

専門委員 増田廣實

「一年一書」とも、また「光陰矢の如し」とも言われる。甲府市史編纂に近世都會專門委員の一人として関与し、すでに十年の歳月が経過すると聞くと、どれ程の仕事をしたのかと見みて、心中懼心たるものがある。

甲府市制百周年記念事業として進められた今回の市史編纂は、多くの点で、過去数度にわたる市史編纂と異なる、兩期的なものであった。その内のいくつをあげると、次のような点であった。

第一は、從来の市史等は、『甲府二百年史略』以来、市制七十五年を記念して行われた『甲府市史』市制施行以後に示されるような、市制施行以後のみを対象とするものであり、また二十年記念として出された『甲府略志』にみられる永正十六年市府開設以後のみを対象するものであった。しかし、今回の市史はこれと異なり、原

始・古代から現代にいたる甲府地域の歴史の全時代を通して明らかにしてしようとするものであった。第二は、対象地域を旧甲府市域のみでなく、昭和十二年以来四次にわたる市域拡大を視野に入れ、江戸時代の旧甲府城下とその近郊八五カ村を含む現甲府市域全域とした。これも今回の大特徴であった。第三は、編纂事業規模を従来に比較して甚だしく拡大し、「甲府略志」が僅か「百有余目」を費やしたのに対し、ともあれ十年の歳月をあてた点である。

右のような特色を踏まえて、それなりの成果をあげて編纂事業はいま最終段階に至り、「甲府市史研究」も最終号を迎えた。しかし、考えてみると、こうした事業はある時点における記念的事業としてのみあってよいのだろうか。ある限られた時間内では、手際よく、効率的に事業を完成させることの意義は、一応認めはするものの、何

かしら不安を感じる。それはその事業の成果が蓄積され、次回に向けて継続・発展させられにくうかといふ不安であろう。現に今回の編纂事業の中で、常に感じていた不安も、先述したような周期的なものであるため、先行する研究成果や蓄積を欠いていたことであった。それに加えて、限られた時間内での仕事であるため、調査が手薄となり、既存の甲州文庫史料に大きく依存した。そのため、史料所在日録のような、次回市史編纂事業につなぐ基本的な蓄積が乏しい。

聞けば、今回の市史編纂資料は、新市立図書館に移管保存されるという。しかし、こうした体制が作られたとしても、資料を整理し、それを利用できる状態にならなくては、単なるゴミの山同様になる。そうした状態に陥ることを防ぎ、次回の市史編纂に役立てるためには、市史研究の火を消してはならない。市史編纂事業の新

たな段階への移行を真剣に考える時を越えたと言うべきであろう。

## 「近現代」の編纂事業を終えるにあたつて

編さん委員　伊　東　壯

早いもので、甲府市史の編纂事業が始まって、もう十年の歳月が経ち、私が編纂を担当した「近現代」の通史発刊をもって、史料編と通史は完結することになる。近現代の編纂委員に歴史が専門ではない私が何故選ばれたのか辞解はよく知らないが、近年の甲府市市政に多少とも関わりあって来た者として、保有した史料と体験を活用させることをねらっての起用であったのだろうと思つてゐる。ところが、その私が、大学で評議員、教育学部長などの多忙な職に就き、最初の数年間は殆ど市史の仕事に深く関わり合う暇がなかった。それでも竹山義夫山梨大学助教授が共に編纂委員として、編集会長をつとめられ、私はこの専門家がいることですっかり安心して、いたが、近現代の目次案をつくった後、昭和六一年、先生は早逝された。これは思いもよらぬ痛恨事であり、近現代部会の一つの危機であった。しかし、幸いなことに、専門委員として有田良太郎大教授、島袋善弘県立女子短大教授、齋藤康喜山梨大教授らの専門家が加わり、資料収集、執筆はもちろん編集にまで援助を賜つたことは、特に「近代」の史料編、通史発刊に対して決定的な意味をもつた。

「現代」については、島袋教授を除いては、殆ど専門外の執筆陣であった。専門家の集団であれば、個々人の執筆を大事にして、編纂者はよほどのことがないかぎり、クレームはつけないというのだが、一般の編纂といえよう。しかし、専門外の人々の集団となると、そ

うはない。だが、よくしたもので期せずして現代部会執筆陣の中では會議制が生まれた。史料編をつくるにあたつては、一つの史料に委員全体が目を通して、採用、不採用を決める方法をとつた。通史については、何人が日を通り、かなり徹底的にチェックした。その代わり、会議、会議の連続であり、近現代部会の回数は他のどの部会よりも多くなつた。或いはこうした非専門家集団のやりかたは、評価が確定しない「現代」を扱うにはよかつたのかもしれない。そして、いつの間にか、委員の間には親愛感が醸成され、忘年会などでの近現代部会退出のカラオケは、懐懐（遺憾？）となつた。こうして、史料編「現代I」、「現代II」、「通史」も完成していくた。

しかし、こうした委員たちの活動を陰でしつかりと支えていたのは、事務局であった。高木主幹は、作業スケジュールや内容について、学者を相手にするにはどうかなと思われるくらい、厳格、厳密であった。でも、この燃え盛る牽引力がなければ、とても今日までの完成は出来なかつたと断言できる。同時に、数野さんを始めとする何十人かの職員の労を厭わぬ努力に対しても最大限の評価を呈したい。まつたく、ローマは一口でも、一人でも成らなかつたのである。終わりに、竹山先生に事業の元成を報告し、「冥福を心から祈る。

## 市史編纂事業を終えて

編さん委員　白　倉　一　由

市史編纂事業を終えて私はほつとしている。市史編纂は私にとって魅力あるものであった。新しい発見、未知なる世界に踏み込んで

いく事に人生の喜びを感じる研究を職業とする者の育い知れぬ楽しみがあつた。初め市史の編纂委員をとされた時はやつてみたい、面白いと思つたが、實際やり満足することはできないと思つてゐた。

私は現在山梨英和短大の教員をしているが、自分の本職の教育と研究、更に理事までしてるので短大の仕事が大変で他のこと等に手が出せるものではなく、また出すべきではないと考えていた。しかし山梨の文学の現状を見るにつけひきつけられていき、最後まですることが出来たのは幸運であった。会議など出席しなければいけないのに欠席した事もあったのはすまなく、関係各位に感謝しなければならないと思っている。

私は山梨は文学不毛の地であると思っていた。この山梨を改变しなければいけないとと思っていた。しかし反面江戸・東京に近いこの地であり、武田信玄時代に現れているように英知のある県民に文学のないはずはないとも思っていた。まず山梨の文学的なものをよく採集し、研究しなければいけないと思うようになつた。このようないくにとつて、甲府市史研究と県立の文学館の創設は是非ともしなければならないことに思えてき、この事に、ない時間を割いて尽力してきた。

甲府市史の仕事はまず近世史料編の江戸時代の俳諧の翻刻から始まつた。甲府は江戸時代は全国有数の俳諧の盛んな所であつた。それを甲府市民が知らないのである。甲州文庫の上だつたものの翻刻は、後世に、甲府市民の過去において偉大な先人達がいた事の証として残る事と思われる。甲府は江戸時代、文学を始め高い文化を持つていたのである。近代においても文学の現状の正しい認識が行われていない。そのため基本文献の確認、それを基にしての通史の執筆

は文学の研究を本職とする私にとって興味あるものであった。特に「山梨日日新聞」その他の雑誌を明治から現代まで全部目を通したこととは山梨・甲府の文学、更に文化を知る上での喜びであった。

市史編纂事業における文学の研究執筆は、今まで何もされていなかつた甲府の文学の基本的なものの紹介、文学的価値の認識ができたのである。この事の意義は大きいと思う。

研究しなければいけないと思つてもそれを援助し、企画してくれ人がなければやれるものではない。この点において甲府市史編纂は恵まれていた。高木伸也・王幹が文学の研究・掲載に多人な努力と援助を惜しまなかつた事である。文学担当専門委員を思うままに増やし、過載分量も配慮して下さった。市史編纂においてはできない事である。

文学関係においてこれだけの事ができたのは高木伸也・王幹、数野雅彦主任、山田武雄、久保寺弘美、宮沢富美恵の各氏の懇身的な協力と支援があったからであり、感謝しなければならないと思っている。

今後甲府市でしなければならない事は文学を初めて文化についてである。現在甲府市が住みよい所の全国の上位になつてゐるのは、自然的条件に加え、文化的諸条件が整つてきたからである。特に文学は思想感情の形象化されたもので、人間の本質性とその生き方を問題にしたものなので、文化の基本的・最終的なものである。文学の充実は文化の完成を意味すると思う。市史編纂事業の文学の研究執筆は基礎的な最初の確認であつて、これを基にして進展していくと思われる所以、後世において再評価されると思う。

## (市史編さんを終えて)

専門委員 狩 原 克 己

特に歴史とは何かと認識もなしに、たまたま市の行政に長く携わつていて戦後の市政の動きを知っていたので、最初は行政資料の収拾などで役に立てるかと市史編纂に参加した。もう故人となつた市役所の大先輩から「市史の編纂を大々的に始めたそしたら、昭和二九年に甲府市史を出しているからその後だけをまとめるべきでは」という電話があった。そのときは、この意見にあまり奇異を感じなかつたが、専門部会に出席の先生方の討論を聞き、過去の市史を読んできて、歴史を編纂するのは單なる史実の羅列でなく、編纂の時代の反映、またその視点にあることが運びながら分ってきた。この前の市史の編纂と比較しても、所得倍増が叫ばれ高度成長の始まつた一九六〇年前半と東西冷戦が消滅しバブル経済の一九九〇年とは過去の歴史を見る市民の目も異なつて来ている。甲府市の過去の市史は行政史であるが、今度は民衆史の視点で編纂を位置付けられた。これだけに今日的テーマを掘り下げる視点に立つと以前の市史で取り上げられた周知の史実であつても新鮮な発見が出てくることを知らされた。しかし、所詮は私などは歴史の素人で、他の先生方のようにしっかりした史観とテーマを掘り下げる視点がある。

代だから資料は沢山あるかと思つて取扱整理してみると、特に行政関係には上質の資料が乏しかつた。関係部局に資料をたのんでもわずか数年前のものでも廃棄されていた。現在の市の文書保存規程では市史編纂に役立つ文書はほとんど残らない。その上、各課局で印刷発行される行政資料もほとんど収拾保管されていない。このため将来の市史編纂を考えるだけでなく、文書情報管理を見直すことが必要であるまい。

今回の市史編纂で多くの史料が収拾された。これらの保管管理とともに行政公開の為にも市政資料室のようなセクションがほしい。資料・データの整理事業というだけでなくアーフ・ツー・データな資料やデータをシステム的に人力され蓄積されて、いつも市政のビックリした情報が過去のものとともに行政執行に市民に提供されるようなシステムをこの機会に充実させてもらいたいものだ。

市史の編纂に参加したお陰で、私が市に勤務した時の市政を改めて通じ見直す機会を得た。自分の半生を見返すことが出来たような気持ちも一面で感じている。

## 変ぼうする教育の再確認

専門委員 斎 藤 左文吉

私の執筆担当は、「歴史編第四巻現代」の「戦後の教育」でした。昭和二十年（一九四五）終戦直後から今日までの四十五年間は、まだ時が余り過ぎていなくていわゆる時間のフィルターを通つてないで、歴史的評価の定まらない時代であり、また、関係者が多く現存しているだけにその取りまとめ方に難しさを痛感させられた。現

政治・経済・社会をはじめ、教育・文化・市民生活など全般にわ

たって、短期間に、根柢的な変改革、新しい制度・内容の創生など、正に目を見張るものがある。

私の分担した教育制度や内容についても、明治五年（一八七二）にはじまつた近代教育史の歩みのなかで、この戦後教育は、画期的なものであった。

庶民の中から立ち上った当市の学校復興や新教育制度・内容への移行・振興の問題は、単に経過的に推移を経るのみでは、言い表わせないものがある。関係者や一般市民の苦渋やひたすらの熱意努力が、基底にあったことを忘れてはならない。

戦後教育の特徴的な問題は、本市においても、多くの戦災校舎の復旧の問題であった。それに、昭和十二年（一九四七）からの新学制の発足とともに、新制小学校・中学校・高等学校への移行問題、それに新制大学の発足などである。又幼稚園・保育所の増設整備もある。

教育制度の変革とともに、教育内容の大改革であった。又教育行政面でも教育委員会制度の発足であり、それに学校教育の充実とともに、より教育の社会化を図る意味で、社会教育・社会体育・社会スポーツ等の基礎的試験であった。

戦後の新しい教育制度に伴う、学校教育や社会教育の整備・充実が一段落した昭和五十年に入ると、学校教育でも両面的教育から能力主義、専門教育の充実が叫ばれ、最近市内の私立高校などの対応が注目される。

又生涯教育の充実・生涯学習の機会拡充が唱えられ、市当局や市民の動きも活発化している。

戰後約半世紀に及ぶ当市の教育史を、清水茂先生と担当し、悉く

執筆を終えました。今まで、その変革と推移を一部経験的に理解していましたが、実際、時を追って内容を見て、その変革のスケールの大きさ、内容の豊富さ、そしてその成果を、驚きをもって再確認したという思いです。

### 悔いのない終稿

専門委員 坂本 德一

公費を使う行政側の史誌に、反体制側の記録を載せるのは、長い間タブーとされてきました。市民サイドに立って、十年の歳月をかけて編さんした『甲府市史』には、今まで記録できなかった事例を自由に書き込むことができました。

回戻の近・現代の社会・世相を担当した私も、「近代編」では、幸徳秋水の大逆事件に連座した宮下太吉、大正七年八月に起きた甲府の米騒動の顛末、昭和六年のSM甲府同好会の手入れなど、不況下の市民の間から起きた反政府運動の記録などを掲載することができたことを喜びとしています。

こうした画期的な『甲府市史』の編さん начиная с первоначальной подготовки, я старался участвовать в ее создании. Важно отметить, что в книге были включены документы, которые ранее не публиковались, такие как материалы о политических беспорядках в 1912 году и о движении против правительства в 1927 году. Я был рад, что смог помочь в написании этой исторической работы.

私はで恐縮ですが、『甲府市史』と併行して編さんした「赤十字山梨百年のあゆみ」「山梨県新聞版歴史」などの史料蒐集の点でも

スムーズに運び、刊行することができました。

『甲府市史』の終刊を機に、史料叢書になつてある身边を整理して、またイチから山梨したいと考えております。

## 文学の領域に携わって

専門委員 塩野 雅貴

明治以降の文学活動を、詩・川柳・文芸評論等の展開を中心として整理する機会を与えてもらいました。従来の市町村史（誌）の実態からすれば、文芸に関する項などは断片的な人物紹介程度が普通であります。甲府市史のように、市民の文化的活動の歴史の一つとして相当なページを割いた例はほとんどありません。この扱いについては、編さん委員会などでかなりの論議があつたことと推察致しますが、市民生活の要ができるだけ多面的にとらえるという委員会の方針から、結果として『甲府市史』の特色の一つを生み出したものと思われます。ただ、その場に加わる折角の機会を与えられたにもかかわらず、ご期待に添うまでは至らなかつたことは容赦していただくよりほかないません。

ところで、甲府における文学活動の展開をたどりますと、そのまま山梨県全体と重なってしまいます。もちろん、甲府の歴史的・地理的位置からすればあたりまえのことと過ぎませんが、そのあたりもまた展開の姿の中に、山梨の文化の質というか方向といふか、そういう本質にかかり、しかも現在なお抱えているいくつかのテーマの存在を感じざるにはいられませんでした。

それらの中で特に重要なテーマは、圧倒的な中央の影響力を避け

得ないものとしながらも、なおかつ山梨の文学の独自性を求めることが可能かということであったようです。小説における農民文学系諸作家の努力や詩における風詩の提高などはその試みへの苦闘を偲ばせますが、我念ながら成熟するに至らず中央からの大波に呑まれてしまいました。そして、そういう結果には、彼らを支えるは必ず市民の側の姿勢があったと思われるのです。

中央と地方を対立的にとらえてみると、政治・経済はもとより、地方が中央のメカニズムの中に組み込まれて独自性を失っていくと、いうのが近代以降の日本社会の大勢であり、「地方の時代」などといふ言葉の空しさは腹立たしいほどですが、政治や経済と違って、文化の領域ではなお独自性を求める余地があるよう思われます。それは山梨の文化の総体は県民の心の現れであり、その県民は山梨という風土の中に息づいているからです。山梨の文化に対して不毛あるいは質の低さを指摘する声が時折あります。が、その当否の検討は別として、もしそういう感じを抱くとするなら、中央を意識しそこへのつながりを求めるようとするあまりに、自己の立脚する風土への愛着が乏しいという傾向を理由の第一に挙げることになります。概観はどこまでも亞流の城を説くことできません。甲府の文学活動の歴史をたどつてみると、短詩劇文學を除いて、極少数の人の悪役善闇の姿のみがあつて、それを文学者ははずの多くの人影が見えないというのが実感でした。

## 近・現代地域史の難しさ

専門委員 島袋善弘

歴史を叙述するうえで、何をどう評価し、どのように記述するかということは、常に困難さをともなう。歴史上の事実は万人に等しいものであるにもかかわらず、個々の事実の取り上げ方や、評価は人によりまた時により異なるからである。

このような歴史叙述の一般的な難しさに加えて、地域の近・現代史叙述には別の困難がある。一つは事実が現在に近いために歴史的事実が共通認識にいたるまでに遅れず、そのため記述が一貫しないという近・現代史叙述一般に係わる問題である（共同作業でなされる場合その傾向が強くなる）。

地域の近現代史叙述の困難さのもう一つは、現に地域で生きている人や関係者と関わることを抜きうるという点である。そのため、当事者に対する配慮や政治的考慮等が優先され、叙述にバイアス（偏奇）がかかることがあるということがある。

さて、甲府市史の編纂過程でも取り扱いが難しい問題が生じた。九一年七月三日突厥マスコミでとりあげられた（朝日新聞地方版）「三者会談」問題（市議会運営に暴力団が利用されたといわれる一九七八年の事件）がそれである。この問題には二つの論点がある。一つは政治過程の扱い方の問題であり、もう一つはマスコミ報道と歴史としての取り扱い方の関係である。

第一の問題については、政治の民主的運営という原則がある現在では、公的立場にある人の言動が、取り上げられることは避けられない（この点は政治家のプライバシーとは異質な問題である。なお

「活動に責任がともなるのは政治家に限られるものではない」。

地域の近・現代史叙述の難しさは第二の点にある。事実関係の評価に共通認識らしきものが無いということと、「言い換れば未だ歴史の対象になりきっていないこと」、社会的関心の集め方（マスコミの報道）によって、ことが生きしくなりすぎて、扱いに相当慎重にならざるをえなくなるという点である（報道でなされた「市の正史に掲載される」「甲府市史を代表する事件として認知される」等という刺激的なことは、ことを歴史の世界から一気に牛々しい現実の世界に引き戻す役割を果すことになる）。

この三者会談に示されるような地方政治状況は、本来固有名詞抜きで民主的政治運営の定着過程での一つの出来事として扱われるべきことであろう。多少残念ではあるが、地域史がその時代の眼界をもつことは、事実として差し当り受け入れるものやむをえないと考えざるをえない。

近・現代地域史の在り方を含めて十年間学ぶことは多かった。記して謝意を表したい。

## 近・現代編を終えるについての私見

専門委員 清水威

近現代の歴史を書くにあたっては、甲府市の他の都市と異なった特殊な条件・構造・実体をもそのなかに浮き彫りにしたいと最初は考えた。

ところがこれにウエイトがかかりすぎると歴史としてではなく歴史に堕落した出来事の歴史的事実の追求分析に深入りしてしまうこと

になり、興味深い史実そのものはとらえられても、その間の連続し

た歴史的過程がとらえられずに現実から浮きあがってしまい事実だけが、人歩きしてしまおきらいがある。

そうかといって史実のみをまんべんなく並べて骨格を構成してもそこには面白さというか、特殊性というか、甲府市の個性はあらわれてこない。このことは当然史実に対する筆者の価値観ともからまる問題である。

近現代、特に現代の史実を事実として分析するにあたってはどこまでが歴史的事実であり、どこからが価値観に関する立場、部門であるかの判定はきわめて困難である。

現代における歴史としては歴史的現実、つまり資料をして眞実を悟らせる立場をつらぬくべきであろう。だがその外に甲府市の歴史にみられる特殊な条件、あるいはこれの歴史的展開が興味深い史実として讀者にうつたえるところがあればそれはそれで意味があるとは考えるのだが、完全に史実、歴史となっていない現段階ではそれは貴重性を欠くものといわれかねない。この両者の相関について苦しみだとうのが私のいつわらぬ告白である。次の百年史が編纂されるとき、現在の甲府市百年史近現代編が元々に史実となつたときを思うと責任の重さに愕然とする次第である。

### (市史編さんを終えて)

専門委員 新藤昭良

甲府市史は、甲府市制一〇〇周年を記念し史料編を包括した本市初の企画で、かつ、民衆史的在り方を前提として編纂された初期的

事業であります。

私は、昭和五十八年、編纂に着手の際、市助役の立場で甲府市史編纂委員会副委員長を任命され、委員委員長はじめ委員諸先生方の

ご尽力を頂いて編纂が執筆による見通しを得ることが出来、心から敬意と感謝をいたしましたのであります。六十一年、任期満了による退任後、引続き市長から、専門委員として執筆の委嘱を受け「現代編」を担当することになりました。戦後の混沌とした社会から安定へ、そして発展・飛躍へと向かう甲府市の姿を紀として綴る意義あるこの事業に一片の貢献が出来ればと思いつけて改めて参画させていただきました。

戦後行政は、サービス行政として「通り籠から盛場まで」と言われてきました。従つて政治、経済、社会の殆どが行政との関わりがあるため、既刊の市史は行政史としての性格が濃いものであります。民衆史としての市史を執筆するにあたっては市民の側からの視点に務めるとともに、その他幾つかの課題がありました。特に、現代は何時までが史紀なのか、何が史紀として妥当なのか、執筆の限界はどうかなど難しいものがありましたが委員の先生方の協議により、定の方向が確立され、この度編纂が完了いたしましたことは誠にございません。また、事務局の皆さんのご尽力に感謝するとともに、次の市史編纂のため史資料保存システムを体系化されることを要請申しあげるものであります。

### 市史編纂と私

専門委員 松本武秀

甲府市史の編纂には文芸と教育の事項の記述にかかわったが、二

つの点で苦労した。もとより自分の論学が原因だが、教育に関しては『山梨県教育百年史』が既に刊行されており、新資料の発見が困難だった。甲府市が戦災にあり、資料の多くが消失してしまっていきたこともまた困難性を増加させたのであった。文字の記述では文学と文芸、ドイツ文学の古典的手法で言えばボエジーとリテラシーの扱いをどうするか、つまり文芸性の高い作品とその作家及びその影響に限定するかいかの問題であった。この点に関して甲府市史の「文学」の事項の記述にかかわった四人の委員の間の統一的見解を見出すのも容易ではなかった。

また直接担当した俳句に関しては戦後俳句文学が、「芸母」に限定されるような甲府市の俳句状況にあり、個人レベルで言えば短歌に比べ、甲府在住の結社数も少なく、記述の多様化に困難を感じたものである。そんな意味で委員の皆さんや事務局の方々に種々御迷惑をおかけしたが、一方個人について言えば多大な学習にならなかった。とりわけ近世部会の「学芸」の事項に関しては、近世中州の儒学史や思想に関する領域は個人の人物や典籍の一部しか理解がなかったので、高須芳次郎氏の「近世日本儒学史」などを改めて読みなおすといった作業から始めたので、自己学者には大いになつた。

先行研究が少ないという意味では、甲府狂歌史の記述についても色々勉強させられた。「古原十二時」に甲府狂歌師の作品が登場するぐらいの知識しかなかったので、近世甲府狂歌の記述を一応まとめ、一つの傾向性を把握出来たのも甲府史にかかわった恩恵だと思っている。

川柳に先行する狂歌についても同様で、前句付けの若干の知識があつた程度だったが、この機会に狂歌の原典二〇冊ぐらいを読み得

たのは幸せだった。今後この面の追求をやろうと考えている。近代では、『新体詩歌』の全五冊を史料叢に収録出来たのも忘れない。日本で一番目に刊行された詩集であるが、これまで翻刻出版されていない。市史史料編に収録し、研究者の便に供することが出来たことはすばらしいことだと思う。またその出版社「微古堂」が東浦栄次郎の個人会社でなく、甲府の町衆や地方の豪農たちによって作られた会社であったことが明らかとなつた点も意義深い作業であった。

なお委員長の磯貝先生から本文批判とかかわって、平安期の国語の音便について質問を受けた体験は、研究の厳密性といったものについて教えられ、感謝を受けた。一資料の引用について語の音便まで確かめようとする先生の研究者としての態度には敬服させられた。自分の研究態度の安易さへの反省を強くうながされたものだった。總括して大いに勉強させられた市史の編纂であったように思われる。

### 「甲府市長期統計」編集を終えて

専門委員 八 東 厚 生

甲府市統計をもとに甲府市一〇〇年の歴史を市民に分りやすく伝えるぐらいいの知識しかなかったので、近世甲府狂歌の記述を一応まとめ、一つの傾向性を把握することを企図して編集作業が開始された。このとく用意された統計書は、

「甲府市統計一編」（明治三十五年）、「甲府市統計書」（明治三十七年—明治三十九年、明治四十一年、明治四十三年、明

治十四年、大正元年、大正二年、大正四年—大正十四年、昭和元年—昭和十年、昭和十三年」であった。

ついで、戦後の甲府市統計書について調査・収集作業をおこなつたところ、確認されたものは、

「甲府市勢要覧」（昭和二十三年、昭和二十五年—昭和二十九年、昭和三十一年、昭和三十二年、昭和三十四年、昭和四十六年、昭和四十七年）、「甲府市統計要覧」（昭和四十八年、昭和四十九年）、「甲府市統計書」（昭和五十年、昭和五十一年、昭和五十三年、昭和五十四年、昭和五十七年—昭和五十九年、昭和六十一年—平成元年）

であり、戦後の甲府市の統計について実質上利用可能な統計書は昭和四十八年の「甲府市統計要覧」以降であることが判明する。

利用可能な甲府市統計書が、最前期は明治末期から昭和十一年まで、戦後期は昭和四八年以降に限られることが明らかとなり作業は人きな障害に直面した。当初、「精と缺」ができると想定されていた統計表の作成そのものに唯一の利用可能な労働力資源を投入する必要に迫られたからである。

そこで、編集方針を、学生・社会人を対象としたコンパクトで実用的な甲府市統計ハンドブックを作成することに切り替え、「国勢調査」、「工業統計」、「商業統計」、「家計調査」、「財政統計」など、甲府市にかかる基礎統計の収集・整理にはばすべての作業をあてることにした。統計書の編纂ともなれば、各統計に関する解説のみならず、各統計に関する利用上の注意（調査方法、分類基準の変更など）、統計用語の説明などの必要性がでてくるものの、こ

れらの多くは断念せざるをえなかつた。また、農業統計では「山梨農業年山町別統計」、丁業統計では「丁業統計調査結果報告」、商業統計では「山梨県商業統計調査結果報告」を資料として利用するなど作業の効率性から資料の選択がおこなわれたものもある（「工業統計」と「工業統計調査結果報告」との間で実用上人差がないとも判断した）。

まったく予期せざる筋路に身を乗り出したものの上記の統計についてはほぼ可能なかぎり入手できたと思う。特に大正九年以来の「国勢調査」は、単に總人口の推移だけでなく年齢階級別人口の推移、就業者（有業者）の産業別構成の推移をも伝えており、戦前期の甲府市を語る上でも不可欠の貴重な情報を探求している。一方、作業の起らから消費名物価統計の多くが収録されなかつた。運び込んだ荷の値踏みは市場に委ねるとして今はただ航海を終えた解放感に浸りたい。

### （市史編さんを終えて）

専門委員　山本 多佳子

私は市史編纂事業に一九八六年から七年間携わつたことになる。その間、通史編二巻と史料編三巻にダイジェスト版を出したので、いつも市史の原稿縫切に追いかけられているような感じであつた。限られた時間と、これまで十分とは言えない私の能力ギリギリのところで私なりに頑張つたつもりだが、振返つて心残りの点もないとなつた。執筆者としては、関係者の聞き取り調査や、無駄も出来る余裕ある史料調査も行って奥行のある市史にしたかったと思つてい

るのだが、結局のところ、常に筋動作が繰り返され、その分、大変しんどい、心残りの多い「見切発車」的な執筆作業の強行となってしまったようだ。必要なのはラストスパートではなくスタートダッシュであった。

次に史料について気がついたこと。市役所は戦災に遭っているので戦前の史料については諒めていたが、歴後の史料も保存状態が悪いのに驚いた。市役所の文書は保存年数が決まられており、それが過ぎると思いつつ捨てられているようだ。市の執行した様々の事業の殆どについて、その過程を物語る文書は捨てられて、決定書のようなものしか残っていないなかつた。買うまでもなく、大切なのは結果より、そこに至るプロセスである。手狭な序文であることは百も承知であるが、村米のことを考えて画一的な文書保存方法を変更し、「市の行つた仕事についてはしっかりと資料を保存してゆく」というにして置けないものだろうか。史料編にアメリカの公文書館に保存されているGHQ文書を収録したが、彼の国では占領地の、しかも小さな山梨県の軍政部の残した文書までちゃんと保管しているのだから、これは、單に建物の広狭の差ではなく、自治・行政に対する責任感の大きさと思われる深さなのだと思うが、どうだろう。

また市民の皆さんが現在、発行されている会報やチラシ、書き続かれている日記など、数十年たてば貴重な史料としての価値を持つ。個人の家で保存するのが大変ならば、捨てる前に図書館等への寄託を是非ともお願ひしたいと思う。

個人的には市史編纂事業のなかで、私は非常に多くのことを学ぶことができ、大変感謝している。その点では、とても優しい有志義な七年前であった。これは偏に、ご協力を戴いた市民の皆さん、事務局の皆さんのお陰である。この場を借りて、深くお礼申し上げる。

更に、個人的感想を申し上げることを許して戴ければ、約百年間の甲府市の歴史を顧みて、何という変り方！多くの人が伝染病で死んだり、貧困に苦しむ状況から今日の繁榮を築き上げたことは素晴らしいことだが、同時に高度成長期以降の我々の物質的に贊沢な生活ぶりは地球上未嘗有の決して許されない生存のスタイルなのだと、いうことを痛感した次第である。

### 「甲府市史研究」終刊に寄せて

専門委員 植 松 光 宏

「市史研究」がよいよ第一巻目の最終号を迎えることとなりました。十年日の節目とでも申しましょうか、全十六巻の「甲府市史」が完結したので、それに伴い終刊となつたわけですから大変おめでたい説ですが、一抹の寂しさを感じます。「市史研究」にはいろいろな思い出があります。一、二を思い出ししながら紹介させていただきます。

創刊号は昭和五十九年十月に発刊されました。山史編さん担当の高木伸也さんにお声をかけられ編集小委員に仲間入りさせていただきました。メンバーは吉藤典男、齊藤康彦、秋山敬、萩原三雄の各委員に私を加えて五人。それに事務局から高木伸也、数野雅章、斎藤裕悟さん。創刊号発刊に対する期待は大きく、委員も事務局員も大変強烈切り、毎晩も夜遅くまで意見交換をしあつたことが、つい昨日の事のように楽しく思い出されます。苦労のしがいあって創刊号は評判も上々、今もある時の感激は忘れられません。

とかく内容が堅苦しくなる研究雑誌を広く市民の皆様に読んでいたたまつたが、方達として「市民の広場」を設けましたが、周知の通り、これが大変親しまれ多くの読者層を得た原因にもなったそうです。

編集の一端を荷なつたにすぎませんが、これ以上の喜びはありません。私事で恐縮ですが、私設文庫の「余麻余美文庫」を季刊発行しておりますが、その基本精神を「市史研究」から学び取りました。レイアウトを大切にし、校正に念を入れること、簡単なようですが人変異気のいる仕事です。

「市史研究」第六号には私の「愛媛の近代建築のルーツを探る」と題し、小論文とまではいかないまでも、レポートが掲載されました。藤村式建築と呼ばれる山梨の近代建築の第一人者、大工・櫻井小宮山秀太郎が愛媛の近代建築（愛媛師範学校）を建てた事実をいろいろな文献をあさり調査した結果を報告したもので、発刊後数ヶ月して、松山市の近代建築史を研究するグループから電話を受け、これがご縁で、御地におもむき、山梨の近代建築が愛媛の近代建築に大きな影響を及ぼした講話をすることを得たことはこれまで私の喜びとするところです。このグループとは、その後も資料や情報交換を積極的に行い研究を重ねて居るところですが、火種をつけてくれたのもこの「市史研究」のお蔭だと思っております。

「市史研究」第五号は、武田氏特集で誠に読みこたえのある特集号でした。義只正義、中沢信吉、服部治則、高藤典男、守屋正彦、柴田俊六ら各委員が健筆をふるい、論題も單に歴史の範囲にとどまらず考古や軍事、芸術など多岐にわたり、評議で大変な注文が相いだと聞き及んでおります。私も県内外の知人、友人から頼まれ何回も郵送したことを思い出します。一冊一冊は薄い冊子ではあります

が、全十巻の記述内容は大著に劣らずまさに甲府の歴史そのものであり、将來、学究の徒はもちろん広く市民に愛読されんことを切に願い感想の一端といたします。

### （市史編さんを終えて）

専門委員 守屋正彦

甲府市というのは山梨県の中心としての歴史が極めて長く続いて来たところで、その中でも政治的な中心としては武田信虎以降、現在までということになろう。

特に甲府が政治的中心となつた安藤町木から近世、近代にかけての文化が隆盛を極めたのも、この政治的中心と呼応していると考えられる。私の担当した美術・工艺の分野では余り、近世上の特色を強く指摘できなかつたが、市史調査を経てのちさまざま資料の発見は、今後に大きな参考となるものとなるであろう。

ブルクハルトが著わした『世界史的考察』という本には文化が成立する三つの制約として、政治的制約、經濟的制約、宗教的制約の三つを指摘している。この構図は私が文化史、あるいは美術史を考え上で大変参考となつたが、『甲府市史』を執筆するにあたって、私にとってははじめて、美術史的な流れを意識する上で念頭から離ることはなかつた。

私にとって市史調査で最も想い出深い発見は、一蓮寺の「妙見不動」との出会いであった。

甲府を中心とした山梨県は、指定文化財の優品に見るならば、平安末からの中世文化が隆盛の地で、その文化財は東国においては質

筆ともに高いもので、いかに武田氏が一世を通じて文化的な癡狂を行つ

て来たかが良くわかるところである。この中で、特に神宗は山梨県出身僧が、中央で活躍。その資料は今、わずかに垣間みるにすぎなかつたが、世に「妙沢不動」と言われ、大坂市美術館の重要な天術品や、東京国立博物館など、わが国の古美術の殿堂ではいくつか所蔵が見られる。龍藏周辺（＝妙沢）の「不動明王図」は、周辺の出身が甲斐武田氏であることを考へると、どこにあるはずだといつも私の中で宿題のように考へていた画像であった。

一蓮寺調査の折、翁書にある「妙沢不動」の名は私の中で、禅宗と時宗の疑問をいたしながら、驚きを持って「真臘であつて欲しい」と、蓋を開けて、軸をひろげたことを思い出す。止に妙沢不動、甲州最初の画僧の出現を見たのである。

この「不動明王図」は江戸時代の奉納に関するものであったが、一蓮寺は武田氏、「象氏」の開いた寺で、その由縁であったのであろう。

龍藏周辺は人籠守第十五世になつた人で、京都の禅宗文化の中心にいた僧である。この時代の「不動明王図」の作者としては、先づ妙沢と第一に指を折る画僧が、出自の地に眠つてゐることは、私にとつて「甲府市史」を担当したという自負と喜びをこの画から与えられたのである。

さて「甲府市史」も完結となる。事務局として多くの御苦労を背負われた高木氏、敷野氏をはじめとする編纂担当諸氏に深く感謝を申し上げたいと思う。私自身、満足でなかつた多くのことが心残りのままであるが、今後に新たなる「甲府の美術」を付けしていくことを思う。

## 文化遺産にふれて

調査協力員 相原誠洋

甲府市創立百周年記念事業として計画された市史編さんと調査協力員として参画する機会に恵まれ、金櫻神社を始め宮本・能泉地区内の旧区有文書等古文書の調査、宮本・能泉・羽黒地区内の石造物調査を担当した。

金峰山を始め多くの山頂の石祠、集落毎に構築された道祖神、路傍の馬頭観音、觀音堂の供養塔、庚申塔、地蔵像、鳥居、石橋、石灯篭等種類と数の多さ、これらを保存して来た先人、地域の人々の情熱に深く頭を下げる思いがする。

特に山中邦吉先生が「甲斐の落葉」に甲州で珍しき物と書いた金秋石の石灯篭、荒川ダム東側のダム建設に伴い移転された川窪町内全ての石造物には感激した。

しかし乍ら心ない一部の人に持ち去られたものもあるとか、市史資料を含めこれらの文化遺産を末永く保存することを望みたい。

### （市史編さんを終えて）

調査協力員 落合四郎

市史編さん調査協力員を引き受けた早六年が過ぎようとしています。この間特別な御協力も出来ず汗顔の至りですが、この大事業に何か関わった者として感銘を深く致しました。職員長を委員長に各専門委員の先生方や事務局の皆様の方の一休となつたチームワークに依り、膨大な史料の発掘収集や又その史料の年代別等仕事の仕事

をなし遂げられて、既に十四巻が発刊されたことあります。そして今春、甲府市制施行百周年記念事業としての甲府市史が完成を見事に出ます。争は、この上ない甲府市民の喜びと感激ひとしおで御座います。

又石造物調査に致しましても私などは特に関心もありませんでしたが、津金の海岸寺や国立公文書館などの見学等々により石造物に対する興味を起こさせる様仕向けて下さり、又小沢委員、金丸先生や山田先生並びに市務局の皆様の並々ならぬ御指導により何とかその責任の一端を果せる事が出来ました事を心から感謝申し上げると共に私の生涯の喜びと思う次第で御座います。

### (市史編さんを終えて)

調査協力員 塩原福貴

武田一丁目法華寺の山門をくぐるとすぐ右側に古体近い無縫仏の石塔が並んでいます。

その中に隨信院殿妙解日純大師、萬延元年五月十六日没という墓石と、その後方に、妙法淨院玄宣口傳居士、甲府勤番、小林吉八郎平農政という墓がある。

威名からして、かなり名だたる家門の墓であろう。甲府勤番小林喜八郎平農政の墓というのは、家系が絶えたのか、あるいは江戸へ転居となつて此地へ残されたのか、何れにしても現在は訪れる人もいない。翻つて、この石造物調査は、このまま放置すれば前記無縫仏も同様、社会から忘れ去られ、散逸し、何処へともなく消滅してしまうおそれのあるものを、何年かかる市内統括の石造物を調査

し、石造物の原本とも「うべき「甲府の石造物」」を刊行された意義は大きい。

祖先の信仰や、種々の伝承の象徴としての石造物が甲府市民の心から風化するのを防ぎ長く生き続けることを強く願うものである。

### (市史編さんを終えて)

調査協力員 橋口光治

甲府市が誕生して百年の歳月を経ました。古い城下町から近代都市甲府市の発展の歩みは波瀾もあり災害も幾度か経験した。

つねにたくましい市民性が根源となり市民の愛市努力が市勢進展の鍵となって現在の繁栄を創りあげたといつても過言ではあるまい。

産業都市への進展、誇り高い文化の創造、殊に地場産業の研磨工業は国際的に声價をあげていて。不幸にも昭和二十年七月の空襲により、市民生活も産業基盤も灰燼に帰した。

併し甲府城にきたえられた市民は苦しきと貢しさに耐え復興をなされ、更に新しい時代の経済、産業、文化を創造し、現在では全国地方都市でも屈指の位置にまで上ったという。

これを克明に詳述して後世に伝えることが今、世人の大切な役割だと信じる。それは甲府市史編さんの事業であり近く完成されると聞く。この重要な事業(行政)を担当された高木伸也室長(主幹)の完成への貢献に賛同とスタッフの各位にご苦労様でしたと申し上げます。

## 石造物調査によせて

調査協力員 古屋高治

今古文書から石造物に至るまで、尊い体験で、今迄余り関心を持つていなかった石造物にも注意するようになったことを有難く思っている。石地蔵、道祖神、庚申塔、馬頭観音等多種に亘る石造物は長い伝統と、厚い信仰のもとに守り続けられている。特に道祖神のお祭りに獅子舞をすることは共通しているが、横浜、西高橋、原宿に就いては差があり、郷土研究にも得る所があった。また大きな碑文には、現在使われていない文字があつたり、風化して読むことに悩んだり、真夏日を蚊に攻められ乍ら調べていると近所の人が蚊取線香を持って来てくれたこともある。銘文を見てこの偉大な石に、どんな道具を使用したのかと思い乍ら礎石を計り字真を撮る。石鳥居の調査は又駄目を計るのも苦心が伴う。先にも角にも、素人の私も石造物に博識となつた気分である。石造物よ、永遠に幸あれ!!

(市史編さんを終えて)

調査協力員 山岡正夫

民族の伝承学が吾が国でも青年期に入り、その研究に専念する人が多くなつて來た。市町村や個人でも史料館を設立し、市町村史の刊行も多くみられる。然し社会情勢は出来の習俗薄滅に加速度を加えてもいる。

特に農村地帯では過疎の防止と産業の発展と企業導致のため道路

の改修、敷地造成が年毎加速されて、文化史「貴重な遺跡が破壊され、祖先が生きて来た信仰と生活の歴史と鄉愁である石造物など平凡な石塊の如く取りかたづけられ破壊されていて、古史編さんによる資料の調査・収集はまさに困難であった。

天災地変が自然の現象であるとの知識がなく神仏や惡魔の祟りと信じ、庚申塔、山の神、水の神、風の神、道祖神、其他数えきれない信仰の象徴を細密に調査する度、昔古に生き残り、丁孫のために生きて来た祖先を偲び敬虔な誠であった。甲府市史は世界屈指の経済大団になつた吾国に生きてゆく人達に先祖崇敬と愛市の指針になることを信じて止まない。

## 石造物調査の思い出

調査協力員 金丸平甫

ふとした切っ掛けから甲府の住民でもないので、市の石造物調査の協力員に委嘱されてから、もうかれこれ四年以上になる。

以前から県内の歴史的な遺跡を見て歩くことは好きであったが、特に石造物を研究したことなどはなかつたので、始めのうちは調査方法などで戸惑つたが、試行錯誤を繰り返しながらだんだんと興味を持つようになつて來た。

調査の過程ではいろいろ珍しい石造物に出会つたが、以下に述べるものその一つ。

相生二丁目の光沢寺墓地の南隣にある無縫京地の中央に、高さ、米七〇厘米の石碑が立つていて、正面中央の権現の中に「行路病入合葬墓」と刻み、下部に一行路病者看守人・鶴八等 福島高吉建

立・明治四十二年三月被葬」と二行に刻まれている。

墓石の前に碑文施設があり、墓側にはま新しい生花が上げられていました。

### (市史編さんを終えて)

調査協力員 篠原武芳

甲府市では市制百周年記念として市史の刊行に当たり、調査協力員として石造物の調査に参加致しました。

私は塙部一丁目(現在移が丘一丁目)寒川派出所東入り神明神社の境内に中井代官中井清太夫の顕彰碑があり調査をしました。中井清太夫の祠並びに顕彰碑は私が調査をした中で特に印象に残った石造物であります。

此の碑文は塙部郷上史によると「天明改年辛丑秋八月日正樂院良海門朝義記」、神明神社崇敬者後藤米園書昭和三十九年三月二十日神明神社拝殿内建築委員会之同町石工業小林勇刻」と有ります。町の役員の方が神社の奥裏にある中井清太夫を祀った石の祠を案内して下さいました。祠は高さ五・七センチメートル等幅四六センチメートル等奥行六五センチメートル、年代は不明ですが天明年間の祠だと思います。

中井清太夫が神として祀られたのは塙部郷の農民の願いを聽き農民のために尼されたからです。当時の農民の苦難は並大抵ではなかつたと思います。

石造物によって昔の人々が生活の中に今も生きし次の世代に伝えられた郷土の歩みを、そして生活の変遷を思いうかべることができ、昔からの歴史的文化遺産を末永く伝えたいと思いません。

### (市史編さんを終えて)

調査協力員 斎藤紳悟

甲府市市史編さん事業とのかかわりは、昭和五十八年五月からである。前年度中すでに嘱託職員として勤務することが決まっており、

当時の山長であった河口親氏と同居したとき高森典英先生にこの旨紹介され、「よろしく頼むよ」と激励されたのを覚えている。勤務を真近に控えた四月二十六日第一子長男が誕生した。初出勤は若松町の佐々木産婦人科からであった。この子もすでに小学三年生。

この四月には四年生になる。これを頭に四人の子を持つになってしまった。まさに「一年一日の如く」である。嘱託勤務は二年十ヶ月、

この間古文書の調査、解説、整理を専らとした。退職後も執筆や調査協力員として編さん事業と関わり現在に至っているのだが、むろんこれらは私の実力や実績とは不似合の勉強であろうと受け止めている。

これとは別に、金銭を代價に勉強しなければならないという、おもそそれまで味わったことのない生活も経験することができた。辛い反面これは面白かった。いまではこの話、古文書などの講座を受け持つと一番最初にするのが私のならわしとなっている。

顧みるに私の知る編さん事業では、人と人との心の触れ合い、特に編さん事業への情熱を何よりとし、これを根幹としてきた。多くの出会いがありそれ自体が市史編さん事業であったといえ、一般的には評価の対象外になろうが事務局の大変苦労した点であり、私な

りに得るところも多かった。

残念なことは、協力員の横内豊氏、近・現代の竹山義大先生、古代・中世の中沢信吉先生ら事業半ばで他界された先生方がおられたことである。どの先生ともそれいくつもの思い出があり、また親しくしていただいた。

この十年の間に編さん事業は人格化され私は同化されてしまったような錯覚に陥っている。だとしたら私は、身体のどの部分になるのであろうか。

### 石造物調査を終えて

調査協力員　丹沢節史

現在社会は、バブル経済の崩壊ではないが物質的な豊かさから、精神的豊かさへの過渡期にあるように思える。

このことが、今回の調査を通して感じられた。本来、石造物の多くは、宗教・信仰心によって建立されているが、多くの地域では、宗教・信仰といったことには関係なく、地区自治会によつて祭礼を実施するなど、地域社会の文化伝承として、復興し、大切に承認している姿が多く見受けられた。

石造物調査は、雑草が枯れる冬季が一番であり、夏季には草に隠されていた物も発見できる喜びがある。これは、私一人ではなく、多くの調査員の皆様も同じ意見ではないかと思う。この喜びは、歴史を好みつける市史編さん事業の一員として、少しでも役立ったという満足感となり、参加できた幸運に感謝しています。

### 歴史の鼓動

調査協力員　武井静次郎

此の度の石造物の調査で最も貴く感じたことは、石造物を通じて昔の人々の心にすこしでも触れることが出来たと同時に、石造物の前に踏みこんでいる、歴史の中に吸いこまれてゆくよう自分を発見することが出来たことです。

石造物は大体は江戸時代のものでしたが、石造物のひとつひとつに当時の貧しい農民の老若男女の、せつなない並の祈りがこめられていました。農民の文化の、歴史のかすかな鼓動を聞くことが出来ました。

今回はどこまでも調査が主体でしたが、今後はこの石造物が建てられた時代の背景、村々の生活の様子などを強めていたなら、もっと面白くなるだろうと心の膨らむ思いでした。

そして私達の今の生活が将来歴史の中に、どのように遺ってゆくのだろうと思ったとき、一寸淋しい不安の気持ちがいたしました。

### 市史編さん事業を終えるにあたって

調査協力員　中澤彦一

市内全域には、数千基の石造物が、数百年の歳月を超えて、風雪に耐えながら静かにたつている。これらの石造物は庶民の生活のなかから生まれれてもいるとはしていないが、これら祖先の遺産を眺めながら、人々は數多くを学びとり生きていくことの大切さを探しだしてきたことと考えます。

町内の道筋で、世の中の移り変りを見つめている道祖神、山道の草の茂みのなかにみられる馬頭観音、山の神、水神、庚申塔等々の前に立ちどまつたとき、その姿に遠い昔をふりかえり、自然と頭が下がり両手をあわせることができるのではないでしょうか。

調査に歩きながらこのような石造物を建立した背景について考えると、これらの石造物は因作、疫病など人間の命を脅かした敵に對してひたすら神仏に祈り、生命の安全を願うとともに亡くなつた人たちの靈を慰めた先人たちの思いを物語っている。

多くの人が石造物に关心をもち、祖先が残した文化遺産を尊ぶ意識されることを願っています。

### 石造物の中の道祖神

調査協力員 中 橋 令 人

市史編さんの協力員として、石造物調査にかかわり、終った今でも踏づての右祠・石仏がなんとなく氣になります。細い路地、古い道筋にある右祠・石仏こそ人々の願いがこめられ、それぞれの思ひが伝えられているからだと思います。

なかでも、道祖神は「ミチ」を司る神として、その役目を果たしながら集落の成り立ちや、生活文化の流れの方角を教えてくれる石造物と思います。形は文字塔であり、右祠であり、丸石であつたりですが、側面や裏面に刻まれた「中之切」とか「上之組」の文字を見ると、その集落の大きさと方向を知ることができ、次の集落とのつながりが見えてきます。

記・紀神話などから道祖神を人別すると四つの類があると思います。一つは猿田彦に見られる、道案内の神、二つには蛭の神としての蛭の信仰、三つは八幡の神といわれ、四つに通じる四つ辻でのト占の信仰と思われます。

最後に久那上・岐神は、伊弉諾尊が黄泉國から逃げ母り、禊祓をした時投げ捨てた枝から化生した神といわれていますが、「クナド」「フナド」は道祖神の古い呼び名で、カミムカム、クマムの古形につながる言葉です。クムとクマとは「クム」の方が古く、クム丸、クナグ丸を意味し、隠れた丸、見えない丸の聖(性)城で、呪術行為の大切な場所を指します。又、「ミチ」は、邪魔も含めて「チ」の靈を運ぶ道で、庚申の首を拂えて進む字形(身)の初文とされています。

# 市史編さん年度別事業報告

昭和五八年度

市制一〇〇周年記念事業として、昨年度緒についた甲府市史編さん事業は、本年度は、前半期を編さん組織の確立と事務体制の整備に置き、後半期については、史(資料)料の所在状況の確認と具体的な文書の調査・整理を行い、実質的に編さん業務を開始させた。

1 甲府市市史編さん委員会の設置  
(1) 昭和五八年六月、口に編さん委員一五名を委嘱し、甲府市市史編さん委員会を発足させた。

史識経験者 七名

市議会議員 二名

市職員 六名

(2) 続く、七月一日には、執筆者を兼ねる専門委員一七名を委嘱し、時代別・分野別に五つの専門部会を置いた。

委員会及び専門部会の開催状況

編さん委員会議 五回

専門委員会議 二回

全体会議 二回

史(資料)科調査の状況

文書調査 二四回

民俗聞き取り調査 一同

座談会 一同

史(資料)科調査の状況

文書調査 二四回

民俗聞き取り調査 一同

座談会 一同

農地問題ヒヤリング 一、一人

美術・工芸資料調査 三回 三件 二五二点  
古墳分布調査 一〇日 市内一円 五五基

4 史(資料)科調査からの考察  
各時代別・分野別に行われた調査から、その特徴と今後における課題を列挙すると次のとおりである。

(1) 考古・古代・中世

ア 甲府盆地に分布する古墳の性格と解明すべき問題点が明らかになった。

イ 錦倉初期・武田時代の文書数点を確認した(法華寺・惠遠院)。なお、すでに活字化された史料についても、今後原本と照合する必要性を確認した。

(2) 近世

ア 甲府北郷の農村文書を多数発見した(廣瀬家文書)。また、甲府近世史の空白部分を埋める新史料が発見された(大木家・占屋家・倉盛野家文書)。

(3) 近・現代

ア 史料の悉皆調査を目標に、山梨中央銀行(一〇〇年史関係資料)・市役所(町村合併)・県立図書館(資料目録)などを調査した。また、市民の情報をもとに、多分野にわたる資料を調査・収集した。

今後の課題としては、地域を区切った調査方法の確立と、県・市の行政文書の調査がある。

イ 周辺農村地域の生活実態とかかわりを持つ、農地改革・農民運動等について、ヒヤリング調査を行い体験者の生の声を収録した。

(4) 民俗・美術工芸

ア 生活習慣・風俗・衣食住などについて、古老からの聞き取りを実施した。これらについては、急速な社会の進展により失われつつあるものが多いので、今後引き続き実施する必要がある。

イ 仏像・彫刻・浮世絵などを調査した（法華寺・高野さん）。

5 編さんだよりの発行  
甲府市史編さんの経過を記述するとともに、その進行状況を市民に知らせ、資料の提供など広く協力を得るため市史編さんだより（B九判八頁）を一、〇〇〇部発行した（一回）。

昭和五九年度

行つた。

会議の開催状況

編さん委員会議

全体会議

市史研究編集会議

専門部会議

調査協力員打ち合せ会議

3 史(資)料の調査状況

文書調査

美術資料調査

社寺アンケート調査

社寺の建築及び彫刻調査

民家・石造物調査

民俗聞き取り調査

4 史(資)料調査からの考察

甲府市史編さんに必要な各時代・各分野にわたる史(資)料調査から、その内容と特徴を挙げると次のとおりである。

(1) 考古・古代・中世

ア 宮本地区遺跡分布調査・宮原町古市場採集遺物の調査を行つたほか、市教委で実施した横根町横石塚古墳発掘調査へ臨場した。また、前年度実施した市内古墳分布調査について、内容の分析を行い、「甲府市史研究」創刊号で結果を報告した。

イ 古代・小世についても最近相次いで発見された「表門郷」  
と刻書した土師器や「古酒器物部高船」鉢の正倉院宝物、また牛堀家文書などの新史料を用いて「甲府市史研究」に論文を行つた。  
(2) 調査協力員 新史料の発掘を効果的に行つたため、地区別に一名の調査協力員を委嘱し、史料の所在調査を行つた。

を発表し調査・研究の報告とした。

ウ 文獻日録については、考古関係の論文等の日録を作成した。金石資料についても小中世期に係わるもの所在、草表を作成した。

#### (2) 近世

ア 市内周辺の村方文書（千代田・宮本・相川・国母・山城・玉露・里垣・甲連の各地区）を多數発見し、調査・整理した。

このなかで、甲府の地場産業である水晶工芸の発生に係わる新史料（黒平区有文書ほか）や御嶽新道の開発経過を示す古文書などを発見した（猪狩区有文書ほか）。また、市内各田村の江戸時代におけるそれとの特徴を知り得る基礎史料を採集した。旧市域の町方史料については、発見につとめたもの、わずかに江戸後期の商家の経営史料を探集したにとどまつた（小野家文書）。なお、昨年度調査した別家文書については、一部を「甲府市史調査報告書」甲府市史史料日録近世（二）として、家ごとの解題を付して発行した。

イ 県外史料については、柳沢文庫を調査し、甲府城下絵図（六面）などの新史料をはじめフィルム、四〇〇コマを収めた。これ等に加え、前年実施した史料調査の研究集約として「甲府市史研究」に論文を発表し、あわせて史料紹介を行つた。

#### (3) 近・現代

ア 明治初期から大正末期にかけて、甲州財閥の中軸として形成された若尾財閥の経営構造などを知る史料を発見した（三浦家文書）。山梨県立図書館所蔵の甲府市史に係わる文書を

カ・ド（索引）化した。また、甲府市政に關連する県所蔵の行政文書について日録カードを作成し、戦災で焼失した本市行政資料の空白を補足するとともに県・市行政の運動と展開をさぐる基礎資料とした。

#### (4) 民俗・美術・工芸

ア 市内所蔵の約二五〇の社寺に対し、江戸時代までの建築・彫刻を中心とした、山緒書・古文書・美術品・石造物などの所蔵状況についてアンケート調査を行つた（回収率五・一%）。これを基礎資料として個別に現地調査を開始した。

イ 美術資料については、甲府の美術史の中で大きな山脈となる人物について新史料を発見した（大沢家史料「中井精十郎」、一蓮寺文書「柳沢洪岡」）。また、民俗は前年に引き続き古老からの聞き取り（大里地区・宮本地区ほか）をすすめたほか、民間信仰や婚姻習俗についても調査を重ねた（甲連・千葉地区ほか）。民家・石造物についても現地調査を実施している（黒平・猪狩・中央二丁目）。

甲府市史編さんの経過の記録・調査研究成果の公開・収集史料

の活用などを目的に、次の刊行物を編集・発行した。

(1) 「甲府市史研究」創刊号 A五判

(2) 「甲府市史 史料日録」近世(一) B五判 八四頁 一、〇〇〇部

(3) 「市史編さんだより」第一号・第三号 B五判 八頁 各、一〇〇部

### 昭和六〇年度

市史編さん事業は、昭和五八年に市制一〇〇周年記念として諸について以来、本市の発展を歴史的に明らかにするための史料の調査や研究活動を行い、それらの成果は日録集や論文集などで広く公開してきたところである。

本年度はとくに近世史料編に収録する史料のセレクト・筆等に力点を置き、六一年度の発刊に向けて編集作業の進展を図った。

### 1 会議開催状況

#### 編さん委員会

二回

全体会議  
専門部会議

二七回

市史研究編集会議  
調査協力員会議

二回

史(資料)の調査状況  
文書調査

二件

一、九六九点

跡跡発掘調査 一件 計七日

社寺の建築及び彫刻調査 九一社寺

五一人

民衆聞き取り調査 二回 延八人

市内巡回見

一回 一四カ所

### 3

史(資料)調査からの考察  
甲府市史の編さん過程で行った、各時代・各専門分野にわたる史料の調査・研究から、その内容と特徴を挙げると次のとおりである。

(1) 考古・古代・中世

ア 他部会と合同で調査した後屋町勝善寺において、新たに発見された軒丸如來坐像胎内銘文約二千字の解説を行い、その全体の紹介と考察を加えた報告を「市史研究」第一号で発表した。

イ 甲府市北部上積翠町の森山原の遺跡発掘調査を行い、散落の経済外器を検出し、経済二基の遺構を明らかにした。

ウ 中世甲斐國の歴史に大きな影響を与えた武田氏に係わる文書を日録化して、甲府市史中世編集に資するとともに、其氏研究の深化と研究者の便宜を日録に「甲斐武田氏文書日録」を編集した。

## (2) 近世

ア 調査協力員や市民の情報とともに市内に点在する古文書などの調査を行った。この中では藤沢村に係る名主文書（小野家文書）・群村の近世、近・現代約300年にわたる名主文書（藤野家文書）・甲府勤番支配の裁判記録（藤田家文書）・

中世文書や農業経営文書はじめ数多くの村方文書（松木家文書）・甲府勤番の役務心得や勤番上の生活を示した史料（秋山家文書）など、甲府市史を編さんするうえで有効な史料を発見し、調査・整理したが、その一部は近世史料編の原稿として筆写し活用したところである。

イまた、前年に引き続くこれまで史料調査や甲府近世史に係わる研究の一端として「甲府代官」・「御製業」・「貢負商人」・「上矢破氷」などについての論考を「市史研究」第二号及び「編さんだより」第五号に発表した。

## (3) 近・現代

ア 甲府の近・現代史を客観的にみるうえで新聞資料は有効であり、県立図書館所蔵のマイクロフィルムから県内紙の市史に係る見出し作成を精力的に行つた（約八年八カ月分）。

イ 戦後、地方行政におよぼした占領軍政策の影響は大きなものがあるが、その実態は必ずしも明らかになっていない。これについて国会図書館所蔵のG.I.Q関係史料から、甲府に關係すると思われるマイクロフィルム約七、六〇〇コマを入手し、その内容の解説とインデックス作成作業に着手した。またその調査結果は、「編さんだより」第四号に報告したところである。

## (4) 民俗・美術工芸部会

ア 市内の社寺について、その建築様式、所蔵する仏像・彫刻などについて精力的に現地に赴き、これまでに九一社寺を調査した。この中で、特筆すべきものとしては勝善寺の夢窓国師像と祝詞墨像があり、前者は現時点では市内に唯一の国師像であって、年代も聖町初期の作品である。また後者は、先にも述べたように胎内に長文の墨書き文字が書きこまれているもので、南北朝時代の彫刻様式とともに貴重な史料といえ、調査の概要是市史研究誌上に報告のとおりである。

イ 美術工芸の調査のなかでは、県内初の山家である南北朝時代の毫筆周沢（りょうしうらしゅうたく）の作品を・萬寺で発見した。さらに江戸時代初期の洋風画法を取り入れた疋田（竜亭院）を発見したが、これらはいずれも甲州美術の黎明期を解き明かす手がかりとなるものである。

ウ 民俗調査については、攝南・道俗（生活・葬送）・民間信仰（天神・観音）などについて既ね五〇人から聞き取り調査を行い、その一部は「編さんだより」第四号にも紹介したところである。

## 4 近世史料編の原稿執筆

(1) 史料編第一、卷近世I及び同第二、卷近世IIの仮目次を作成した。

(2) 史料編に収録する史料点数及び原稿枚数（筆写原稿及び解説）は次のとおりである。

史料点数 四七四点

原稿枚数 四、八・五枚 (四〇〇字誌)

(3) 上記の原稿は本編頁数に換算すると各巻約一〇七〇頁となり予定頁数を大幅に上まわることになる。したがって、今後入稿まで、なお掲載史料の取扱選択を行い、充実した水準の高い市史を編集していきたいと考えている。

## 5 刊行物

『福さんだより』の発行 二回

『甲府市史研究』の発行 一回

『甲斐武田氏文書目録』の発行 一回

## 6 その他の活動

郷土史を学ぶ市史の夕べの開催 一回 出席者七〇人

遠跡調査報告会 一回 出席者四〇人

(相川地区連合会と共催)

## 昭和六一年度

甲府市は、昭和六四年に市制一〇〇周年を迎えるが、それを記念として、先史時代から現在に至る本市の歴史的發展形態を明らかにするため、昭和五八年以降甲府市史編さん事業を進めてきたところである。

本年度は最初の刊行年次として、近世町方史料編(全二巻)を発行するなど、刊行計画に沿って着実に事業を進展させた。

## 1 会議開催状況

編さん委員会 全体会議

二回 一回

専門部会等 八回

市史研究編集会議 一回

調査協力員会議 一回

史(資)料の調査状況 五件

文書調査 一、五三四点

美術資料調査 五〇点

寺社の建築及び彫刻調査 五件

社寺前面作成 一〇枚

民俗(風俗・習慣・年中行事)調査 延五〇回

方言調査 五地区一九人

新聞資料調査 一、五三一回分

アンケート調査(校務日誌) 二校

延三八社寺 一回

座談会 二回

史(資)料調査からの考察 二回

甲府市史の編さん過程で行った、各時代・各専門分野にわたる

史(資)料の調査・研究から、その内容と特徴を擧げると次のとおりである。

### (1) 考古・古代・中世

ア 一昨年発掘した一の森山頂の経塚遺跡の出土遺物について、その検出・採集状況や経塚の構造などに考察を加え、調査報告として「市史研究」第三号に発表した。また、一部の遺物は全国の研究者に公開するため、東京国立博物館主催の特別展に出品したところである。

イ 戦国期の甲府に関する「市史研究」第一号に投稿された論文に対する論評を同誌第三号に発表(甲斐府中蔵編)した。

このほか中世については、考古学の分野からも城郭研究の視点を一編さんだより、第七号に提出してある。

ウ 市内各所で発掘調査中の遺跡を現地に訪ね、出土遺物や遺構などを確認した（武田氏館跡・小瀬氏館跡・本郷遺跡）。エ これまでの調査・研究の成果を踏まえて「原始・古代・中世史料編」の構成・編集内容・執筆分担等について協議をすすめ、今後の有効な史料調査計画を策定した。

## (2) 近世

ア 近世町方史料編の編集過程で、当初の予定を超えた有効な史料が多数収集されたため、刊行計画を一蹴更に、町方編を一巻増刊した。それに伴って近世村方編は、年後に継り延べとなつたところである。

イ 近世町方史料編（全三巻）では、甲府の近世史を記述するうえで欠くことのできない史料四五一点を選択し、それを各項目ごとに分類し、逐一簡明な解説を付した。特に印刷段階では、学術的水準と信頼性を高めるため、原本との照合を含め翻刻・筆写などの誤りを点検し、五回にわたる校正作業を入念に行つた。

ウ 近世村方史料編の日次について検討し案をつくり、一部有効な史料については、筆写原稿を作成した。

エ このほか、市史編さんだより、第七号に「甲府と石和の間」と題して、城下町とその周辺部の出作を中心とし、発表している。  
ア 史料の収集状況をもとに、「近代史料編」の構成作りをするため、日次案・収録内容・収録形式等について協議した。

## (3) 近・現代

イ 調査済史料について日録及びカーボンの整理を行ったほか、新たに校務口誌に係るアンケート調査や統計資料調査を実施した。また県外の機関で所蔵する史料も積極的に採集し、この中で本車動力の模型図（一橋大学マイクロフィルム）など貴重な史料入手した。このほか、専門委員を一名増員してCHQ関係マイクロフィルムの翻訳作業のテンボを守めるとともに、昨年度に引き継いで新聞インデックス作業や市行政文書調査等を実施した。

ウ 座談会「女性からみた戦前の町と暮らし」を開催し、商家の生活の様子について聞き取りを行つた。

エ 調査・研究の成果については、「憲政本党内訌時代の大義と乙黒貢方」、「若尾家の地主的土産所有の推移と動向」、「座談会米軍占領下の甲府市を語る」「太宰治と甲府」などを「市史研究」第二号に、「甲府の夜見世」を「市史編さんだより」第七号にそれぞれ発表した。

## (4) 民俗・美術工芸

ア 「民俗・美術工芸史料編」の原稿作成、及びこれに係る煙草葉等の図面作成、写真撮影などを行うとともに、編集内容や組見本についても検討を加えた。

イ 市内全域で、生活慣習・信仰・祭・年中行事等古来からの伝承を対象に民俗史料調査を行つた。また、市内五地区（中央部・黒字・山城・玉置・池田）で方言調査を実施し、市域におけるアクセント・語彙・音韻などの特徴を明らかにした。

ウ 昨年度に引き続き、社寺建築物及びそれらに所蔵される仏像等について調査し、必要のあるものについては再調査のう

え画面の作成を行った。また、二代廣重の肉筆画（中火、丁目大木家）を中心とする美術資料調査を実施し、写真撮影を行った。

（2） 調査・研究の成果は「民俗・美術工芸史料編」の原稿としてまとめたが、一部については、「墓碑・墓石の変遷」「高芙蓉についての考察」を「市史研究」第三号に、「此生堂発見の平安期仏像」「新発見の洋風迷路図」を「編さんだより」第七号にそれぞれ発表した。

#### 4 原稿執筆状況

##### (1) 近世編

前年度作成した原稿（四、二七五枚＝四〇〇字）に加え本年度さらに二、六六一枚（四〇〇字）の筆写及び解説原稿を作成した。これらうち近世町方史料編（全三巻）に使用した原稿は約五、三〇〇枚（四〇〇字）である。残りの筆写原稿については通史編を記述する際、有効に活用することはもとより、「御用印」についてはいすれかの機会に活字化しておく必要のある貴重な原稿である。

##### (2) 民俗・美術工芸編

民俗編は二二章、美術工芸編は四章その他二章にそれぞれ草立てし、一、八八枚（四〇〇字）の素原稿を執筆した。今後入稿に至るまで、表記統一や写真資料の選定、レイアウトなどの一連の編集作業をすめ水準の高い市史をつくっていく。

近世町方史料編の監修

学術的な水準を保つ市史とするため、市史の目次・摘要史料の選定・史料の解説など編集全般について、専門部会長（近世）及

び編さん委員長が監修を行ったところである。

#### 5 市史編さんだより

##### （特集号）刊行物

「同」	「同」	A五判	B五判	四、〇〇〇部
「同」	「同」	A五判	B五判	二、〇〇〇部
「同」	「同」	A五判	本文七五九頁	本文八、〇〇〇頁
「同」	「同」	A五判	本文七八〇頁	本文七八〇頁

#### 6 「市史研究」第三号

##### A五判一、六頁

##### 7 今後必要となるべき事項

近・現代の教育・交通・及び自然・地理を担当する専門委員各一名程度の増員が今後、必要とされる。

#### 昭和六二年度

市史の編さん事業は市制一〇〇周年の記念事業として位置づけ、昭和五八年に緒について以来、史（資料）の調査・収集・整理や研究活動をすすめ、それらの成果を基に精力的に市史の執筆を行っている。

本年度は第二回の配本として、民俗編（別編I）・美術工芸編（別編II）を発行するなど、刊行計画に沿って着実に事業を推進している。

1	八八枚開催状況
2	編さん委員会
3	全体公議

## 専門部会議

市史研究編集会議

調査協力員会議

## 史料の調査状況

### 文書調査

方言及び近・現代  
ヒヤリング調査

座談会

市史講座

新聞インデックス作成

社寺建築調査

遺跡発掘調査

民俗及び美術資料

史(寶)料調査からの報告

甲府市史の編さん過程で行った、各時代・各分野にわたる史

ある。

### (1) 考古・古代・中世

ア 武田信虎が永正二六年(一五二九)、つづじが崎に城を築

いて移転するまで、武田氏の本拠地として使用された川田館

(石和館)の推定地(甲府市川田町)を発掘調査した。

その結果、明確な遺跡は確認できないものの、土器質土器

を主体とした約100片の土器・陶器片が出土し、中には青

磁(一四世紀)・黄瀬戸(一六世紀)など中世陶器も見られ

ることから、輪廻との関連性をも含めて、引き続き検出物について分析・研究中である。

### 二七件 二、二三三点

八件 一五人

一回 六人(製糸関係者)

一回 出席者、一〇人

一、五〇〇口分

九社寺

一カ所 五、五三人

八カ所

一カ所 五、五三人

た。

その結果、甲斐国分寺(八世紀後半)の古瓦と確認できる一枚作りで織のたたき日調整の平瓦、素井八葉唐草文の瓦当

頭をもつ軒丸瓦などを多數検出し、本県においても数少ない

古代瓦窯跡の発見となつたところである。

なお、同遺跡発掘中に、予期せぬ成果として弥生時代の住

居跡も発見され、これらの出土品はプラスチックケース五〇箱ほどになり、古代寺院の瓦窯跡解説及び弥生時代の生活

様式を採るうえで貴重な資料として、現在、整理・分析を行つ

ているところである。

ウ 文獻史料に関しては、武田朝全蹟に係る(宮原町向山家)

文書、同時期の山岳信仰・御師に係る(湯村三丁目長江家)

文書、中世から近世初頭にかけた社寺文書(武田三丁目今沢

家)などを調査した。

また、研究の一端として甲斐武田氏の発祥である初期甲斐

源氏を探る研究として小論文「甲斐源氏と甲府」を(編さん

だより)第八号に発表した。

エ 史料編第1巻の原稿執筆では、県内外に所在する関係史料

をリストアップして、収録すべきものを選択するとともに原

本との範合を行つた。

これまでに作成した原稿は案原稿で約一、八〇〇枚(四〇)

○字である。

(2) 近世

ア「近世町方史料編」(全二巻)発刊に伴い史料調査は、比

重を村方史料に替わる形で展開した。

その中で、近世初頭の年番神主を定めた郷土(府中八幡神社文書)や江戸中期の水品発振に係る文書(帝都地区有文書)など有効な史料の発見をみ、さらに市域では極めて珍しい各種生産品目が記載された畠方干枯小前帳(深原町岡家文書)等を採集することができた。

これら調査・研究の中から、「甲府県入植取扱会所と人塙商社」・「寛政元年における上矢坂水」・「甲府における時の鋪装」・「江戸初期における信州酒停止願について」の論文を「甲府市史研究」第四号に発表し、また「市史編さんだより」第八号に「甲府製糸支配の成立について」、同第九号に「武家屏風へ春女駆け込みのこと」・「疎賄法」などの小論文の発表や、史料紹介を行った。

ウ「前年発刊した『近世町方史料編』(全二巻)を題材として市史講座を開催し、同編を執筆した委員が分担して講演にあつた。

(3) 近・現代

ア「末年度以降に発刊する予定の近・現代史料編の項目の立て方・執筆分担などについて協議をするとともに、史料の少ない分野について、精力的に史料調査を行つた。

とりわけ、明治以降、本山産業の主柱であった製糸業に関しては史料的に空口であり、それを補うため、繭糸業関係者

による座談会の開催や個別のヒヤリングを行い、また県外所蔵機関(脚谷製糸博物館)の文書調査などを実施して史料の採集に努めた。

イ「本市の政治・経済など市勢に係る基礎資料とした「甲府市統計書」について、欠年部分を国内外の所蔵機関(国会図書館・大学等)を調査して補充・整備するとともに、ワードプロ

機能を駆使して項目別編年処理を行い、利用し易いデーター処理を行つたところである。

ウ「県立図書館所蔵の新聞マイクロフィルムから、明治・大正期の紙面中、必要な記事見出し(新聞インデックス)を作成した。

エ「甲府市史に係る調査・研究の成果として、「市史研究」第四号に「市制施行以来の甲府市人口」・「明治期の製糸業と川木問題」・「古屋家の米穀販売の実態」・「座談会」女性から見た戦前のまちと暮らし」等の論文及び調査報告、また、「編さんだより」第八号に「戸のない家の発見」・「玄法院発見の古社と取扱書」・同第九号に「正宗山島と甲府」・「古屋財閥研究の視点と資料」と題した報告・小論文を各々発表したところである。

(4) 民俗・美術工芸

ア「前年度作成した民俗・美術工芸編の未完成に新たに行つた。聞き取り調査や資料調査の成果を書き加え、原稿を完成させた。

また、市史に掲載する写真の撮影や社寺建築物等の図版を作成し、この卷の特色である視覚的な市史づくりをすすめた。

イ 調査活動の主な内容は、言語・方言調査（国長・新田）、市内主要社寺の平面図作成、祭り及び年中行事の状況、生業及び交易、民間信仰、絵画及び彫刻・工芸等についてであり、市域を通して実際に現場に足を運び確かめた市史づくりに努めた。

#### 4 原稿執筆状況

##### ア 原始・古代・中世編

史料編第一巻に掲載する市内の追跡及びその出土物の国版原稿、古文書や文献から抽出した史料の筆写原稿及びその解説原稿を各自作成した。

##### イ 近代編

史料編第六巻に収録する史料の筆写原稿・国版及び解説原稿約一、五〇〇枚（四〇〇字）を作成した。

##### ウ 近世（村方）編

史料編第五巻に収録すべき史料の筆写原稿約一、八〇〇枚（四〇〇字）を作成し、必要なものについては解説を加えた。

##### エ 民俗・美術工芸編の監修

本筋にわたる記述について詳細な監修作業を行った。

#### 5 刊行物

##### 『市史編さんだより』 第八号

B 五刊

『市史編さんだより』 第九号

B 五刊

『市史編さんだより』 八頁 二、〇〇〇部

A 五刊

『甲府市史研究』 第四号

A 五刊

#### 7 今後必要となるべき事項

特になし。

#### 昭和六三年度

甲府市史の編さんは、市制一〇〇周年記念事業に位置づけられて昭和五八年に續につき、以来、本市の発展を歴史的に解明するため必要な史料の調査や研究活動を積極的に推進し、これまでに史料編五冊の発刊をはじめ目録集、論文集、編さんだよりなどを広く市民の前に供してきたところである。

本年度は史料編第一巻原始・古代・中世、第五巻近世、第六巻近代の三巻を発刊すべく編集に専念し、計画に沿った事業の進展をみた。

#### 1 会議開催状況

編さん委員会

一回

全体会議

一回

専門部会議

一回

市史研究叢書会議

一回

調査協力員会議

一回

#### 2 史(資)料の調査状況

遺跡発掘調査

一カ所

湯村山城、延一九〇人

・四六頁 一、〇〇〇部

『甲府市史 別編 I 民俗』

A 五刊

『甲府市史 別編 II 美術・工芸』

A 五刊

『甲府市史 別編 III 美術・工芸』

A 五刊

五五〇頁 四、〇〇〇部

文書調査

ヒヤリング調査

三四性  
三回 八人

二回「戦後の市政を語る」他

座談会

市史講座

新聞インデックス作成

石造物調査

市内石造物予備調査、一二七件

九カ所

史(資)料調査からの報告

九カ所

3

甲府市史の編さん過程で行つた、各時代・各分野にわたる史料調査・研究から、その内容と特徴を擧げると次のとおりである。

(1) 考古・古代・中世

ア 個別期の築城である湯村山城跡を発掘調査した。

湯村山城は「高日齢記」大永三年の条に「湯ノ島ノ山城御普請初」とあることから築城年代が明確で、中世城郭の研究上重要な山城として発掘が待てていたものである。

今回、市史編さん委員会考古・古代・中世部会が行つた発掘調査で検出された、遺構・遺物の状況などから、湯村山城の築城上の特徴や城域・山入口部等が明らかとなり、その扱つた役割を考古学的に明確していく上で重要な資料となつた。

また、これらの成果の一端は『甲府市史史料編第一巻 原始・古代・中世』の中へ最新の資料として収録したが、詳細については今後、「市史研究」誌上に発表していく。

イ 文獻史料については、大泉寺・石和町三枝家等を調査し、史料的価値の高いものについては史料編第一巻に収録した。

ウ 「甲府市史研究」第五号を武田氏特集号とし、市域を中心とした武田氏に関する研究論文を発表した。

二 「甲府市史史料編第一巻 原始・古代・中世」を編集し、印刷費附では五回にわたる縦密な校正作業を行い、信頼性の高い書とした。

三回 八人

二回「戦後の市政を語る」他

一回 出席者八二人

七〇カ月・、八〇〇日分

市内石造物予備調査、一二七件

九カ所

(2) 近世

ア これまでに調査した近世文書をさらに再点検して甲府を取りまいた村々の様子が知れる史料を抽出し、近世史料編(村方)の中へ収録した。

イ また前年に発刊した近世史料編(町方)を含め、客観的な事実に立脚した近世史のすじみちについて調査・研究を行い、日次案・項目別の素原稿を作成した。

ウ 史料編第五巻近世(村方)の編集作業を行い、五回にわたり校正をもって精度の高い書を完成させた。

エ 史(資)料調査の中から、市民への諮詢の提供として「甲府で砂糖をつくる」(編さんだより・〇号)を発表した。

(3) 近・現代

ア 明治九年から第二次世界大戦までにおける甲府の史的展開を解説するため、県・市の行政資料、新聞記事、在地資料などを加え、県外の資料所蔵機関まで手を広げて、史料収集を行つた。

また、座談会・ヒヤリング調査を実施し、史料に裏付けを

れる市民生活の推移を把握することにも努めた。また、G.H.Qマイクロフィルムの解説作業を行い、多角的な史料収集を行つた。

イ 収集した史料は近代史料編へ掲載するため項目別に整理し、さらに近・現代部分において多角的に検討を加え、史料を収集する努力を行った。

ウ 史料編第六巻の編集作業を通して校正作業を細密に行い、水準の高い市史とした。

エ 調査・研究の成果の一端として、「甲府市史研究」第六号に「昭和職前期の甲府製糸業の構造と特質」、「製糸女工と糸業」、「終戦直後甲府における食糧事情と市の対応」を、また「市史編さんだより」、「甲府のある旅館の盛衰」、「歌集・無題の光り」を各々発表した。

オ 市民・美術工芸

ア 市域に点在する石造物は、先祖が残した貴重な文化遺産であるにもかかわらず、時代の変遷とともに急速に失われようとしている。このため山史編さん事業の一環として、総合的に調査し、将来に記録として残すこと目的に石造物調査を開始した。

イ 本年度はその子備調査期間として民俗担当委員の指導のもと一人一人の調査協力員によって一・七件の石造物を調査した。

エ 調査・研究活動の成果として、「甲府市史研究」第六号に「愛媛の近代建築のルーツを探る」を、「市史編さんだより」、「甲府市史史料編第五巻」近世IV(村方)をそれぞれ発表した。

(4)

ア

ア 市民・美術工芸

ア 市域に点在する石造物は、先祖が残した貴重な文化遺産であるにもかかわらず、時代の変遷とともに急速に失われようとしている。このため山史編さん事業の一環として、総合的に調査し、将来に記録として残すこと目的に石造物調査を開始した。

ア 本年度はその子備調査期間として民俗担当委員の指導のもと一人一人の調査協力員によって一・七件の石造物を調査した。

ア 調査・研究活動の成果として、「甲府市史研究」第六号に「愛媛の近代建築のルーツを探る」を、「市史編さんだより」、「甲府市史史料編第五巻」近世IV(村方)をそれぞれ発表した。

(1)

ア 原稿執筆状況

通史編第三巻の日次案を作り、各章・節にわたる素原稿を作成した。

史料編第七巻現代に取扱すべき史料を選別し、筆写・解説の素原稿を作成した。

(2)

近世編

通史編第二巻近世の日次案をつくり、各章・節にわたるあらましを記述した素原稿を作成した。

5 史料編第一・五・六巻の監修

原始・古代・中世史料編村方、近代史料編の各々について、目次立て及び各章・節にわたる収録史料、また解説文の記述内容を詳細に監修した。

6 刊行物

『市史編さんだより』第〇号 B五判  
八頁 一、〇〇〇部  
『市史編さんだより』第一号 B五判  
八頁 一、〇〇〇部  
『甲府市史研究』 第五号 A五判  
九二頁 一、四〇〇部  
『甲府市史研究』 第六号 A五判  
一〇〇頁 一、四〇〇部  
『甲府市史史料編第一巻』原始・古代・中世 A五判  
一五〇頁 四、〇〇〇部  
『甲府市史史料編第五巻』近世IV(村方) A五判  
九五〇頁 四、〇〇〇部

『甲府市史史料編第六巻』近代 A五判  
一、〇五〇頁 四、〇〇〇部

## 平成元年度

### 会議開催状況

#### 編さん委員会

#### 全体会議

#### 専門部会議

#### 市史研究編集会議

#### 調査協力員会議

### 史(資料)の調査状況

#### 文書調査

#### ヒヤリング調査

#### 市史講座

#### 石造物臨地研修

#### 甲府市史の編さん過程

(1) 考古・古代・中世  
ア 考古・古代・中世に關わる発掘や基本的な文献調査は前年までに大半を終え、本年度はそれ等出土品などをさらに詳細に分析・研究して、通史編記述のお考とした。

イ 調査・研究の一環として、「甲府市史研究」第七号に「甲府の歴史—地域の発展を中心として」、「市史編さんだより」第一号に「武田信玄と府中八幡社」を発表した。

ウ 市史調査としては、古代氏族の系譜研究史料として注目される古屋家（一宮茂國・神社神主）家譜を調査し、また中世文書（源氏家文書）の所在確認及び原本照合を行った。

### 近世

ア これまでに発刊した近世町方（全三巻）及び村方史料編纂に、基礎に、調査・収集してきた史料全般を詳細に研究し、客観的事実に基づいた通史編原稿を執筆した。

イ 新たな史料調査からは、甲府勤番に係る文書（古屋家）、神社経営（大神宮・大木家）を示す文書などを採集した。

ウ このほか調査・研究の成果として『甲府市史研究』第七号に「近世甲府狂歌歌詞」、「市史編さんだより」第一二号に「蓮寺吉公のこと」、同一二号に「代官越頭平岡次郎右衛門和由について」などを発表した。

### 近・現代

ア 前年作成した、明治元年から昭和一〇年までの近代甲府の素原稿に、新たに歴史資料の調査によって得た成果を加え、内容を精査し完成原稿とした。

イ 近代通史編の編集作業を通じて、校閲・校正・監修を細密に行って水準の高い市史とした。

ウ 史料（現代）調査については、行政文書（甲府市・田宮本村）を再点検するとともに、新史料の採集に努めた結果、蒲鉾研究に關わる文書（今井家）、農業関係文書（京島家）など市域の農業の実情を示す有効な史料を入手した。また商工會議所文書を総合調査し、比較的史料の少ない「経済」部門を埋める史料を採集した。

二 研究発表としては、本年度が市制一〇〇周年の年に当たるため、「甲府市史研究」第七号を一〇〇周年特集号とし、明治以降甲府の発展に係る論考、「明治初年の甲府市政」、「甲府市の背景・水産物充葉界の歩み」、「甲府市シビルミニマム」と新総合計画」「いわゆる四百年会について」、「行政近代化をめざす甲府市の組織改革」などを掲載した。

(4) 石造物(民俗)調査

昨年度の準備期間を経て、本格的な調査に入った本年度は、専門委員(民俗)、調査協力員、事務局が相互に機能を果しながら市域石造物の悉皆調査を行い、これまでに一、八二四点を調査し、写真撮影・計測・スケッチなどを含む個別のカードを作成した。

これらの調査活動の中で「応永八年の板碑を発見」は「市史編さんだより」第一号で報告した。

4 原稿執筆状況

(7) 原始・古代・中世史編

通史編第一巻の日次を時代ごとに編別し、章節項を立て、さらに小見出しを設定して原稿を執筆した。

(8) 現代通史編

昭和一〇年以後の本市のあゆみを客観的に記述した素原稿を作成した。

史料編第七巻、通史編第三巻の監修

現代史料編の掲載史料及び近代通史編の記述について総合監修作を行った。

刊行物

『市史編さんだより』第一二号 B五判

八頁 一、〇〇〇部

『市史編さんだより』第一二号 B五判

八頁 二、〇〇〇部

『甲府市史研究』第七号

一〇二頁 四〇〇部

『まんが甲府の歴史』上・下一冊セット B五判

上巻 一四三頁 下巻 一五九頁 七四、〇〇〇部

『甲府市史史料編第七卷現代』 A五判

約一、〇〇〇頁 四、〇〇〇部

『甲府市史通史編第三卷近代』 A五判

約一、〇〇〇頁 四、〇〇〇部

7 今後必要となるべき事項

現代史料編は当初昭和二〇年から同六一年までを対象として一冊にまとめる計画であったが、昭和六四年の市制一〇〇周年までを収録することに変更となつたため、昭和二五年で二区分し、分冊して発刊するところとなつた。したがって全体の刊行計画を一巻増刊する必要が生じた。

平成二年度

市史編さん事業は、昭和五八年に市制一〇〇周年記念として総について以来、本市の発展を歴史的に明らかにするための史料の調査や研究活動を行い、それらの成果を基礎にして、これまでに史料編七冊、別編二冊、通史編一冊の計一〇冊を刊行してきたところである。

本年度は、考古・古代・中世及び近世の通史編を発行すべく、史料の統合・表記基準・史料編との対応などに意を尽くしながら、水平の高い市史の編集につとめた。

### 1 会議開催状況

#### 編さん委員会

一回

#### 全体会議

一回

#### 専門部会議

一回

#### 市史研究編集会議

一回

#### 調査協力員会議

一回

#### 文書調査

一回

#### 文書調査状況

一回

#### ヒヤリング調査

一回

#### 市史講座

一回

#### 石造物調査（市内・門）

四カ所 四人  
八九人

#### 都内所蔵機関合同調査

一回

#### （合同研修会）

一回

#### 史（資料）調査からの報告

一回

甲府市史の福さん通鑑で行った、各時代・各分野にわたる史料の調査・研究から、その内容と特徴を挙げると次のとおりである。

### (1) 考古・古代・中世

ア 考古・古代・中世に関わる通史編叙述のお考とするため、文献史料・発掘出土品等を分析し事実に基づく記述とした。イ 史料調査としては、中世武田期の文書（小倉家）を調査し、

### 3 史（資料）調査状況

#### (4)

ア 昨年に引き続き本年度も石造物調査を継続して、併せて三、

〇〇〇点（基）の調査カードを発行した。これらを種類別に分類整理し、必要なものについては再調査を含め、英文の解説・

所在確認及び原典照合を行った。

#### (2) 近世

ア 前年作成した江戸期全般にわたる通史編原稿に、新たな史料調査によって得られた成果を加え、全体の内容を精査し、

完成原稿とした。また、近世通史編の編集過程では、事実関係・記述の整合性などを点検するとともに、校閲・校正・監修を細密に行って、質の高い市史とした。

イ 新たな史料調査からは、比較的史料が少ない地域であった人里地区から、農村経営・農業用水の状況を示す地方文書（今橋家）を採集整理した。また、市中におけるせり駒にかかる文書を入手した。

ウ このほか調査・研究の成果として、「市史（福さんだより）

第一回号に「伊勢町から山田町」を発表した。

#### (3)

#### 近・現代

ア これまでに調査・収集した現代にかかる史料を細点検し、史料的に明白の分野について、市行政文書をはじめ、各所蔵機関（著）の文書調査を精力的に行い、有効な史料の確保に努めた。それらを基礎にして、現代史料編（II）の編集作業を促進し、原稿を完成させた。

イ 研究發表としては、「市史（福さんだより）第一回号に「銀が丘の今と昔」を掲載した。

#### (4) 石造物（民俗）調査

解説原稿の作成などにあたった。

これらの調査活動の経験を「市史編さんだより」第一四号にして発表した。

#### 4. 別編執筆状況

別編Ⅲ「甲府の歴史」、別編Ⅳ「年表・索引」、「甲府の石造物」の素原稿を作成した。

#### 5. 通史編第一・二巻の監修

原始・古代・中世及び近世通史編の記述について縦密な監修作業を行った。

#### 6. 刊行物

『市史編さんだより』第一四号 B五判

八頁 一、〇〇〇部

B五判

八頁 二、〇〇〇部

A五判

一〇四頁 一、四五〇冊

A五判

約八五〇頁 四、〇〇〇冊

『甲府市史通史編第一・卷原始・古代・中世』

(A五判 約八〇〇頁 四、〇〇〇冊)印刷工程進行中

#### 7. 付記

通史編第一巻(原始・古代・中世)、同第二巻(近世)の原稿を完成原稿とし印刷上程へ入れたが、途中原稿作成での遅れが影響して発刊は新年度へずれこむところとなつた。

### 平成三年度

市史編さん事業は、昭和五八年に市制・〇〇周年記念として既に

ついて以来、本市の發展を歴史的に明らかにするための史料の調査や研究活動を行い、それらの成果を基礎にして、これまでに史料編

七冊、別編二冊、通史編一冊の、〇冊を刊行してきたところである。

本年度は、これに加え「通史編第一巻原始・古代・中世」(同第二巻近世)「史料編第八卷(現代II)」の発刊を行い、市史編さん事業の今体計画を着実に前進させた。

#### 1. 会議開催状況

編さん委員会

一回

全体会議

二回

専門部会議

九回

各種編集会議

一九回

・現代史料編II

六回

・甲府の歴史

二回

・甲府の石造物

八回

・文学

二回

調査協力員会議

一回

史(資料)の調査状況

県立図書館・県立文学館・市立図書館・市立図書館・市立図書館

内各部局など、関係機関を中心実施した。

石造物確認・補足調査

四五カ所(約二〇〇基)

市史講座

H.I.一一・

・於総合市民会館

演題①山梨の近代文学

◎中井鶴氏と市河莊

ため、彩色された挿図の撮影を実施して市史刊行物への利用を図った。

甲府市史の編さん過程で行った、各時代・各分野にわたる史料(資料)調査・研究から、その内容と特徴を擧げると次のとおりである。

### (1) 古代・中世

ア 前年度より継り越した通史編第一巻を年度当初に発行した。  
 イ 昭和六三年度に実施した湯村山城跡発掘調査について、遺構・遺物の詳細な分析を行い、「甲府市史研究」第九号に「湯村山城発掘調査報告」を掲載した。また、このほかの調査・研究の成果として、「市史編さんだより」第一六号に「甲斐源氏の土着と市河井」・「甲斐における猿楽」を発表した。

### (2) 近世

ウ 昭和五八年度以来、調査・撮影した史料写真を整理し、保存・活用し易いようアルバム化した。

ア 近世通史編については、前年度からの採録指図をとったが、記述の整合に意を用い、写真・図版も多くして内容豊かに近世甲府の姿を描き出した。

### (3) 近・現代

イ 石造物(民俗)調査  
 ア 昨年度執筆した現代史料編の原稿を精査し、史料的価値の高い史料の掲載に努めた。また現代史料編I・II収録史料をはじめ、これまでの収集史料や新聞インデックスなどの再点検を行って、現代通史編の構成づくりを進め、素原稿を作成した。

イ 戦前の町内会文書を綴った「武井家文書」のマイクロ撮影と引き伸し(一、四四八枚)を行い、「武井家文書集」の編集方法を検討するとともに、写真版下を作成した。

ウ 研究発表としては、昨年度調査した甲府商工会議所の所蔵史料を分析し、「一九五〇年代における山梨県の経済と商工會議所」を「甲府市史研究」第九号に掲載した。また、文学関係の研究として同誌に「小尾十三の世界」・「地方文学成立の条件」の一論文を発表した。

### (4) 石造物(民俗)調査

ア 昨年度までに作成した凡そ三、〇〇〇点の石造物調査カードを一枚ごとに丹念に点検し、約二〇〇基について補足調査を行い、貴重なものについては本格的な写真撮影を行うなど、調査内容の精度を高めた。

イ また、「甲府の石造物」編集会議を八回にわたり開催し、市史研究誌へ掲載したことによって市域から写本が発見され

原稿の精査及びリライトを行った。

ウ 石造物及び民俗調査に関する研究としては、「甲府市史研究」第九号に「廿人町の歴史」・「石造物聞きあるき」を発表した。

その他、市史刊行物の原稿執筆・編集状況

#### 別編III「甲府の歴史」

ダイジェスト版的要素が強いため、近世通史編選延の影響もあって全体調整に時間が要したが、年度後半から編集作業を促進し、読み易さ、親しみ易さに重点を置いて文脈を整えるとともに、並行して口絵写真の選定・撮影を行っている。

#### 別編IV年表・索引

近世・現代関連部分の追加項目の拾い出しを精力的に進め、正確かつ詳細な年表・索引づくりを行っている。

#### 甲府市の統計

統計データの収集・分析に時間が要したが、日々原稿が完成する見込みである。

※平成三年度は、通史編第一巻・同第二巻の発行が前年度より譲り越されたことによって刊行物の編集が重なり、事務量が増大・

集中したため困難性が生じ、本年度刊行予定図書の一部(別編

III・別編IV・石造物・統計・武井家文書)が平成四年度にずれ込むところとなった。

#### 刊行物の監修

平成三年度に刊行した原始・古代・中世通史編、近世通史編、現代史料編IIの構成・記述内容について綿密な監修作業を行った。

その他、当年度編集中の別編IIなどについても逐次監修作業を進めた。

#### 刊行物

「市史編さんだより」第一六号 八頁 一、〇〇〇部

「市史編さんだより」第一七号 八頁 一、〇〇〇部

「甲府市史研究」第九号 一〇二頁 一、四〇〇冊

「通史編第一巻原始・古代・中世」 八五五頁 四、〇〇〇冊

「通史編第二巻近世」 九七六頁 四、〇〇〇冊

「通史編第三巻近代」 九九四頁 四、〇〇〇冊

#### その他

平成四年度は市史編さん事業の最終年次であり、昭和五八年度の事業開始以来、調査収集してきた史(質)料について、将来にわたって保存と活用が計られるよう検討を要する。

# 参考資料

甲府市史編さん的基本的構想（案）

はじめに

県のほぼ中央に立地し、県都として飛躍をつづける本市は、また、歴史的にも県内諸地域に対し常に先進的な位置を持ちつづけて来た。

その発祥は、遠く五千年ほど前にさることがでないと「われて」いる。跡つて、中世の武田信虎の時代には、現在の市名である「甲府」がすでに地名として登場し、都市的な原型がつくられるとともに歴史的にも重要な舞台が形成された。

明治に至つては、二十二年に本市が成立し、いまから七年後の昭和六年には、いよいよ市制一〇〇周年を迎えるとしている。

木構想は、その市制一〇〇周年記念事業として、本市の歴史を集大成する「甲府市史」を編集発行するための計画案であり、同時に、

今後学者を含めて設置される予定の「甲府市史編さん準備委員会」に提出する市史編さんに関する「当局原案」の性格を持つものである。

ところで、これまでこうした市政発展のあゆみをそれぞれの節目において「甲府略志（三十一年）」「四〇年誌」「八〇年誌」、「甲府市史（市制施行以後）」として、刊行されて来たところであり、これらはいずれも本市発展の動脈を記録する貴重な資料となつ

ている。

しかし、「甲府略志」を除いては、共通して通史部分の叙述が少なく「行政史」的色彩が強くなっている。この点については、既刊の「甲府市史（市制施行以後）」編さん趣旨の中でも、「得失、教訓に及ぶ通史が発刊された場合これ（市制施行以後）はその現代版にある」と、本格的通史編さんを今日に託された経過もある。加えて、準備段階に入った最近において、郷土の歴史学者や研究者、また市議会などからも県都甲府市における「質した通史編集を求める声が寄せられているところである。

これ等の経過と状況を踏まえて、本案では「市制一〇〇年史」を編集するのではなく、「市制一〇〇周年記念事業」として、史料編集した先史時代から現代までを記述する本格的な通史としての「甲府市史」を編さんすることを目標としている。

史料編の発行については、市史のすじみちを証するとともに、他面では、最近における急速な世相の変遷に伴い、古来の貴重な史料が日々消滅・散逸している時にそれを収集整理して次代に残していくことからも重要な課題であり、通史編に先行して発行する計画である。

なおこの史料編発行に伴う将来的な展望として、編さん過程において調査採集される膨大な史料を、単に市史編さんの目的だけでなく、編さん事業が終了した後もこれを整理保存し、行政面ではもとより一般の利用に資して永く活用するために「資料館」（仮称）建設の必要性を強調するものである。この問題については今後政策日標として検討されることを期待したい。

中止までもなく、修史の事業は極めて長期に及ぶ地道な仕事の積

み重ねから集成されるものであり、関係機関の援助とともに、執筆者を兼ねる歴史学者始め、多くの都上史研究家や貴重な史資料を保管している市民一般の御協力を得ないことには達成できない。そのためには「甲府市史」編さんを、郷土における一大文化事業として広く理解を求め、本事業が円滑に推進できる環境と体制つくりのため工夫と努力を惜しむではなくと考えている。

よろしく、御検討と御批判をお願いするところである。

### 甲府市史編さん基本構想（案）

#### 1 編さん趣旨

明治二二（一八八九）年七月に市制が施行されてから昭和六四（一九八九）年七月で満一百〇〇年を迎える。

その記念事業として、先史時代から現在に至る本市のあゆみを明らかにし、広く一般に本市の歴史を理解するための資料を提供するとともに、郷土における文化の発展と愛護心の高揚を促して、将来の市政発展に資するため甲府市史を編集発行する。

#### 2 編集方針

(1) 書名 甲府市史  
(2) 内容 先史時代から現在までの本市のあゆみを次の立場から記述する。

ア 日本全体の歴史のうごきと関連させながら、甲府市発展の史的展開を明らかにする。

イ 民衆史科を重視し、民衆の生活実態と推移を中心とする。

ウ 一般に解り易く、表現はできるだけ平明にする。

(3) 市史の構成及び規模

ア 市史は通史編・史料編の二部構成で全一卷とする。

(イ) 通史編は總説一、原始・古代・中世一、近世一、近代一、現代・民俗一、の七巻構成とする。

なお、總説については各編の総まとめをしたものである。

(ウ) 史料編は、原始・古代・中世一、近世一、近・現代一、年表・索引一、の四巻構成とする。

イ 規格 各巻ともA5判で全巻の頁数は約九、二〇〇頁とする。

(ウ) 通史編説・史料編・近現代編は、一、〇〇〇頁、年表・索引は六〇〇頁、他は八〇〇頁)

ア 発行部数と配布 索引は六〇〇頁、他は八〇〇頁)

(イ) 通史編 四、〇〇〇部（第一巻總説のみ）、〇〇〇部

乙 史料編 四、〇〇〇部（第一巻總説のみ）、〇〇〇部

丙 年表・索引 二、〇〇〇部（各巻共。ただし第一巻のみ四、〇〇〇部）

丁 索引 一、〇〇〇部（各巻共）

エ 統計圖 一、〇〇〇部（各巻共）

オ 索引 一、〇〇〇部（各巻共）

カ 発行 一、〇〇〇部（各巻共）

キ 発行 一、〇〇〇部（各巻共）

#### 3 編集計画

(1) 単巻計画 所要期間 昭和五七年度中

ア、史資料調査・採集 イ、史資料整理検討

ウ、執筆 工、編集 オ、校正 カ、印刷

キ、発行

これら一連の所要時間と発行予定期限については、最大の間

題点であり、また計画と実際で大きな違いが生じる点もある。すでに刊行した他の都市の例でも、「二・三年のすれば少ない方で、五・七年の延期もめずらしくない。しかし、一〇〇周年事業としての意義を考えると、少なくとも史料編集卷の発行をそこに合わせることが望ましく、発刊計画のメドとした。

#### 上別添「編集刊行年次計画書」参照（略）

### 4 編集機関

#### (1) 編集委員・執筆者

甲府市史は、地方史ではあるが、一貫した歴史の流れの中で体系づけられるべき性格のものであり、この編集にあたっては、歴史学一般に通ずる認識と方法に立脚すべきである。したがって、編集委員（学識者）・執筆者は歴史の専門学者（特に郷土に關係深い人を選定する）に依頼する。

#### (2) 編さん準備委員会

市史編集刊行計画を策定するため準備委員会を設ける。（別添「編さん準備委員会設置要綱」参照）（略）準備委員会は、市史の日次、規模、執筆者の選定、編集日数、発行口等、編集刊行全般の基本的計画を協議検討するとともにその大綱を定める。

委員としては次の方々を予定し、本年（S五七）八月には発足の考え方である。

ア 市議会の議員 一名

イ 学識経験者（歴史学者）六・七名

（氏名略）

ウ 主体者側（当局） 六・七名

助役、市長室長、調整管理部長、企画部長、総務部長、教員次長

工事務局

広報課長、市史編さん担当主査、事務取扱職員数名

（3） 編さん委員会

準備委員会で策定される編さん計画に基づき編さん事業を具体的に促進させるため「甲府市史編さん委員会」（仮称）を次により成ける。

ア 昭和五八年四月を目途に条例で設置する。

イ 構成は、市当局、市議会、学識経験者、執筆者とし、人数、運営方法等具体的な事項については「準備委員会」において検討協議する。

### 5 編さん事務局（編さん室）の体制

本年度四月に担当が新設され、現在一名（主査）で準備を進めているが、初期の段階としては、市の体制にある。しかし五八年度以降、具体的な編さん業務を進めていくためには、概ね次の職務に対応できる事務局体制が必要となる。

#### (1) 市史編集に関する一般事務

市史刊行計画の樹立、編集会議の開催、決定方針の実施、予算案の編成と予算の執行およびこれに付随した決定文書の起案や支出関係書類の作成、図書その他の物品の購入管理、市史の編集校正配布、また来室される編さん委員や執筆者、資料提供者の応対や接待等。

#### (2) 史資料の調査、収集および整理保存

市史の質的評価をなすものは、その基礎となる史（質）料の

質と量によって決まるとも言える。

そこで、史(齊)料については全時代、各項目、全地域を網羅するよう大量に収集することが望ましく、これに伴う事務局

業務としては、資料の所在の確認、借用文書、記録と整理、筆

写、統計表、図版原稿写真の作成等がある。

これらの業務に対応する事務局職員数は、他都市においては、

都市の事情や、市史の規模によつても異なるが、五名～八名程度いるのが通常である。

本市においても五八年からは実際の作業に入る工程であり、その必要とする人數は予定される事務量を推定すると、職員四名、嘱託二名の計六名である。

内訳（業務及び一般事務二名、史料の調査収集二名、嘱託（古文書の解説、整理、筆写）二名）

なお、事務局職員の人選にあたっては、市史編さん事業が通常一〇年以上の長期にわたるものであり、できれば、一般史的素養を備え情熱を持って職務に当たる人、即ち自ら市史編さん業務を希望している職員を配置する事が望ましく、特に關係担当に配慮を願うものである。

(4)

編さん事務室  
編さん業務を円滑に推進する上で、事務室のレイアウトは重要な問題である。

恐らく数万点にも及ぶであろう史資料を整理し、保管するための空間や、簡単な編集会議や打合せができる機能を備えた場合、必要となる広さは最低でも七〇坪位であり、狭めるならば九〇坪は確保したいところである。

事務室のレイアウトにあたって、考慮すべき最低基準は次の点である。

ア 外部（一般事務室）と遮断でき、鍵のかかる部屋。

イ 特大の作業机を置けること。（絵図や古文書を広げる）

ウ 壁面が多く、整理棚を設けることができる。（

編さん室内のレイアウト

事務室（写真撮影）

作業室（写真撮影）

資料室

6 予算（概算）

(1) 本事業に必要とする経費の見込総額 一・五七、二二〇千円  
(2) 有償配布による収入見込金額 一二・六、〇〇〇千円

(一部四、〇〇〇円とした場合)

(3) 年度別収入及び支出見込状況

年 度	年度別収入												年度別支出											
	預金利息	預金利子	預金利息	預金利子																				
平成元年	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	
平成二年	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	
平成三年	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	
平成四年	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	
平成五年	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	（四四）	

業も山積している。

この時に、相当な年月を要し、人や経費もかなりのものを必要とする本事業に対してもは論議もあるところであろう。しかしながら、「地方の時代」と言われる中で、本事業の歴史教育的側面や知的文化的事業としたその全般を通じて、地域における連帯感が促進され、新しい時代における郷土意識の確立に役立つならば、次代への大いなる遺産として意義深い事業であると考えるものである。

以上

今後の日程

昭和五七年

七月下旬

八月下旬

八月

同日

第一回準備委員会

第五

（会議）

## 甲府市史編さん準備委員会設置要綱

（昭和五七年八月一日  
市 第二二号）

### （設置）

第一 甲府市史編さんについて、協議及び検討するため甲府市史編さん準備委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

### （所掌事項）

第二 委員会所掌事項は、次のとおりとし、協議及び検討の結果を

市長に提言する。

（1） 甲府市史の編集・刊行計画の策定について。

（2） その他、市長において必要と認める事。

### 第三 委員会は、委員若干名をもって組織する。

2 委員は、市議会の議員及び学識経験者のほか市の職員のうち

から市長が委嘱又は任命する。

3 委員の任期は、編集・刊行計画について市民に提言するまでの間とする。

### （役目及び職務）

第四 委員会に会長及び副会長各1名を置く。

2 会長及び副会長は、委員が互選する。

3 会長は、会務を總理し、委員会を代表する。

4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

### （会議）

第五 委員会は、会長が必要に応じて招集し、会長がその議長とな

る。

- 2 会員が必要と認めるときは、委員でないものを会議に出席させて意見を述べさせることができる。

(専門部会)

- 第六 編集・刊行計画策定における専門的事項の協議をするため専門部会を置く。
- 2 専門部会の委員は、委員会の委員の中から会長が指名する。

(庶務)

- 第七 委員会の庶務は、市長室広報担当において処理する。

(規則)

- 第八 この要綱に定めるものほか、委員会の運営に関する必要な事項は、会員が委員会にはかって定める。

附則

この要綱は昭和五七年八月一日から施行する。

甲府市史編さん大綱

昭和五八年二月三日  
平成元年五月二日改正  
平成二年七月五日改正

一 編さん趣旨

- 甲府市は、明治二十二(一八九〇)年七月に市制が施行され、昭和六四(一九八九)年七月で満一〇〇年を迎える。  
その記念事業として、先史時代から現在に至る本市のあゆみを明らかにし、広く一般に本市の歴史を理解するための資料を提供

するとともに、鄧七における文化の啓発と愛郷心の高揚を促して、将来の市政発展に資するため甲府市史を編さん刊行する。

二 編さん方針

- (1) 本市のこれまでのあゆみを通史編と史料編・別編に分けて編さんし、日本全体の動きと関連させながら本市発展の歴史を開を明らかにする。
- (2) 記述の立場を民衆の側に置き、民衆の生活実態と推移を中心にする。

三 規模及び規格

- (3) 市民に親しみ易いように写真・図版等ができるだけ多く掲載して、表現は平明にする。

総巻数 一六巻

A5判 各巻六〇〇頁~一〇〇〇頁

四 市史の構成

(1) 通史編………四巻

第一卷 原始・古代・中世

第二卷 近世

第三卷 近代

第四卷 現代

(一巻当たり、〇〇〇頁とする。)

(2) 史料編………八巻

第一卷 原始・古代・中世

第二卷 近世I

第三卷 近世II

第四卷 近世III

を置く。

専門委員は、特に専門的知識を有する者のうちから、市長が委嘱する。

〔部会〕  
市史の編さんについて、固有の専門的事項を調査研究する

ため、時代別・部門別に部会を設ける。

部会は、委員及び専門委員によって構成する。

#### 〔協力員〕

史(資)科の調査・収集について、情報の提供など広く市民の協力を得るため、協力員を置く。

協力員は、史(資)科所在等について精通している者の中から、地域別に委員長が委嘱する。

#### 五

- (3) 別編……四巻  
一 民俗  
二 美術工芸  
三 「甲府の歴史」  
四年表・索引・日録  
(一巻当たり六〇〇頁とする。)

#### 編さん刊行期間

編さん刊行の期間は、昭和五八年度から六七年度(平成四年度)までの十か年とする。

(各別の編さん計画は別表のとおりとする。)

#### 六 機構

##### (1) 甲府市市史編さん委員会

市史の編さんについて、市民の立場にたった編さん方針を確立し、編さん事業を円滑に推進させる機関として学識経験者・市議会議員・市職員・十人以内で組織する「甲府市市史編さん委員会」を設置する。

##### 〔編さん委員会議〕

市史編さん方針その他編さんにに関する重要な事項を審議する。

##### 〔専門委員〕

史料の調査・収集・翻訳などをを行うため委員会に専門委員

#### 七

##### 市史の執筆

(2) 市史編さん事務局  
市長室広報・市史編さん担当(事務局)で所管し、編さん業務を処理するとともに、史料の調査・収集・整理・保管などをを行う。

#### 六

##### 市史の執筆

市史の原稿は主として編さん委員(学識経験者)と専門委員が執筆する。ただし、特別の部門については、委員外の専門家に原稿の執筆を依頼することとする。

甲府市史編さん刊行計画

刊行物	年 度	年次別実施状況								
		昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成1	平成2	平成3	平成4
史料編第一巻 原始・古代・中世		調査		執筆	●					
〃 第二巻 近世I (町方)		調査	執筆	●						
〃 第三巻 近世II (〃)		調査	執筆	●						
〃 第四巻 近世III (〃)		調査	執筆	●						
〃 第五巻 近世IV (村方)		調査		執筆	●					
〃 第六巻 近代		調査		執筆	●					
〃 第七巻 現代I		調査		執筆	●					
〃 第八巻 現代II		調査			執筆	●				
通史編第一巻 原始・古代・中世			調査		執筆	●				
〃 第二巻 近世			調査		執筆	●				
〃 第三巻 近代			調査		執筆	●				
〃 第四巻 現代			調査			執筆	●			
別編 I 民俗		調査	執筆	●						
〃 II 美術工芸		調査	執筆	●						
〃 III 「甲府の歴史」				調査		執筆	●			
〃 IV 年表・索引				調査		執筆	●			
『甲府市の統計』						執筆	●			
『甲府の石造物』					調査	執筆	●			
『武井家文書集』					調査	執筆	●			
『甲府市史史料目録』(近世-1)	●									
『甲斐武田氏文書目録』		●								
『甲府市史研究』	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
『市史編さんだより』	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
『まんが甲府の歴史』(上・下)					●					

(注)

- S61.11.28改正 「近世町方史料編」(全2巻)を3分冊に変更。「近世通史編」の刊行年次をS63年度より延期。
- S63.5.2改正 「民俗・美術工芸史料編」(全1巻)を「別編I 民俗」「同II 美術工芸」の2分冊に変更。
- H1.12.22改正 「現代通史編」の刊行年次をH2年度からH4年度に延期。
- H2.7.25改正 「現代史料編」(全1巻)を「現代I」「現代II」の2分冊に変更。
- ※H2年度発刊予定の「原始・古代・中世通史編」「近世通史編」及びH3年度発行予定の「甲府の歴史」「年表・索引」「甲府市の統計」「甲府の石造物」「武井家文書集」は、1年ずつ発刊を延期した。
- ※なお、一部刊行計画の変更(増巻)のため、残務整理期間のH4年度を刊行最終年次にあてた。

## 甲府市市史編さん委員会設置条例

職務を代理する。

### (会議)

(昭和五十八年二月二十一日)  
(甲府市条例第十一号)

### (設置)

第一条 市史を編さんするため、甲府市市史編さん委員会（以下「委員会」という。）を置く。

### (所掌事務)

第二条 委員会は、市史編さんに関する事項について市長の諮問に応じ、調査審議し、その結果を市長に答申する。

### (組織)

第三条 委員会は、委員二十人以内をもつて組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから、市長が委嘱又は任命する。

### 一 学識経験者

### 二 市議会議員

### 三 市職員

### (委員の任期)

第四条 委員の任期は、二年とする。ただし、再任を妨げない。

### 2 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長及び副委員長)

第五条 委員会に、委員長及び副委員長各一名を置き、委員の互選によつて定める。

2 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その

### (会議)

第六条 委員会の会議は、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数をもつて決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

### (専門委員)

第七条 委員会に、専門の事項を調査するため必要があるときは、専門委員を置くことができる。

2 専門委員は、特に専門的知識を有する者のうちから、市長が委嘱する。

3 専門委員は、当該専門の事項に関する調査が終了したときは、解任されるものとする。

2 専門委員は、委員会に属する者及び専門委員は、委員長が指名する。

3 専門委員は、必要に応じ、部会を開くことができる。

### (報酬)

第八条 委員会は、必要に応じ、部会を開くことができる。

2 部会に属する委員及び専門委員は、委員長が指名する。

### (庶務)

第九条 委員会の庶務は、市長室において処理する。

### (委任)

第十条 この条例で定めるもののはか、委員会の運営に関する必要な事項は、委員長が委員会に委託して定める。

### 附則

1 この条例は、昭和五十八年四月一日から施行する。

2 特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例

(昭和三十一年十月条例第一十一号)の一項を次のように改正する。

別表の一番の項の次に次のように加える。

11の2	市史編さん委員会	財 員 会 員 額 及び専門委員 員 額	日額 8,600円 日額 7,900円
------	----------	---	------------------------

### 市史編さん調査協力員設置要綱

(昭和五十九年五月一日)  
(市 第一 号)

この要綱は、昭和五十九年五月一日から施行する。  
附 則

この要綱は、昭和五十九年五月一日から施行する。

甲府市史執筆要項

第一 この要綱は、甲府市史編さんに関するべき史

(資)料の新たな発掘と、甲府市市史編さん委員会(以下「委員会」という。)で実施する史(資)料の調査・収集を効率的に行うため、市史編さん調査協力員(以下「協力員」という。)を置き、もって市史編さん事業の円滑な推進を図ることを目的とする。

#### (所掌事項)

第二 市内に散在する、市史に必要な史(資)料の所在について調査し、その情報を提供するものとする。

#### (選 任)

第三 協力員は、郷土史に关心を持ち、土地の事情に明るいもののうちから、「委員会」の推せんを得て市長が委嘱する。

#### (任 期)

第四 協力員の任期は二年とする。ただし再任は妨げない。

(会議への出席)  
第五 協力員相互の情報交換及び、「委員会」との連絡調整のため、会議の必要があるときは、「委員会」の委員長の要請に応じ会議へ出席する。

第六 協力員に関する庶務は、市長室広報担当が処理する。

一 市史の執筆にあたっては、「甲府市史編さん大綱」による調査方針を指針とする。  
二 各専門部会は、担当する各編について、あらかじめ総予定期数、全体の構成、内容目次、執筆分担、分担枚数、原稿締切期限などを定め、各部会との合意に基づいて計画を決定する。  
三 各専門部会は、提出された各編の計画について、全体計画の立場から検討を加え、各部会長と協議のうえ、必要な調整を行い、各部会との合意に基づいて計画を決定する。

四 編さん委員会は、提出された各編の計画について、全体計画の立場から検討を加え、各部会長と協議のうえ、必要な調整を行い、各部会との合意に基づいて計画を決定する。

五 原稿執筆にあたって、各専門部会長は、担当する各編ごとの原稿の形式及び内容の一貫性を保持し、叙述のバランスを整え、通史的叙述として要求される最低限の基準を保持するよう配意する。

六 各専門部会の部会長は、提出された個々の執筆原稿に対し、執

筆者に修正を求める又は執筆者と協同して、あるいは、執筆者の同意を得て、自ら補筆訂正にあたることができる。

七 前項の手続きを経た原稿を、各専門部会は編さん委員会に提出する。

編さん委員会は、提出された原稿について全体計画の立場から各専門部会との間に必要な調整を行い、各部会は調整の結果、必要な修正を行う。

八 原稿調整の段階において、歴史的叙述の一貫性を損わない程度において、各原稿執筆者の固有の学説の展開を尊重する。

各執筆者は、原稿の性格が論文集の原稿ではないという点を考慮しつつ、学術的にも水準の高い原稿を執筆することを目標とする。そのため執筆者相互間において、異説が併存する結果となる場合、各部会長はその旨を併記する等の配慮をし、全体として叙述の一貫性を保持するよう努力する。

九 执筆原稿の技術的統一を保持するため、執筆は全編を通じ、別に定める執筆基準に基づいて行う。全編を通しての執筆基準にもれた各編ごとの特性に基づく技術的統一の基準については各部会で定める。

○ 执筆原稿に対する報酬、各書編著者に対する編集謝金、また特に委嘱した校閲謝金、挿図・写真に対する報酬等については、別に定める。

# 甲府市史通史編 執筆要項

## 一 編さんの方針

(一) 歴史の舞台となつた地理的・自然的環境を序編として、原始・古代から現代までを日本史全体の動きと関連させながら、本市発展の史的展開を明らかにする。

記述の立場を民衆の側に置き、民衆の生活実態と推移を中心にする。

文章記述は一般市民が理解し、活用できるよう配慮するとともに、文体は平易な口語体とする。

公的な編著であるので、歴史的事実に基づいて客観的な立場で、記述をする。

市民に親しみやすいように写真・図版等ができるだけ多く収載する。

(二) (三) (四) (五) (六) (七) これまで発刊されている『甲府略史』（大正七年）・『甲府市制四十周年記念誌』（昭和二年）・『甲府市制六十周年誌』（昭和二十四年）・『甲府市史—市制施行以後』（昭和三十九年）とのつながりは考慮しないで新しい構想のもとに編さんする。

## 二 表 記

表式は、縦書きとする。ただし、写真・図版等の見出し（キャプション）、説明は横書きとする。

記述は、平易な口語体とし、「—である」、「—であった」とする。

漢字は、「常用漢字表」に従つて使用する。上記以外の漢字や歴史用語は、章、節の初出に平仮名でよりがなをつける。  
仮名遣いは、「現代かなづかい」に示されているところに従つて使用する。送り仮名は、「送り仮名のつけ方」に示されているところに従つて使用する。

専門学術用語の使用は、なるべく少なくする。

句読点は適切に付し、セントンスは長くならないよう配慮する。

おどり字の漢字は「々」とする。かな文字の反復は「つづく」、「それぞれ」と文字を反復して書く。

例 …つ…つ 一人ひとり

そのほかの詳細は、執筆細則によることとする。

### 三 見出しの設定

(一)

「見出し」は、章・節・項・小見出しを原則とする。それ以外は本文の中で処理する。ただし「節」によつては項を省くこともできる。  
また「節」によつては小項目をおくこともできる。

(二)

「見出し」は単見出しとし、八字以上の場合は二行とする。  
章・節・項に使用する数字は、漢数字とする。例 第十一章

(三)

小項目に使用する数字はカッコつきの西数字とする。

### 四 执筆細則

項 目	書 き 方	例 示
1 敬語・敬称	○文中の人名は、敬語を省略し、敬称も使用しない。	
2 固有名詞等	○各節項の難読及び読みづらい初出文字に平仮名を付し、読みを示す。 ○漢字は「常用漢字表」にある場合はそれを用いる。	
3 地名	○歴史的なものを表わす場合は、その時代に用いられた郷村名を使い、適宜その下に( )で現在の地名を示す。 ○別名(ら、通称)が広く一般に使われている場合は、別名で示し、必要に応じて本名等を( )で記入する。	信玄公(信玄) 加牟那(カムナ)
4 人名	○後に改名する場合には、一般に知られているものを記し、必要に応じて( )で併記する。 ○外国人名(中國・朝鮮人名は除く)は、姓と名の間に・(中黒)を入れ、片假名で記入する。必要に応じて姓のみを記入する。 ○地図記号は特殊なものを除き、四十地理院発行の地形図記載の	ウイリアム・キンニモンド・ バルトン 凸、凸
5 地図記号		

## 6 数字

地図記号による。  
○本文中には漢数字を用いる。ただし、必要に応じてアラビア数字も使う。

○原則として漢数字の単位語のうち、「百、千」は使用しない（概数では使用可）。○を使用して数を小さく、年月日には十の単位語を使用する。

## 7 計量単位

○数の幅を示すときは「～」を用いる。

○数字のあとに計量単位を示すが、特に必要のある場合は、メートル法表記を（～）で示す。

## 8 時代名と幕府名

○原則として、政権の所在地名を使う。ただし、考古、文化、美術、近現代史等での慣用語は、それを用いる。

○日本年号を用い、その下に西暦（～）で西暦年の数字を記入する。ただし、西暦の世紀を表わす場合はそのまま使用する。

## 9 年号

○改元の場合は、原則として当該年の初めから新年号を用いる。ただし、必要に応じて正確に年号を記入する。

○南北朝時代は、原則として史料中の年号を使用する。

○日本年号と西暦の関係は、単純に置きかえる。特に必要のある場合は、（～）で往來を記入する。

○明治五年までは陰曆を用い、それ以後は陽曆を用いる。

五四一人、一〇二〇石  
寛永二十年十月一日

五五〇人六〇〇

一町六反・五歩  
三〇間（五四メートル）

ミリメートル

センチ

キロメートル

江戸時代、南北朝時代、  
天平文化、大正時代

応永三十年（一四二三）

明治八年（一八七五）三月

十九世紀後半

明治元年（一八六八）、慶應四年（一八六八）七月十三日

貞和五年（一八四九）

明治四年十一月一日・  
一八七一年一月十日・明治四

年（一八七一）十一月一日

10 史資料の引用

○史資料の引用はできるだけ読み下し文を用い、「」で記入する。長文にわたる場合は、改行して二字下げて記入する。なお史資料名等は末尾に（）で記入する。

○引用史資料の表記は、常用漢字を用いる。

○引用史資料は、できるだけ簡潔に用い、史料編に収録したもの

を全文引用することはしない。

○史料編収録史資料を引用した場合には巻名、史資料番号または

頁を（）で記入する。

11 文献の引用及び  
参考

○本文中に文献を引用する場合は、「」を付して掲載し、末尾に（）で出典を示す。出典は、図書の場合は編著者名、書名を、雑誌論文等の場合は、執筆者名、論文名、誌名、号数の順に記入し、それぞれ一行にわたる割書きとする。

○参考文献名は、特に必要のある場合（）で記入する。

12 注記

○注記はなるべく少なくし、（）で記入する。

○草筋本の注記一覧は付さない。

○図・表・写真は、各章別、図・表・写真別に通し番号を付ける。

○出典及び所蔵者名は（）で記入する。

○図・写真的最大規格のものは、（ $2\frac{1}{2} \times 5\frac{1}{2}$ ）とする（題名などを下に注記）。

○執筆者名は、各章筋本に記入せず、巻末に一覧を付す。

14 執筆者名

「……」（坂田家文書）  
.....

（小野家文書）

（史料編第六卷四〇二頁）  
（史料編第一卷四〇二頁）  
（露木寛『江戸時代の甲府上木』）

（村上直一近世甲斐における甲府代官と甲府市史研究第二号）

引用（参照）文の執筆者名を解説文中に用いる場合は○氏とする。

3-16  
5-35  
(一編著者名)

## 五 通史編の造本構成

### 一、体裁

A 五寸

### 二、ページの組み

たて一段組み

一ページの組み

柱、ページ数字

(一) (二) (三) (四)

卷末資料

九点出しおこしで一ページどりとする。  
二二ボリント活字、改ちよう奇数頁おこしで一ページどりとする。  
一四ボリント活字、節のみのときは四行、節と項が統くときはあわせて五行とする。  
一二ボリント活字、項のみのときは二行、項と小項目のときはあわせて四行とする。  
一〇ボリント活字、小項目のみのときは一行とする。

九ボリント活字、ゴシック吊見出しとする。

できるだけ多く入れる。三ページに一点を目安とする。(執筆者が用意する)

寸法 A (一ページ大)、B (二分の一ページ大)、C (四分の一ページ大) の三種類(題名、注記を含む)。  
原則としてつけない、折り込みページはさける。

(六) 写真・図版

(七) 卷末資料

写真	「○○○○」	1-1
図表	「○○○○」	1-5
表	「○○○○」	1-2

- ◎草は改ちょう、章名のみで原稿用紙一頁どりとする。
- ◎筋がはじまるときは用紙をかえる。
- ◎次の項がはじまるときは一行あける。
- ◎小見出しは八字以上にわたる場合は二行割。
- ◎写真、図表の挿人は欄外に仮番号とともに記入する。  
(上記参照)



## 第二章 城下町甲府の形成と発展

「節」

「項」

「小見出し」

1行あけ

2行あけ

2字あけ

第五節  
1字あけ

町の生活

引	く	い	1字あけ	4字あけ	第	五	節	1字あけ
き	飲	上	ゴミオタト	一	第五	第五	第五	第五
入	用	水		町	第五	第五	第五	第五
れ	に	の		用水	第五	第五	第五	第五
た	適	お		の整備	第五	第五	第五	第五
用	さ	こ			第五	第五	第五	第五
水	な	り			第五	第五	第五	第五
に	か	な			第五	第五	第五	第五
依	つ	譲			第五	第五	第五	第五
存	た	題			第五	第五	第五	第五
し	の	申			第五	第五	第五	第五
な	で	府			第五	第五	第五	第五
け	、	城			第五	第五	第五	第五
れ	上	の			第五	第五	第五	第五
ば	流	川			第五	第五	第五	第五
な	の	か			第五	第五	第五	第五
ら	川	ら			第五	第五	第五	第五
な	か	井			第五	第五	第五	第五
か	堰	水			第五	第五	第五	第五
つ	へ	は			第五	第五	第五	第五
た	用	水			第五	第五	第五	第五
が	水	質			第五	第五	第五	第五
,	路	が			第五	第五	第五	第五
木	一	悪			第五	第五	第五	第五

甲府市史等の著作権の帰属並びに  
行使に関する覚書

甲府市史の著作権の帰属並びに行使に関して必要な事項を定める  
ため、甲府市（市長 原 忠三）を甲とし、甲府市市史編さん委員  
会（委員長 磯貝正義）を乙として、次の覚書を締結する。

一 著作権の帰属

甲府市史（全二巻）及び史料所在目録並びに甲府市史研究及  
び市史編さんだより（以下「市史等」という。）の著作権は、甲  
に帰属する。

二 著作権の行使

（1）甲は、市史調査過程において、乙の名で作成した「市史等」  
を引用又は使用するときは、その出所を明示するとともに、乙  
の意をまげないように留意し、かつその意に反する改ざん変更  
を加えてはならない。

（2）乙の各委員が、自己の執筆部分の全部又は一部をその著作物  
に収録することを妨げない。ただし、その執筆部分のみをもつ  
て單行本を出版する場合には、甲の同意を得なければならない。

（3）乙の各委員は、市史編さん担当及び各専門部会による調査並  
びに委託料によって収集した資料を用いて、「市史等」に発表  
しなかった内容の著作物を作成発表するときは、市史編さん事  
業として調査収集した資料に基づいて作成した旨を明示するも  
のとする。

（4）乙の各委員は、「市史等」に掲載された図・写真を自己の著  
作物に転載し、又は委託料等による市史の調査等によつて作成  
のとする。

した図表・収集写真を自己の著作物に掲載するときは、その旨  
を明記しなければならない。

（5）市史の再版にあたっては、その一切の条件について甲・乙協  
議のうえ決定する。

三 資料所有権の帰属

委員としての調査及び委託料によつて収集した原資料の所有権  
は、すべて甲に帰属する。

四 その他

（1）乙以外の執筆者の執筆部分及び委託料によつた収集資料につ  
いては、この覚書きに準ずるものとする。

（2）この覚書きに定めのない事項又は疑義が生じた事項については、  
甲・乙協議のうえ決定する。

（3）乙の解散後協議する必要が生じたときは、乙の代表者と甲が  
協議する。

このとりきめを証するため、本覚書二通を作成し、甲・乙記名押  
印のうえ各自分有する。

昭和六十年五月十六日

甲

乙

甲府市  
市長 原 忠三

乙 甲府市市史編さん委員会  
委員長 磯貝正義

『甲府市史研究』編集委員会

規 格	A5判 約七〇頁(グラビア一頁)	発行年	年一回 一〇月発行	編集機構	甲府市市史編さん委員会内に、市史研究小委員会を設置する。	執筆者	掲載内容	原則として制限しない。 甲府の歴史に直接・間接に係わる論文・史料紹介など (ただし、未発表のものに限る)。	59	60	61	62
									63	64	65	66
58	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	六、六、〇	一、六、六、一〇	一、四、	三、一、一
一一〇、六四二	四六六	四六六	四六六	四六六	四六六	四六六	四六六	四六六	六〇	一、一、一〇	一、一、九二	一、五、四
原稿交付	原稿交付	原稿交付	原稿交付	原稿交付	原稿交付	原稿交付	原稿交付	原稿交付	六一	西七、九六五	西六、八三〇	七、六、一四
納期及び	納期及び	納期及び	納期及び	納期及び	納期及び	納期及び	納期及び	納期及び	六二	西〇、二八九	三八、七七〇	七、八、九五
平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	平成二年六月三十日	六三	七、二、二五、	一〇、一、一〇	九、四、六
原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	六四	七九、一八四	八、一、三五八	七、三八一
原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	六五	五八、九、九	三四、〇、三一	一〇、三、九五
原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	六六	七〇、一、一〇	六〇、〇、七七	五、五六八
原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	六七	一七、一、一〇	一〇、九、二〇	八、〇〇五
原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	原稿提出	六八	九、九九五	九、九九五	九、九九五

年度別市史編さん事業経費(予算・決算)

年 度	当初支出予算額		當初収入予算額		當初収入予算額		當初収入予算額	當初収入予算額	當初収入予算額	當初収入予算額	當初収入予算額
	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)					
昭和五十七年	一一〇、六四二	九、七〇三	四六六	四六六	四六六	四六六	一一〇、六四二	九、七〇三	四六六	四六六	四六六
五十八年	一一〇、六四二	九、七〇三	四六六	四六六	四六六	四六六	一一〇、六四二	九、七〇三	四六六	四六六	四六六

甲府市史印刷仕様書

※算入は市史刊行物の原者全段入

校 正 原則として初校は執筆者が行う。その際加筆などはな

るべく行わない。

納入場所

指定部数を甲府市役所及び指定各か所に納入。残部は平成五年頃まで業者が保管する(その間、必

要に応じて指定か所に配達する)。

仕様内訳

項目	表紙	説明
写真・国版	見返し表紙	△材 料 黄ボーリル 総布クロス装 別添見本の「甲府市史 史料編 第一巻 近世I」と同じ
△用紙	△裏表紙	△色・用紙 中央に市章を押す。 △種類 金箔(ドイツ箔を使用する)
△文 字	△背文字	「甲府市史 史料編 第二巻 近世II」と同じ 巻き見返しとする。
△カラーワ 写真	△用紙	「甲府市史 史料編 第二巻 近世II」と同じ ※扉の前に薄い和紙(白)を入れる。
△国版	△カラーワ 写真	甲府市史 史料編 第八巻 現代II 巻頭カラーページ八頁 (内面印刷・各頁一~二点)
△用紙	△モノクロ写真	卷頭口絵(四頁)、扉、及び本文中で使用する(約二〇点) (1)巻頭口絵……両面アート・A判七二枚 (2)本文中挿入写真……書籍用紙

項 目	活 字	説 明
印 刷 用 校	柱・ノンブル	△本 文 原則として9号明朝体を使用するが、柱・ノンブル・製注・ルビ等に数種類の活字を用いる。また、旧字・略字・異体字・変体仮名等もあり、作字も必要な場合がある。 △組み方 節ごとに奇数頁おこし、筋内は追い込み。 △柱 章扉一頁（裏白）。モノクロ写真一と二点を掲載。 (9ボ) 五字×一八行、一段組、行間8ボ)
正 紙	△ノンブル	章……偶数頁 八ボ横組 天・小口 節……奇数頁 八ボ横組 天・小口
印 刷 正 刷	△紙質・色 地・小口	△回数 五枚を原則とする。
△校正刷	△紙質・色 「甲府市史 史料編 第二卷 近世I」と同じ（中性紙を使用する）	なお、初校については著者が内校し、手直しを終えたものを初校として提出する。再校以降も各校ごとに内校を行ったのちに提出。最終校正は出版校正とし、責任校了とはしない。
△印刷方法	△インク 黒インク（やや淡め）	初校四面、再校以降は三部を提出する。 全頁を一括通稿印刷すること。
△印刷本	△印刷本	※印刷に際しては編さん担当職員が立ち合う。 糸かがり縫、上製本（背テープばり二本）

項目	説明
外函	△装丁 丸背・溝つき（ホローバック）
発送用ダンボール箱	本糊りボン一本入（表紙と同系色）
手さげ袋	△種類 貼り箱とする。（見本別添）
受價紙	共蓋のダンボール第一、〇〇〇枚（一冊用八〇〇枚・五冊用一〇〇枚）をつくる。（※宛名紙は別刷とし、必ずダンボール箱の表に貼る。）
手さげ袋六〇〇枚をつくる（袋の表には若干の字句を印刷する）。 （見本別添）	手さげ袋六〇〇枚をつくる（袋の表には若干の字句を印刷する）。 （見本別添）
七〇〇枚を印刷する。	七〇〇枚を印刷する。
印刷する	一、〇〇〇枚を印刷し、必要に応じて発送用ダンボール箱に貼る。
宛名紙	四、〇〇〇枚を印刷する（年代対照表等を印刷する）。
しおり	△直伝用バンフレット
印付属する物	(1)三折バンフレット カラー印刷 五、〇〇〇枚 (2)チラシ用バンフレット 一色刷・B5判・無折 二、〇〇〇枚
△ボスター	書店用市史宣伝ボスター 一色刷り一〇〇枚
△パンフレット送付用封筒	二、〇〇〇枚

付帯条件・その他

一 全て新字体（変体仮名・旧字等を含む）を使用すること。

二 章別に各二点、計二〇点程度の粗見本を作成すること。

三 校了後、印刷業者に各巻一部作成し、検査を受けること。

四 印刷はその後に行うこと。

五 印刷の主要工程は上請・下請に出さないこと。

六 編さん事務局作成の発送先一覧表（配付計画書）により、指定

か所への発送（配達）を行うこと。

七 組版は紙型として残し、三〇年間保存しておくこと。

八 雑誌広告用の版下を作成すること（二・三種類）。

九 発行図書の性質上、字間・行ドリ・活字のポイントなど、初校

段階でかなりの組みかえがある。その場合、編さん事務局の指

示に従うこと。

一〇 本の性格上、入念な仕上げを必要とするので、細部にわたる仕様については編さん事務局の指示に従うこと。

一一 ○○○部までの発送料を負担すること（一・〇〇〇部を

超える分については別途発送料を支払う）。

「甲府市史」の売買に関する契約書

甲府市（以下「甲」という。）と甲府市販売促進協議会（以下「乙」という。）との間には、次の条項により「甲府市史」（以下「市史」という。）の継続的売買基本契約を締結する。

第一条 甲はその製作する市史につき、以下の条項に基づき継続的

にこれを乙に対し売り渡すものとする。

2 乙における市史の販売取扱店は、別紙のとおりとする。

第一条 甲は必要な部数、乙が希望する数量の市史を契約期間、別途協議の販売価格を以て供給するものとする。

第二条 この契約の有効期間は、平成四年六月一日から平成五年三月三一日までとする。ただし期間中、甲において市史の在庫が

販売予定期間に達した場合、または甲においてこの契約を継続するのに困難な事情が生じた場合は、甲の任意の意思表示によつて何時でもこの契約を解除することができる。

第四条 この契約に定めない事項については、甲と乙が協議してこれを定める。

この契約の締結を証するため契約書一通を作成し、甲乙記名押印のうえ各自一通を保有する。

平成四年六月一二日

甲 甲府市丸の内一丁目一八一

甲府市

甲府市長 山木栄意印

乙 甲府市若光寺一丁目二一六

甲府市販売促進協議会

代表者 渡辺重印

市史編さん年間スケジュール(昭和53年度)

日報項目  
市史編さん事業の推進  
執行方針  
1 史料編第一巻(原始・古代・中世)、同第五卷(近世一村力)、同第六卷(近代)の編集・発行

史料編第七巻(現代)、通史編第二巻(近世)、同第二巻(近代)の史料の調査及び収集史料の通じ並びに原稿執筆

3 定期刊物の編集・発行  
◇「市史研究」第五号・同第六号

◇「編さんだより」第1号・同第十一号

4 市史講座の開催  
5 調査行物の領布(近世町方史料編、氏俗・美術工芸編ほか)

6 調査研究等各会議の開催(編さん委員会・専門部会議・調査協力員会議・全体会議)

7 市域に係る石造物、道路発掘調査等の実施

8 市史資料室の開設(市史館内蔵室)(7/1~)

9 市史資料室の開設(市史館内蔵室)(9/1~)

10 市史資料室の開設(市史館内蔵室)(10/1~)

11 第二回出張調査会(市史館内蔵室)

12 第三回出張調査会(市史館内蔵室)

13 第四回出張調査会(市史館内蔵室)

14 第五回出張調査会(市史館内蔵室)

15 第六回出張調査会(市史館内蔵室)

16 第七回出張調査会(市史館内蔵室)

17 第八回出張調査会(市史館内蔵室)

18 第九回出張調査会(市史館内蔵室)

19 第十回出張調査会(市史館内蔵室)

20 第十五回出張調査会(市史館内蔵室)

21 第二十五回出張調査会(市史館内蔵室)

22 第二十六回出張調査会(市史館内蔵室)

23 第二十七回出張調査会(市史館内蔵室)

24 第二十八回出張調査会(市史館内蔵室)

25 第二十九回出張調査会(市史館内蔵室)

26 第三十回出張調査会(市史館内蔵室)

27 第三十一回出張調査会(市史館内蔵室)

28 第三十二回出張調査会(市史館内蔵室)

29 第三十三回出張調査会(市史館内蔵室)

30 第三十四回出張調査会(市史館内蔵室)

31 第三十五回出張調査会(市史館内蔵室)

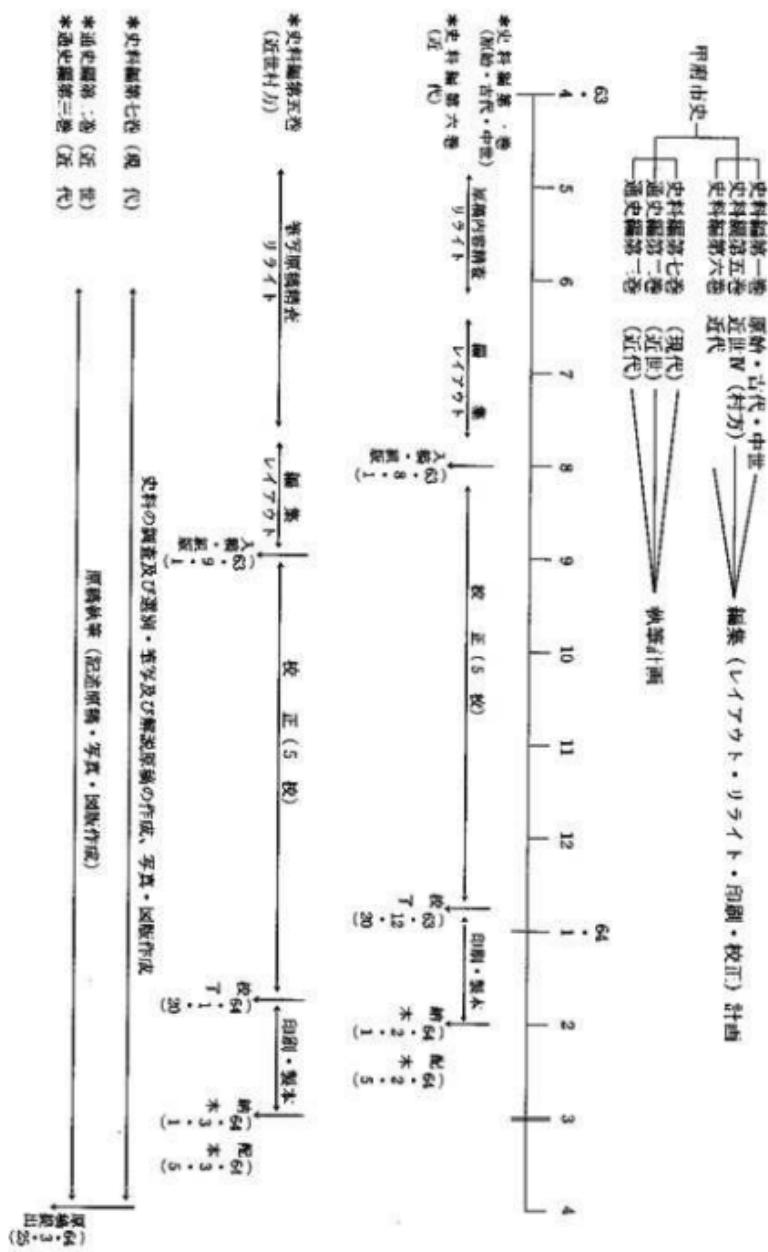
32 第三十六回出張調査会(市史館内蔵室)

33 第三十七回出張調査会(市史館内蔵室)

34 第三十八回出張調査会(市史館内蔵室)

35 第三十九回出張調査会(市史館内蔵室)

甲府市史執筆・叢書計画(昭和63年度)



## 市史編さん刊行物一覧

書名	発行年月日	書名	発行年月日
平府古文通史編 第一巻 原始・古代・中世	平成3年4月20日	甲府古史研究 第1号	昭和69年10月31日
第二巻 近世	平成4年3月25日	第2号	昭和69年11月1日
第三巻 近代	平成2年3月20日	第3号	昭和61年11月1日
第四巻 現代	平成5年3月1日	第4号	昭和62年10月1日
甲府市史料編 第一巻 原始・古代・中世	平成元年3月20日	第5号	昭和63年9月1日
第二巻 近世Ⅰ(町方)	昭和62年3月1日	第6号	昭和63年12月1日
第三巻 近世Ⅱ(町方)	昭和62年3月1日	第7号	平成元年10月17日
第四巻 近世Ⅲ(町方)	昭和62年3月1日	第8号	平成2年10月20日
第五巻 近世Ⅳ(町方)	平成元年3月20日	第9号	平成3年10月22日
第六巻 近世Ⅴ(町方)	平成元年3月20日	第10号	平成5年3月22日
第七巻 近代	平成元年3月20日	市史編さんだより 第1号	昭和59年3月10日
第八巻 現代Ⅰ	平成2年3月20日	第2号	昭和59年8月10日
第九巻 現代Ⅱ	平成4年1月10日	第3号	昭和60年3月1日
甲府市史別編 I 歴術	昭和63年3月20日	第4号	昭和60年8月1日
II 美術・工芸	昭和63年3月20日	第5号	昭和61年3月1日
III 「甲府の歴史」	平成5年3月15日	第6号	昭和63年12月1日
IV 年表・索引	平成5年3月21日	第7号	昭和62年5月20日
平府市史別編 平府古の統計	平成5年3月1日	第8号	昭和62年9月16日
平府古文通史編合巻1 甲府古史史料叢書(近世Ⅰ)	昭和69年3月1日	第9号	昭和63年3月25日
同 2 中野武田氏文書井筒	昭和61年3月1日	第10号	昭和63年10月1日
同 3 武井源氏圖 織田中町内会開闢史料	平成4年11月2日	第11号	平成元年3月20日
同 4 甲府の石造物	平成5年3月1日	第12号	平成元年12月20日
まんが甲府の歴史(上・下)	平成元年10月1日	第13号	平成2年3月20日
		第14号	平成2年10月25日
		第15号	平成3年3月1日
		第16号	平成3年10月22日
		第17号	平成4年3月25日
		第18号	平成5年3月30日

▼市史研究（一、二九号）総目次

甲府市史研究 創刊号

創刊に際して

発刊の旨  
甲府札差における天保五法改革  
古代の甲府

一吉浦・表門一郷を中心として—  
明治中後期に於ける甲府市の商業構造

一九二〇—三〇年代における甲府山周辺の農村生活  
甲府市域の古墳分布と一、二の課題

甲府山周辺の農村生活  
甲府市域の古墳分布と一、二の課題

湯村温泉の歴史  
新発見の穴山信君文書

市史の広場  
新藤昭良

向村文書にみる五月節句の検約令  
合巣寺跡

糸日をつける  
(A5判八四頁 昭和五九年一〇月三日発行 領価五〇〇円)

甲府市史研究 第二号  
甲府市史研究 第三号

市史の広場  
謝恩碑  
新藤昭良

向村文書にみる五月節句の検約令  
小林重光

合巣寺跡  
糸日をつける  
(A5判八四頁 昭和五九年一〇月三日発行 領価五〇〇円)

甲府市史研究 第二号  
甲府市史研究 第三号

市史の広場  
謝恩碑  
新藤昭良

向村文書にみる五月節句の検約令  
合巣寺跡

糸日をつける  
(A5判八四頁 昭和五九年一〇月三日発行 領価五〇〇円)

近世甲斐における甲府代官  
国玉神社所蔵、晴信文書の年紀推定

勝喜寺仏像調査報告  
伊藤 祖孝・秋山 敬

駿河湖の都市・甲府  
平岩親吉と御鑑賞

一金櫻神社所蔵「神韻文書」を中心として—

延宝期甲府城下の背負商人の運上と税免除  
高木伸也

一若尾財團経営史研究序説  
齊藤 康彦

甲府市における町内会組織の変遷とその機能  
昭和二〇年代後半の甲府市財政の推移  
萩原 克己

市史の広場  
新見塚と国母  
山梨医事の空襲—忘却された遺体—

千葉の廢帝地蔵とあげ仏さん  
大字治と甲府  
竹山 譲夫

曾根 康夫・保坂 忠信・榎本 愛子

福島 昇・小林 静・奈良 進・他

清水小太郎

板沼 賢司

齊藤 典男

飯田 文弥

齊藤 康彦

高木 伸也

萩原 克己

甲斐府中概観 — 評論文批評 —

なかざわ・しんきち

一の森経営発掘調査報告

田代 孝

甲府市内における先上器時代研究の可能性について

保坂 康大

甲府にみられる墓碑・墓石の変遷

河西 学

高美客における絵画的側面と出自に関する若干の考察

小沢 秀之

市史の広場

守原 正彦

玄法院の石室

金九 平甫

茅無尽に寄せて

相原 真洋

（A5判・三六頁 昭和六一年一月一日発行 領価七〇〇円）

甲府市史研究 第四号

甲府県人団体公所と入塙商社

増田 廣質

— 内陸への橋の施設をめぐって —

山木多佐子

一 座談会 「女性からみた戦前のまちと暮らし」 から

伊東 肇

市政施行以来の甲府市人口

有泉 貞夫

明治期甲府製糸業と用糸問題

林 陽一郎

若尾財閥経営史研究序説

齊藤 康彦

明治期の甲府郵便局と通信日付印の変遷

清水 浩

若尾家の米穀販売の実態

丹沢 一郎

江戸前期における信州酒停止願について

坂原 福貴

一若尾財閥経営史研究序説

齊藤 典男

寛政元年における上矢木水

守原 正彦

甲府における時の鑑考

田代 孝

若尾家の米穀販売の実態

柳原 功一

宝永期御民家の甲府城廻合について

齊藤 康意

市史の広場

御年賃金の江戸表立について

丹沢 一郎

県庁庭園の石橋

坂原 福貴

甲府の芸能と角屋座

齊藤 実理子

（A5判・四六頁 昭和六一年一〇月一日発行 領価七〇〇円）

甲府市史研究 第五号 — 武田氏特集 —

武田氏と甲府 — 信虎開府前 —

齊藤 正義

甲斐府中における建築

清水 浩

武田信玄の文書

坂木 德

室町・戦国初期における甲府盆地中央部の豪族

治則

武田信玄と「孫子の兵法」考

清水 浩

元龜四年正月における武田信玄の越年の場所「刑部」について

坂木 德

『甲斐国志』に見る中世武田氏の経済

齊藤 典男

甲府市川田鉱跡調査報告

守原 正彦

武田氏研究の現状と問題点

田代 孝

（A5判九一頁 昭和六三年九月一日発行 領価七〇〇円）

齊藤 功一

武田氏研究の現状と問題点

齊藤 功一

昭和前期の甲府製糸業の構造と特質

齊藤 康意

「座談会「甲府における織糸業の歩み」」より

齊藤 康意

製糸女工と製糸業

齊藤 康意

昭和前期の甲府製糸業の構造と特質

齊藤 康意

「座談会「甲府における織糸業の歩み」」より

齊藤 康意

製糸女工と製糸業

齊藤 康意

「開港と新聞記事から」

山本多佐子

終戦直後甲府における食糧事情と市の対応

愛媛の近代建築のルーツを探る

甲府市南部の農業用水と水害を考える

文人の日記に記された甲府

上上器遺跡発掘調査報告

新藤 昭良

—その背景と特色—

鳥袋 善弘

植松 光宏

高藤 鮎悟

小林 正可

田代 本

櫻原 功一

宮沢 公雄

橋島 忠行

小沢 綱雄

「井利恵子

橋口 光治

飯島 勇子

渡辺 洋子

小菅 信子

千田 嘉博

吉原 浩人

須藤 茂樹

渡辺 洋子

甲府市史研究 第八号

甲府市永慶寺の建築について

満州事変期の軍需工場と掛外熱

要害山城の構造

甲府市善光寺『善光寺如来絵図』考

武田道造軒銅考

承久の乱と甲斐源氏

—有職廟の墳墓の地を尋ねて—

甲府の歴史 —市域の発展を中心として—

明治初年の甲府市政

—「板田日記」を中心に—

甲府市の中産業界の歩み

中央卸売市場開設まで—

甲府市シビルミニマムと「新総合計画」

いわゆる「四百年会」について

近世甲府狂歌観書

行政近代化をめざす甲府市の組織改革

新藤 昭良

平沢 節史

久保寺弘美

丹沢 伸

新藤 昭良

久保寺弘美

新藤 昭良

地方文学成立の条件

—山梨における近代文学の軌跡をめぐって—

湯村山城跡発掘調査報告

塩野 雅貴  
萩原 三郎  
平野 修

甲斐における尾根上の城の比較私論

—熊城を中心として—

廿人町の歴史

「官選勅勝」について

市史の広場

水交庵

酒折宮の連歌と片歌

石造物聞きあるき  
(A5判一〇二頁 平成三年一〇月一日発行 價値八〇〇円)

鷹野 四郎  
小沢 秀之  
柴辻 俊六

古屋 高治  
山田 武雄

（略）

甲府市史編さん委員会機構図（平成4年4月現在）

市史編さん委員会

刊行部会

○小林  
武川  
朝夫  
田中  
三洋  
○神谷守  
中山  
楠川  
裕美  
志水  
利則  
前川

編集会議

○坂井  
田中  
村上  
伊賀  
内藤  
村村  
文正  
典一  
治田  
山田  
吉郎  
上野  
川西

民俗・歴史芸能  
専門部会

○柳井  
根岸  
伊藤  
小伊藤  
守  
田中  
秀一  
正裕  
田中  
之季  
宏泰

近・現代会  
専門部会

○鈴木  
田中  
久美  
高良  
田中  
白浜  
山田  
喜代  
吉子  
由己  
田中  
佐藤  
多世子

考古・古代・中世  
専門部会

○鈴木  
田中  
久美  
高良  
田中  
白浜  
山田  
喜代  
吉子  
由己  
田中  
佐藤  
多世子

事務局  
(市史編さん室)

○横山  
正代  
秋葉  
三義  
柴田  
六郎  
井上  
秋葉  
秋葉  
三義  
柴田  
六郎  
井上

西狩倉了階  
市史編さん室  
(市長室 明門主幹所管)  
住 所 (〒400)  
甲府市丸の内丁目  
18-1  
電 話  
(0552)37-1161  
内線 2311・2312

(調査協力会)

秋山徹次郎  
和賀 真作  
喜多 萬介  
川島 正人  
木曾 重利  
金丸 幸司  
武井勝次郎  
中澤 亨人  
井川 達也  
大庭 一  
中野 伸一  
中野 伸一  
中野 伸一  
中野 伸一

甲府市史編さん関係者名簿

市史編さん委員会（平成5年3月1日現在）

市史編さん委員

委員長 磐只 正義

古代  
山梨大学名誉教授

副委員長 神宮寺英雄

甲府市助役

委員 飯田 文弥

近世  
山梨大学非常勤講師

同 伊東 壯

現代  
山梨大学学長

同 斎藤 典男

近世  
甲府市文化財調査審議会会長

同 白倉 一由

文學  
山梨英和短期大学教授

同 服部 治則

民俗  
山梨大学名誉教授

同 村上 直

近世  
法政大学教授

同 小沢 綱雄

甲府市議会議員

同 早川 武男

甲府市議会議員

同 田中彦次郎

甲府市市長室長

同 中山 進	甲府市企画推進部長
同 三浦 恒則	甲府市總務部長
同 浅川 葵朗	甲府市教育長

市史編さん専門委員

委員長 秋山 敬

中世  
山梨郷土研究会会員

伊藤 祖孝

美術工芸・古建築  
元甲府市文化財調査審議会委員

植松 光宏

山梨郷土研究会会員  
建築

荻原 克己

現代  
元甲府市収入役

小沢 秀之

民俗  
山梨郷土研究会会員

北原 進

近世  
立正大学教授

斎藤 左文吾

教育  
帝京西東京ビジネスカレッジ専門学校校長

齊藤 康彦

近世  
山梨大学教授

坂本 徳一

近・現代  
山梨博士研究会会員

塙野 雅貴

文学  
元山梨県立図書館長

柴辻 俊六

中世  
山梨郷土研究会会員

鳥袋 智弘

現代  
山梨県立女子短期大学教授

委員 清水 茂夫

文學  
山梨大學名譽教授  
教育  
帝京學園短期大學助教授

丹沢 節史 武井靜次郎 中澤 彦一

中橋 合人

同 清水 威

現代  
新藤 昭良  
元甲府市助役

中澤 彦一

同 田代 孝

考古  
日本考古學協會會員  
近世  
手塚 寿男

市長室長 田中彦次郎

同 秋原 三雄

考古  
日本考古學協會會員  
近世  
増田 廣實

市史編さん室

同 松本 武秀

立教大學女子短期大學部教授  
教育・文学  
山梨學院短期大學教授

市長室長 田中彦次郎

同 守屋 正彦

美術工芸  
山梨鄉土研究會會員

市史編さん室

同 八束 厚生

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 山本多佳子

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 落合 四郎

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 久保寺春雄

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 小宮山榮子

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 真洋

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 光治

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 高治

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 正夫

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 武方

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 純悟

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 蒼藤

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

同 純悟

山梨大學助教授  
近・現代  
山梨鄉土研究會會員

市長室長 田中彦次郎

市史編さん調查協力員

秋山慎次郎 相原 真洋 塙原 福貴 橋口 光治 古屋 高治 山岡 正夫 平甫 棚原 武方 蒼藤 純悟  
米倉 政則 金丸 幸一

## 市史編さん事業日誌

昭和57年度

- 4・1 市史編さん担当 市長室に新設、担当主査（高木伸也） 1  
名が配属される
- 5・10 萩原一雄（議会事務局）・信藤祐仁（教育委員会）、市史編さん事務從事職員となる（昭和58年3月31日まで）
- 5・15 学識経験者と懇談会（予備会議）、学識経験者4名 事務局3名
- 5・26～28 高木主査 大津市・奈良市の市史編さん事務視察
- 6・10 「甲府市史編さん基本構想」（案）策定、市長室内閣協議
- 7・12 「甲府市史編さん基本構想」について関係課長事前協議
- 7・22 「甲府市史編さん準備委員会設置要綱」の制定について市長決定
- 8・1 「甲府市史編さん準備委員会設置要綱」施行
- 8・17 中府市史編さん準備委員会公委員の委嘱について市長決定  
甲府市史編さん準備委員会委員委嘱式  
(宇賀経験者6名、市会議員1名、市職員6名)  
準備委員会（第1回）
- 8・21 市史編さんについての協議・検討  
○役員の選出 ○編集・刊行計画の策定  
準備委員会長に磯貝正義氏を選出
- 9・27 58年度職員増員要求書提出
- 10・7 編集専門部会（第1回）—市史編さんの基本的構想について  
編集専門部会（第2回）—市史編さんの基本的構想について
- 11・15 編集専門部会（第2回）  
○予算関係について  
○市史編集の機構について  
○市史編集の組織体制について
- 12・20 編集専門部会（第3回）  
○市史編集の組織体制について  
○58年度予算要求について  
市議会本会議で可決
- 2・23～25 御殿場市・八潮市の市史編さん事業視察（高木主査・萩原）
- 3・23 「甲府市史編さん委員会設置条例」  
市議会本会議で可決
- 3・25 古文書調査（湯村三「日広瀬家 調査員 斎藤典男委員・  
高木主査）
- 3・28 勉強会議（第3回）—甲府市史編さん大綱について  
編集専門部会（第4回）  
○編集部会審議事項の統括について
- 58年度の市史編さん事業について  
甲府市史編さん準備委員会 磯貝正義公長から河口市長へ
- 「市史編さん大綱」提出

昭和58年度

原始・古代・中世・近世・近・現代・民俗・美術工芸 各  
専門部会（第1回）

時 間 午後1時～2時30分

会 場 同 右

協議事項 1 正・副部会長の選出

2 部会の構成について

市長室所蔵図書の一部を編さん室に移管

7・11 齋藤康慈委員・高木主査、山梨中央銀行所蔵資料について  
予備調査

7・15 高木主査・敷野、甲府市古文書研究会定例会に出席。編さ  
ん状況報告と協力依頼をする

7・19 山梨中央銀行所蔵資料調査

7・21 事務局（斎藤・保坂）県教委の須山町海岸寺石仏調査に同  
行し、臨地研修

7・23 編さん室に大型書架を設置

7・25 事務局（斎藤・秋山各委員、古代・中世の内容構成について  
セミナー）郷土史と古文書を学ぶ」を講講

7・26 高木主査・広報担当職員、取り扱い直前の春日小学校校舎  
を写真撮影

- 4・1 甲府市史編さん委員会設置条例施行
- 5・2 編さん事務嘱託2名（斎藤静悟・保坂俊子） 臨時職員1名（加賀美洋子）採用
- 5・14 市史編さん担当事務室、西庁舎2階に移転
- 5・21 清村広瀬家文書借用  
一編さん室にて整理開始
- 6・1 職員1名増員、敷野雅彦、市史編さん担当へ異動
- 6・23 委員会委嘱式及び、第一回委員会 午前10時～  
事務局職員5名、拓本のとり方、講習会に出席
- 6・24 事務打ち合せ（湯村広瀬家文書年貢・諸税の統計資料につ  
いて）
- 7・1 市史編さん委員会（第2回）
- 時 間 午前10時～11時20分
- 会 場 自治研修センター
- 協議事項 専門部会の構成について
- 市史編さん専門委員会構成式
- 時 間 午前11時～11時20分
- 会 場 同右
- 委 嘴 者 17名
- 編さん委員会全体会議
- 時 間 午前11時20分～正午 会場 同右
- 協議事項 1 準備委員会の経過、及び編さん大綱について
- 2 部会所掌事項に関する調査計画について
- 3 協議

7・29 市長室所蔵の図書・スクラップ等を編さん室に移管  
8・1 民俗・美術工芸専門部会

時 間 午後1時30分～5時

会場 西庁舎3階会議室  
協議事項 1 仮日次の検討について  
2 部会所掌事項に関する調査計画について

広報誌を読んだ佐藤寿三江さん（上石田・丁目）より、昭和12年発行の「甲府市地籍地図」の寄贈あり  
服部委員・事務局教野、民俗聞き取り調査用紙の作成について協議

8・2 8・3 8・4 8・5 8・6 8・7 8・8 8・9 8・10 8・11 8・12 8・13 8・14 8・15 8・16 8・17 8・18 8・19 8・20 8・21 8・22 8・23 8・24 8・25 8・26 8・27 8・28 8・29 8・30 8・31 9・1 9・2

山寺和夫氏（武田二丁目）より「武田家臣 増山氏」についての資料提供あり  
市役所所蔵行政文書調査（斎藤康彦委員外3名）

秋山慎次郎氏・斎藤典男委員来室。宝永2年山田町明細書  
留めについて  
高木主査・教野・保坂、事務打ち合せ（帳票類の作成について）

深沢勝義氏（宝二丁目）所蔵の考古遺物を調査

金丸平甫氏（中巨摩郡白根町）来室。写真資料を寄贈

秋山清氏（元市議会議員）より資料提供あり（明治18年出版の「各家病院便覧」を複数）

高木主査、齋藤市長室長、矢笠広報主幹と福さん事務打ち合せについて

合せ 考古・古代・中世専門部会（第2回）  
近世専門部会（第2回）

時 間 午前10時30分～午後0時30分

会場 桜やレストラン

協議事項 1 史料と仮日次の検討  
2 史料調査計画について

近世専門部会 1 仮日次の検討と担当分担について  
2 部会調査計画について

市史編さん委員会（第3回） 1 仮日次の検討について

時 間 午後1時～4時

会場 桜やレストラン

協議事項 1 仮日次の検討について  
2 業務委託契約について  
3 その他

午後より、中沢・柴辻両委員、東洋院古文書調査  
斎藤典男委員・事務局 斎藤・保坂、湯村古文書調査  
「西山纂観志」「東山纂観志」を購入  
小沢委員来室。調査計画について協議

9・6

斎藤典男委員、事務局 斎藤、湯村広瀬家にて資料調査

9・29

大木栄・氏来室。高木主査・斎藤、大木家文書の概要を説明

9・8

甲府市と甲府市市史編さん委員会・甲府山古文書研究会との間に、業務委託契約締結

9・30

斎藤典男委員室。斎藤・斎藤紳悟とともに、古屋家文書の一部を写真撮影

9・9

高木主査・数野、第一商業高校にて大木栄・氏に史料借用を要請

10・1

広報10月号で、市民に対し史料調査への協力を要請

9・13

高木主査・数野、宝二丁目古屋吉男氏宅を訪問。資料調査について協議

10・3

阪元光雄氏来室。人正時代の出納帳等を持参

9・16

斎藤・山梨大学にて服部委員・山梨大学民俗研究会会員諸氏に対し民俗聞き取り調査の説明

10・5

民俗・美術工芸専門講会(第3回)

9・19

斎藤・山梨大学にて服部委員・山梨大学民俗研究会会員諸氏による委員室。大木家文書のマイクロ撮影について協議

10・5

民俗・美術工芸専門講会(第3回)

9・27

斎藤典男・斎藤康彦委員、事務局 高木主査・斎藤、湯村広瀬家文書調査

10・6

高木主査・保坂、湯村記念館訪問。小沢委員と協議

9・29

秋山慎次郎氏来室。昭和初期の映画パンフレットを持参

10・6

余麻余美文庫訪問。県立図書館にて飯田委員と古文書整理について協議

9・26

高木主査・斎藤、59年度事業計画・予算について協議

10・7

担当事務打ち合せ会議。古屋家(倉鹿野家)文書の整理について

9・22

斎藤典男委員・事務局 斎藤、湯村広瀬家文書調査

10・7

斎藤典男委員・高木主査・斎藤、ホテル湯伝において広瀬家文書の整理について協議

9・24

高木主査・斎藤、古屋家(倉鹿野家を含む)文書を調査し、史料を借用

10・7

について協議

9・25

数野・斎藤、資料所在調査。千塚一丁目玉川ふ志江さん宅・

10・11

甲府市市史研究会、市史編さん室にて古屋家(倉鹿野家)文書・古屋家文書を整理。日録カードを作成する

9・27

斎藤典男・斎藤康彦委員、事務局 高木主査・斎藤、斎藤・古屋家(倉鹿野家を含む)文書を調査し、史料を借用

10・13

(斎藤典男・斎藤康彦委員、整理指導)

9・29

数野・斎藤、資料所在調査。千塚一丁目玉川ふ志江さん宅・

10・14

岩槻町池谷覚造氏宅・岩槻町山村高氏宅・法華寺・

現代関係史料を整理

甲府市創94周年記念日。山日新聞に市史編さん特集掲載

小沢栄三氏来室。写真資料等を持参

森藤康彦委員・牧野・古府中町中沢泉氏宅にて古文書調査

市長来室。編さん事業を激励

数野、阪元光輝氏宅を訪問し、労働組合関係資料を借り受ける

古屋喜男氏来室。写真資料を持参

古屋喜男氏来室。「田街道関係資料（明治時代）」を持参

斎藤典男委員・高木主査・斎藤、法華寺古文書調査

貢川一丁目長田喜三氏来室。甲府城下絵図等を持参

斎藤典男委員来室。斎藤・保坂とともに、湯村広瀬家へ古文書調査

NHK、市史編さん室をテレビ収材。同夜放送

甲府市古文書研究会、市史編さん室にて湯村広瀬家文書を整理

高松市史編集室より東原岩男氏来室。本市編さん業務を視察

住吉四丁目加賀美秀子氏来室。中・近世史料を持参

龟王町中村泰氏より、手紙にて保存資料の日録送付

高木主査・矢越正幹、窪田至長と59年度市史編さん事業及び予算（案）について内海協議

機関委員長来室。編さん委員会議（第4回）について協議

考古・古代・中世（第3回）、近世（第3回）、近・現代考収集室より東原岩男氏来室。中・近世史料を持参

（第4回）、民俗・美術工芸（第4回）各専門部会開催  
時 間 午前10時～12時  
会 場 自治研修センター

協議事項 部会所掌事項の進行状況と今後の計画について

編さん委員会全体会議

時 間 午後1時～2時  
会 場 同右

協議事項 市史編さんの現状と今後の推進について

編さん委員会

時 間 午後2時～4時  
会 場 同右

協議事項 1 各部会の活動状況について

2 昭和59年度編さん事業計画について  
3 「編さんだより」発行計画について

市史編さん担当、「三面の調査計画について事務打ち合せ

坂本否員来室。「考人会」との座談会について協議

斎藤典男委員、及び高木主査・牧野・斎藤、竜王町中村家文書・相生一丁目西川家文書を調査

12・12～13 甲府市古文書研究会、広瀬家文書を整理。斎藤典男委員指導

12・14 加賀美家文書写真撮影

法華寺古文書調査（各部会合同 出席者11名）

正治2年（一二〇〇）の鉛紙金泥法華経を発見

時 間 午後5時～6時30分

会 場 ホテル鶴伝

協議事項 本年度部会活動の総括

近世専門部会事務打ち合せ

時間・会場・協議事項 同上

12・23 近・現代専門部会（第5回）、及びヒヤリング調査

時間 午前10時30分～2時30分

会 場 桜やレストラン

ヒヤリング調査

12・23・24・26・27 県立図書館所蔵資料調査

2 対象「老人会」諸氏

調査員 梨大生6名と斎藤康彦・島袋高弘内委員担当

1・4 資料情報の電話あり（上幡那町 神宮寺光氏）

1・5 資料情報の電話あり（鴻村二丁目 横山勉氏・小瀬町 松木紀久氏）

1・10 阪元光雄氏来室。近代資料を持参

1・11 銀河光治氏来室。農民運動関係ヒヤリング調査について打ち合せ

1・18 斎藤典男委員・下条幸一氏来室。松岡の撮影について協議

1・23 反本委員・遠山要氏来室。農民運動関係ヒヤリング調査について打ち合せ

1・25 座談会開催（テーマ 民衆史のねらい）

1・27 近・現代専門部会（第6回）、及び農民運動関係ヒヤリング調査

会 場 桜やレストラン

橋口光治・京船幸男の各氏

秋原委員来室。古墳分布調査について協議

2・1～3 高木主食・数野、神戸市史編さん業務視察、及び国会

国書館資料調査

2・5～9 市内古墳分布調査を実施（田代・秋原両委員、子院大

椎名教授ほか）

2・6 高藤典男委員・斎藤、松本市へ山袋

2・7 高木主食、宇尾委員と美術資料調査について協議

2・8 敦野「図書さんより」掲載の「市民の声」を取材

広瀬一志氏来室。自治会関係資料を持参

2・13 竹山委員来室。（農民運動関係資料について）

2・14～15 甲府市古文書研究会、広瀬家文書を整理

2・16 扱当事務打ち合せ（2月・3月の事業日程、及び来年度事業計画について）

中央二丁目 武蔵家・中央四丁目 高野家所蔵美術資料調査

2・20 中央二丁目 武蔵家・中央四丁目 高野家所蔵美術資料調査、及び民俗・美術工芸部会

2・21 敦野・加賀美、種谷半四郎氏を訪問。農民運動関係ヒヤリング調査について打ち合せ

市立図書館より「寛政重修諸家譜」を長期借用

植松委員来室。武蔵家・高野家所蔵美術資料調査の写真を提出

時 間 午前10時～12時

会 場 笹やレストラン

協議事項 市史編さん事業の現状と今後について

2・27～29 県立図書館所蔵資料調査（調査員 梶木生三名 斎藤 康彦委員指導）

3・2 「細さんだより」の編集・レイアウト終了。印刷・校正口

程について、担当内部協議

3・6 高木主査 調査協力員設置要綱（案）について、矢笠主幹・法規担当と協議

3・7 高木主査・保坂、古屋喜男氏を訪問。絵図を借用

3・9 近・現代専門部会（第7回）、及び農民運動関係ヒヤリング調査

時 間 午後1時15分～6時

会 場 笹やレストラン

協議事項 1 ヒヤリング調査について

2 日次案の検討について

ヒヤリング調査対象者 稲村千四郎氏

都留市史編さん室より柴田氏来室。本市編さん業務を視察

3・12 中沢家所蔵古府中組繪図・長田家所蔵甲府城下絵図を借用

3・15 下条幸一氏・敷野、松岡芳真撮影

3・15～16 竹藤康彦委員・森岡一彦、広瀬家文書近・現代資料を

調査

3・20 「市史編さんだより」発行（3月10日付）

3・21 資料所在調査（上野郡河山岡正大氏宅、横根町南宮知貞・

若林要氏宅 調査員 小沢・斎藤康彦委員、高木主査、

敷野・斎藤）

3・22 資料所在調査（貫川二丁目長田喜三・湯川一丁目横田勉氏宅 調査員 斎藤典男・斎藤康彦委員、敷野・斎藤）

3・23 白根城源太術館資料調査。中府分間園など一五〇点を撮影（調査員 服部・小沢・坂本・植松・斎藤各委員、高木主査、敷野、斎藤）

3・27～28 都内資料調査（農林水産省農業総合研究所・農林水産省図書館 調査員 斎藤康彦委員、敷野、斎藤）

3・30 市史編さん委員会（第5回）

時 間 午前10時30分～12時

会 場 笹やレストラン

協議事項 1 昭和58年度市史編さん事業の総括

2 昭和58年度当面の課題について

3 昭和59年度専門部会（第5回）

委員会終了後、午後1時より学識経験者による編集会議を開催。

考古・古代・中世専門部会（第5回）

時 間 午後2時～4時

会 場 笹やレストラン

協議事項 1 昭和58年度部会活動のまとめ

(1) 資料の調査状況

(2) 日次の検討

2 その他

## 昭和59年度

古藤

4・4

議員委員長より原市長へ、甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに史(資料)の所在状況について答申  
議員委員長、市長・新藤助役・鶴田市長室長と信玄公祭りについて懇談

4・6

秋山慎次郎氏来室（山田町分間園について）

4・10 柴辻委員、学生1名を同行し、午後4時より円光院文書調査

秋山慎次郎氏来室（復原した山田町分間園を持参）

関係機関・調査協力者等に「市史編さんだより」を発送

4・19 近・現代専門部会（第1回）

時 間 午前9時30分～12時

会 場 市史編さん担当

内 容 市制施行以前の甲府の歴史と風俗

斎藤紳悟・保坂、市広報テレビ取材に同行し、法泉寺所蔵史料を予備調査

4・12

伊藤委員来室（社寺建築の調査方法について）

4・17

秋山慎次郎氏来室（小野家文書予備調査について）

4・19 高木主奇、議員委員長宅を訪問。第1回市史編さん委員会について協議

中央三丁目小野亮二郎氏所蔵文書調査（参加者 斎藤康彦

4・20 委員・飯塚一郎山梨大学教授、秋山慎次郎氏・高木主奇

4・26

甲府市と甲府市史編さん委員会・甲府市古文書研究会との間に、業務委託契約締結

伊藤委員来室（社寺建築の調査方法について協議）

5・1 敦野・斎藤、小野亮二郎氏宅を訪問（お茶会関係資料を借

用）

5・2 古屋昌男氏来室（史料持参）

市史編さん調査協力員説明会

5・15

市史編さん委員会全体会議

5・19

市史編さん事業の進捗状況について

5・26

昭和59年度編さん事業計画について

6・12

考古・古代・中世（第1回）、近世（第1回）、近・現代（第2回）、民俗・美術・芸術（第1回）各専門部会開催

6・19

時 間 午後1時～3時 会場 同右

協議事項 1 昭和59年度部会調査計画について

6・26

2 その他の

玉諸神社予備調査（柴辻・服部・中沢 各委員）

5・4	甲府市議会議長小沢政春氏より、明治年間の甲府地籍図を借用	時 間 午後1時30分～3時30分
5・8	市史研究編集会議（第1回）	時 間 午後5時30分～8時 会 場 桜やレストラン
5・10～11	協議事項 「市史研究」創刊号の編集計画について 甲府市古文書研究会、近世文書を整理	会 場 後屋町後藤富雄氏所蔵文書
5・22～24	植松・萩原内委員、高木主査、熱外史料調査（勝田市、 国立歴史民俗博物館）	藤村記念館より、敷島町長田家文書を借用
5・25	市史研究編集会議（第2回）	後屋町後藤富雄氏所蔵文書
	時 間 午後5時30分～8時30分 会 場 社会教育センター	伊藤委員米至（社説アンケート調査について）
	協議事項 1 创刊号執筆者の選定	宮本地区子備調査（斎藤典男委員・高木主査・敷野）
5・28	史料調査（調査先 中央二丁目小沢木太郎氏宅・同富士見 温泉・酒折三丁目飯田松三氏宅・善光寺三丁目牛樂公貴氏 宅、調査員植松・萩原内委員、古屋調査協力員、高木主査、 敷野・斎藤）	文学関係史料調査（調査先 上今井町今井尾平氏宅・下小 河原町内藤孟氏宅、調査員 白介・坂本丙委員、米倉調査 協力員 斎藤）
5・29	伊藤委員求室（昭和59年度調査計画を持参）	高木主査・保坂、熱立古博物館に磯貝委員長を訪問（事 業手帳について協議）
5・30	越口調査協力員來室（史料調査打ち合せ）	相原調査協力員米至（宮本地区史料調査について）
	田代・萩原丙委員來室（遺跡調査打ち合せ）	市内各社寺へ社寺アンケート調査用紙発送
6・1	秋山調査協力員來室（若狭關係史料について情報提供）	五味連作氏來室（五味家文書調査について協議）
6・2	久保寺調査協力員來室	中沢委員來室（「編さんだより」第2号の原稿を持参）
6・4	民俗・美術工芸専門講会（第2回）	田代・萩原委員來室（市内占墳分布調査カード・分布図を 提出）
6・21	（編さんだより、第2号関係資料調査（調査先 横根町一 ツ石・福嶽神社、調査員 敷野・斎藤・保坂） 担当事務打ち合せ（宮本地区資料調査計画について）	荒川・丁日五味和氏所蔵文書調査（五味・白倉・斎藤典 男・守屋各委員、越口調査協力員、高木主査・敷野・斎藤・

## 市史研究編集会議（第3回）

借用

時 間 午後5時30分～8時

7・17

相原調査協力員・高木主兵・数野・斎藤、宮本地区史料調査下見

- 協議事項 1 表記基準・編集要領について  
2 レイアウトについて

6・28

7・18

（調査協力依頼、及び民俗アンケート調査用紙配布）  
担当事務打ち合せ（宮本地区史料調査について）

各部会合同調査（調査先：円光院・一蓮寺、調査員：服部・

7・24

猪狩区有文書・旧宮本村役場文書・下黒平区有文書・下横

斎藤典男・守屋・中沢・伊藤・秋山・坂本・斎藤康彦 各委員、高木主兵・数野・斎藤・保坂）

7・25

翠町林寛吉家文書・同町保坂成治家文書・金澤神社所蔵資料、調査員：磯貝委員長、服部・斎藤典男・伊藤・秋原・島袋・田代・植松・小沢・斎藤康彦・榮辻・白倉・坂本・

妙法寺佐藤久仁氏・天然寺小川井鏡氏来室（社寺アンケート調査について）

7・27

中沢・有泉・手塚 各委員、相原・山本調査協力員、高木主兵・数野・斎藤・保坂・加賀美）

7・6 小沢委員会至（宮本地区史料調査に伴う民俗アンケート調査について）

7・27

市史研究編集会議（第4回）

7・7 保坂、横根二ヶ石の開拓について佐藤正氏よりヒヤリング

時 間 午後5時30分～8時

会 場 社会教育センター

7・7 土屋隆則氏来室（社寺アンケート調査用紙を持参）

7・27

協議事項 1 执筆者の確認

7・13 敷野・斎藤・保坂、都留市・富士吉田市の編さん業務視察

時 間 午後5時30分～8時

会 場 社会教育センター

7・13 山城地区史料調査（調査先：上今井町今井はつの氏宅・西

7・27

協議事項 2 編集方法の検討

7・16 油川町油川寺・同町河野可伝氏宅、調査員：白鳥・坂本・

8・1 北原委員会室（史料調査状況について）

会 場 市史編さん担当

斎藤典男・斎藤康彦・森原 各委員、米倉調査協力員、江間忠義氏、敷野・斎藤）

8・3 埼玉郷土文化会小林甲子男外1名来室（江戸時代の俳人に

7・16 民俗・美術工芸専門部会（第3回）

8・4 北原委員、県立図書館にて史料調査

会 場 市史編さん担当

7・16 民俗・美術工芸専門部会（第3回）

8・10 「市史編さんだより」 第2号発行

会 場 市史編さん委員会（第2回）

7・16 民俗・美術工芸専門部会（第3回）

8・21 宮本地区史料調査について

会 場 市史編さん担当

協議事項 1 社寺アンケート調査回収状況について

8・21 宮本地区史料調査について

会 場 市史編さん担当

2 宮本地区史料調査について

8・21 宮本地区史料調査について

会 場 市史編さん担当

## 会場 斎やレストラン

生4名

- 協議事項  
1 市史編さん事業の推進状況について  
2 今後の編さん事業の推進について  
考古・古代・中世（第2回）・近世（第2回）・近・現代  
(第3回)

8・25 飯田委員室（部会の開催について）  
田代委員米室（穴坂古墳関係資料を調査）

8・27 秋山委員・高木主査、牛島公貴氏宅を訪問（同氏所蔵の穴  
山信昌文書を再調査）

8・29 担当事務打ち合せ（市史のタバ、及び調査協力員打ち合せ  
会議について）

8・30 津全家文書・原家文書・後藤家文書を返却  
関係機関・関係名に「市史編さんだより」第2サを送付

8・31 斎藤康彦委員・秋山調査協力員来室（「市史研究」原稿を  
持参）

9・2～3 田代委員、市内主要古墳を調査  
（調査）

9・4 高木主査、武田関係史料目録の編集について柴社委員と協  
議

9・5 市史研究編集会議（第5回）  
時 間 午後4時  
会 場 市史編さん担当  
協議事項  
(1) 执筆者の確認  
(2) 編集方法の検討

- 1 史料の調査・整理状況について  
2 「近世史料編」の編集計画について  
3 「史料所在目録」の編集について  
近・現代部会

1 史料の調査・整理状況について  
2 今後の調査・研究計画について  
民俗・美術工芸部会

1 日次（案）の確認と執筆分担（案）の作成につい  
て  
2 その他

8・22 高木主査・斎藤、市役所能泉出張所にて役場文書調査  
8・22～25 宮本村行政文書を整理（調査員 斎藤康彦委員、栗大

9・6 高木主査・保坂、県立図書館に飯田委員を訪問（マイクロ  
リーダー等の利用について協議）

9・8	服部・伊藤内委員、大里地区にて民俗ヒヤリング調査（服部委員は翌日もヒヤリング調査を继续）
9・11	伊藤委員末室（社寺アンケート調査回答内容の検討）
9・17	五味正弘氏米室（「市史研究」原稿について協議） 南西中学校1年生7名来室（高畠一丁目の歴史について） 調査協力員打ち合せ会議
9・12	時 間 午後5時30分～7時 会 場 答えレストラン 協議事項 市史編さん史（資料）の調査状況と今後の計画について
9・12～13	堺市教育委員会より、小村・広瀬両氏視察来訪 （委員指導於金枝神社）
9・17	市史研究編集会議（第6回）
9・17	時 間 午後4時～7時 会 場 市史編さん担当 協議事項 原稿の校閲・リライト、及びレイアウトについて
9・20	書類、長田喜二氏宅にて甲府城下絵図のサイズを計測
9・21	史料調査（調査先 上横琴寺町飯島好利氏宅・同町山木二郎氏宅・岩瀬町郷内清季氏宅、調査員・山本調査協力員・高木主査・敷野・斎藤）
9・25	史料調査（調査先 湯村三丁目廣瀬初枝氏宅、調査員・斎藤典男委員・高木主査・敷野・斎藤）
9・26	史料調査（調査先 善光寺一丁目飯田四郎氏宅・酒折二丁
9・27	竹山委員末室（佐野広乃家文書を調査）
9・28	史料調査（調査先 老松町雨宮幸男氏宅・善光寺町富岡古明氏宅 調査員・島袋委員・高木主査・敷野・斎藤） 民俗・美術工芸専門部会（第5回）
9・29	時 間 午後3時30分～6時 会 場 市史編さん担当 協議事項 1 「史料編」刊行までの日程について 2 石造物の取り扱いについて 3 その他の
10・2	史料調査（調査先 丸の内一丁目談露館（中伏家）・和田町武井静次郎氏宅・若松町大沢伊二郎氏宅、調査員・島袋・守屋内委員、根内調査協力員・高木主査・敷野・斎藤） 「近世史料目録」編集に伴う事務打ち合せ会議（近世部会禁内在住委員）
10・2	時 間 午後12時30分～3時 会 場 市史編さん担当 協議事項 1 史料目録の編集について 2 編さん室保管近世史料カードの分類・整理事業
10・2	近・現代専門部会（第4回）
10・2	時 間 午後1時30分～
10・2	会 場 市史編さん担当 協議事項 1 今後の調査・研究計画について

## 2 新聞史料の活用方法について

3 その他

10・4 高木土査・保坂、竜工町中村泰氏宅を訪問（近代史料を併用）

10・8 山史研究編集会議（第7回）

時 間 午後4時～

会 場 市史編さん担当

内 容 校正作業

伊藤委員、丸の内二丁目天然寺・實川本町信義寺を調査

10・9 伊藤委員、西油川町油川寺・里吉町長源寺・落合町報恩寺を調査

10・12 「近世史料日録」編集に係る史料整理（近世部会・飯田・高藤典男・手塚・安達各委員・近・現代部会・森藤康彦委員、甲府市古文書研究会・小林・丹沢・横山・遠藤各会員）

10・18 伊藤委員・元柏原町行藏院・岡町華光院を調査

10・22 「母地誌」研究会議へ出席（服部・高藤典男・森藤康彦各委員、総口調査協力員・高木土査・高藤・保坂）

10・23 服部委員、民俗ヒヤリング調査（対象 大里町桜林えどじ・同町山形窓内氏）

10・24 史料調査（調査先 丸の内二丁目蔵露館（中沢家）・桜井町久保寺調査協力員宅・調査員 小沢・森藤康彦・守屋各委員・高木土査・乾野・高藤）

10・24 高木土査・東京山張（東京在住委員事務打ち合せ）

10・24 黒藤康彦委員、乾野・高藤、朝日二丁目三浦正弘氏宅を訪問（岩尾関係史料を借用）

10・25 織部正紀氏宅史料調査（服部委員・他、落合調査協力員）  
民俗・美術工芸専門部会（第6回）

10・29 民俗・美術工芸専門部会（第6回）

時 間 午前10時～12時

会 場 市史編さん担当

協議事項 1 各委員史料調査報告

2 今後の調査日程について

10・30 東光寺史料調査（調査員 服部・伊藤・守屋各委員・高木主査・敷野・高藤・保坂）

10・31 斎藤康彦委員、三浦家文書（若尾関係史料）を整理

11・1 広報11月号に「市史の夕べ」開催のお知らせを掲載

11・2 坂本・守屋各委員・敷野・高藤・保坂

11・5 斎藤康彦委員、三浦家文書（若尾関係史料）を整理

11・6 「市史研究」創刊号百行（10月31日付）

伊藤委員ほか1名・上町櫛土寺を調査

「郷土史を学ぶ—市史の夕べ」を開催

時 間 午後5時～8時30分

会 場 北公民館

講 話 古代の甲府……………職員委員長

近世庶民の旅……………増田委員

江戸時代の中府代官・村上委員

受講者 77人、「市史研究」43冊を頒布

服部委員・民俗ヒヤリング調査（対象 宮原町渡辺平和氏）  
斎藤康彦委員・三浦家文書（若尾関係史料）を整理

村上・増田・高藤典男各委員来室

11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11	猪狩区有文書を借用 三沢一也氏より甲府関係古文書を借用 小野光三郎・遠山要・五味正弘各氏來不 市議会決算委員会にて、早川(光)議員より市史編さん事 業について質問(市長答弁) 「甲府市史研究」贈呈分を発送 近・現代専門部会(第5回) 時 間 午後5時30分 会 場 市史編さん担当	午後5時30分	時間 午後5時~8時	会 場 リフチ(共済通ビル9F)
11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11	1 編さん委員公の動き(事務局報告) 2 部会所掌事項に係る調査・研究状況と今 後について(各委員報告) 3 戦前の甲府……レポート・竹山益昌 服部委員、民俗ヒヤリング調査(大里町 石原義氏)	午後5時15分~6時15分	協議内容 市史編さん担当	協議内容 市史編さん担当子算について都内ヒヤリング
12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12	市史編さん委員会(第3回) 時 間 午後3時30分~5時 会 場 本舎3階会議室 協議事項 1 山史編さん事業の進捗状況について 2 「甲府市史執筆要領(案)」及び「甲府市 史(全13巻)等の著作権の帰属ならびに 行使に関する覚書(案)」について 3 「編さんだより」第3号の編集(案)に ついて	午後5時30分?	時間 午後6時30分?	協議内容 新聞史料の活用について 近・現代専門部会(第6回) 近・現代専門部会
12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12	1 山史編さん事業の進捗状況について 2 「甲府市史執筆要領(案)」及び「甲府市 史(全13巻)等の著作権の帰属ならびに 行使に関する覚書(案)」について 3 「編さんだより」第3号の編集(案)に ついて	午後5時30分	時間 午後5時30分~6時15分	協議内容 本年部会活動の総括 服部委員、民俗ヒヤリング調査(大里町 永間駒音氏) 斎藤典男委員、市立動物園内の石造物を調査 史料調査(調査先 桜井町久保寺家・他 調査員 高木主 査・斎藤・斎藤)
12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12	考古・古代・中世・民俗・美術工芸合同専門部会 市史編さん委員会全体会議	午後5時30分	時間 午後5時30分~6時15分	協議内容 北原委員、県立図書館所蔵史料調査 昭和60年度市史編さん担当子算について都内ヒヤリング

## 会場 大黒屋

協議内容 本年部会活動の総括

小沢綱雄委員来室（杉浦謙に係る史料提供）

林陽一郎氏より杉浦謙関係史料を借用

町村合併資料作成

12・15  
12・19  
12・25  
12・26  
12・26  
1・8  
1・9

高木主査・数野、武井静次郎氏宅を訪問（近代史料を借用）

高木主査・数野、山製陶美所に手塚委員を訪問（史料日録、の編集について）

飯田委員来室（大木家文書解題執筆に伴う史料調査）

安達委員・古屋喜男氏宅を訪問（倉鹿野家文書解題執筆に伴う史料調査）

1・10  
1・11  
1・11  
1・11  
1・11  
1・18  
1・19  
1・23

高木主査・数野、山製陶美所に手塚委員を訪問（史料日録、の編集について）

小沢秀之委員来室（市内の祭りについて）

植松・守屋両委員、都内美術資料調査

1・18  
1・19  
1・23

高木主査・数野、県外史料調査（横浜開港資料館・他）岩尾開保

「近世史料日録」発行に伴い、各家庭史料収録依頼を行う（対象 広瀬・古屋・大木各家、及び金坂神社）

1・25  
法について

担当事務打ち合せ（「近世史料日録」原稿の統一的記述方

法について）

2・1  
2・4

相原調査協力員・数野・斎藤・宮沢、金坂神社において「近世史料日録」原稿をチェック

有泉委員来室（「編さんだよ」原稿について）  
市教育委員会より、横石塚古墳発掘に伴う調査協力依頼あり

## 2・5 近・現代専門部会（第7回）

時 間 午後5時30分～9時30分

会 場 山手編さん担当

協議内容 1 史料所蔵可能者名簿の作成について

2 岐阜行政文書調査について

3 国会図書館所蔵史料調査について

大木栄一氏より大木家文書を借用

数野・小野寺三郎氏宅を訪問（近世史料を借用）

高木主査・斎藤、三井忠造氏宅を訪問（史料写真撮影）

高木主査、磯貝委員長宅を訪問（当面の事業日程及び60年度事業計画について）

「近世史料日録」編集に伴う原稿最終チェック

2・12  
2・12  
2・12

「近世史料日録」原稿を入稿

甲府市古文書研究会、武井家文書を整理

2・15 民俗・美術工芸専門部会（第8回）

時 間 午後3時30分～

会 場 市史（編さん担当）

協議内容 1 各委員調査報告

2 日次の作成について

斎藤康雄委員・高木主査、県庁総務部総務課を訪問（県行政文書調査について事前協議）

田代・萩原両委員来室（宮原町発見の考古資料を持参）

守屋委員会（編さんだより、原稿について）  
市史研究編集会議（第7回）

間あり。

2・21

3・22

広報主幹答弁

「編さんだより」第3号納品（3月1日付発行）

市史研究編集会議（第7回）

3・23

山梨新報 有楽記載、市史編さん事業について取材

会場 市史編さん担当

3・24

横内調査協力員逝去

協議内容 1 「市史研究」創刊号編集のまとめ

3・29

市史編さん委員会（第4回）

2 「市史研究」2号の編集内容及び口程に  
ついて

3・29

市史編さん委員会（第4回）

2・23 敷野、相川珠算学院の「そろばん資料展」にて、関係資料  
を写真撮影

3・22

「編さんだより」第3号納品（3月1日付発行）

3・19 敷野、相川珠算学院の「そろばん資料展」にて、関係資料  
を写真撮影

3・23

山梨新報 有楽記載、市史編さん事業について取材

3・14 熊谷行政文書調査（近・現代専門部会）

3・24

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・14 高木主査、敷野、斎藤、武藤武子氏宅を訪問（美術資料を  
写真撮影）

3・25

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・25～26 服部・斎藤典男西委員、敷野・斎藤、大和郡山へ出張  
（柳沢文庫所蔵史料調査）

3・25

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・27 斎藤委員・高木主査、横根町積石塚古墳免耕調査現場見学

3・26

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・27 高木主査・敷野・斎藤、武藤武子氏宅を訪問（美術資料を  
写真撮影）

3・27

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・27～8、11～13 県行政文書調査（近・現代専門部会）

3・28

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・28 近・現代各委員及び型大森同君はか8名 史料カード二九  
枚作成

3・28

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・28～9 高木主査、赤穂市史編さん室を業務視察

3・29

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・29 半額町吉井福司氏・五味千代田連絡所長来室（半額町上野  
白治公区有文書（ダンボール2箱）を持参）

3・29

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・29～10 甲府市古文書研究会、平瀬町上野白治公区有文書を整  
理

3・30

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・30～11 甲府市古文書研究会、平瀬町上野白治公区有文書を整  
理

3・31

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・31～12 甲府市古文書研究会、平瀬町上野白治公区有文書を整  
理

3・32

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・31～13 甲府市古文書研究会、平瀬町上野白治公区有文書を整  
理

3・33

市史編さん委員会全体会議（第3回）

3・31～14 熊谷行政文書調査カードを整理（斎藤康彦委員、学生9名）  
市議会秘書委員会にて、小西議員より「市史編さん事業に  
係わる総事業費及び市史頒布による収入見込」について質

「甲府市史 史料日録」近世(1)・納品(50冊)

昭和60年度

- 4・1 山日新聞に「史料日録」発行の記事掲載される  
4・2 高木主査・敷野、故郷内番調査協力員宅を訪問  
　　臨時職員、伊藤典子採用  
　　担当事務打ち合せ（当面する事業日程について）  
4・3・4 伊藤・坂本両委員、高木主査・敷野、東京出張（国会  
　　図書館にて奈市の行政と軍政部（GHQ）に関する史料を  
　　調査。併せて、元GHQ勤務の曾根康太氏よりヒヤリング  
　　を行う）  
4・5 伊藤委員、社寺の建築並びに彫刻の調査を開始（5月17日  
　　までに通算14日、約60件の調査を終了）  
山史編さん担当事務室拡張  
　　約について）  
　　柴辻委員來室（「武田史料日録」の原稿執筆に係る委託契  
　　約について）  
4・6 「甲府市史 史料日録」近世(1)、第一回納品（残部）  
4・10 織口委員長より原市長へ、甲府市史編さんに関する必要と  
　　なるべき事項並びに史（資料）の所在状況について答申  
　　甲府市と甲府市市史編さん委員会・甲府市古文書研究会と  
　　の間に業務委託契約締結  
4・18 昭和59年度部門目標の実績報告作成、及び昭和60年度部門  
　　目標を設定  
4・19 伊東委員来室（GHQ関係資料の活用方法について協議）  
　　高木主査・敷野・斎藤、廣瀬・小野西家及び金枝神社を訪  
　　問（史料日録の贈呈・頒布について）  
4・20・21 甲府市古文書研究会、平瀬区有文書を整理  
4・24 史料調査（調査先 武田四丁目相沢・氏宅・湯村二丁目上  
　　岸根氏宅 調査員 坂本委員・高木主査・敷野・斎藤・保  
　　坂）  
4・25 史料調査（調査先 古川条町宮田郡雄氏宅・高畠三丁目島  
　　田佐太郎氏宅・國母四丁目中橋鶴氏宅・國母七丁目鳥田武  
　　吉家文書 調査員 斎藤康彦委員・種川調査協力員・山本  
　　多佳子氏、高木主査・敷野・斎藤・保坂）  
4・26 史料調査（調査先 国母一丁目人間美雄氏宅・宮本連絡所  
　　調査員 高木主査・敷野・斎藤）  
4・28 小沢委員、山城地区において民俗ヒヤリング調査  
　　担当に大型苦架を設置  
古屋喜男氏來室（史料持參）  
5・7 市議会議長に、市史編さん委員（第2次）推薦依頼を送付  
5・10 甲府市と柴田俊六・高島耕三との間に、「甲斐武田氏史料  
　　日録」原稿執筆に関する業務委託契約を締結  
5・14 高木主査、總務部文書担当と行政文書の保管場所変更につ  
　　いて協議  
5・16 史料調査（調査先 中央四丁目酒木光彦氏宅・治光寺一丁  
　　目閑川嘉夫氏宅・住吉四丁目鷹野八郎氏宅 調査員 斎藤  
　　廉志委員・米倉調査協力員、高木主査・敷野・斎藤・保坂、  
　　伊藤）  
高木主査・伊藤、縦貫委員長宅を訪問（「甲府市史（全13  
　　巻）等の著作権の帰属並びに行使に関する覚書」を締結）

田利恵氏宅・塙部三丁目鉢木松江氏宅・ヒヤリング対象

武田三丁目飯田米太郎氏・調査員・高藤典男・坂本問委員・

山岡調査協力員・高木主査・敷野・高藤・保坂・

5・21～22 中府市古文書研究会・鷹野家文書を整理

山宮本役場文書及び總務課保管の市行政文書（一部）を、

鷹さん担当資料室に移管

5・31 担当事務打ち合せ（委嘱式・委員会等の進行について）

市史編さん委員・新専門委員会委嘱式

6・3 時間 午後3時～3時30分

会場 市長室

市史編さん委員会（第1回）

時間 午後3時30分～4時

会場 幕張町

協議内容 1 正副委員長の選出

2 事業経過報告

3 昭和60年度鷹さん事業計画について

考古・古代・中世（第1回）、近世（第1回）、近・現代（第1回）、民俗・美術工芸（第1回）各専門部会開催

4 時間 午後4時～6時

会場 同上

協議内容 1 正副部長の選出

2 昭和60年度部会活動計画について

北原委員、県立図書館において史料調査

6・7 調査協力員事務打ち合せ会議

時 間 午後4時～

会 場 市史編さん担当

協議内容 史料調査の現状と今後の調査計画について

6・10 小沢秀之委員、山城地区民俗調査

6・17 小沢秀之委員来京（山城地区民俗調査について。午後より小山町周辺を調査）

6・18～19 甲府市古文書研究会・鷹野家文書を整理

6・20 史料調査（調査先・国母七丁目横口調金協力員宅・調査員・高木主査・敷野・高藤・保坂・伊藤）

6・25 史料調査（調査先・小瀬町松木紀久氏宅・調査員・磯貝・高藤典男・中沢・安達各委員・米吉調査協力員・高木主査・敷野・高藤・保坂・伊藤）

6・27 史料調査（調査先・元柳屋町妙遠寺・同町行蔵院・湯村二丁目小野宏氏宅・調査員・高藤典男委員・塙原調査協力員・高木主査・敷野・高藤・保坂）

7・1 「市史編さんだより」第4号編集作業開始

7・4～5 甲府市古文書研究会・平瀬区有文書を整理（5日高藤典男委員指導）

7・5 石和町上橋久雄氏来京（水鳥関係資料を持参）

7・9 近世専門部会（第2回）

時間 午後3時～

			会場	パンやレストラン
			協議内容	各委員セレクト資料の検討・他
7・12	7・11	7・12	飯田委員来室	〔近世史料編〕原稿作成について、 民俗・美術工芸部会（第2回）
		7・13	時 間	午後2時～
		7・13	会 場	市史編さん担当
		7・13	協議内容	1 各部会員調査報告 2 板日次の検討
		7・14	山口新聞・YBS、一蓮寺発見の龍湫周浮作・絵本墨四不 動明王図」及びに勝善寺発見「夢想図飾像」等について取 材	
		7・15	有泉委員、山梨大学学生鈴木羊子・石原和也両氏来室（新 聞インデックス作業について打ち合せ）	
		7・16	新聞インデックス作業開始（8月末までに1人1H2時間、 合計86時間を実施 調査員 山梨大学学生鈴木・石原両氏）	
		7・17	高木主査、県立図書館長に「甲州文庫」等の同館所蔵史料 の閲覧及び筆写について協力を依頼	
		7・18	旧代・萩原委員来室（一の森経塗遺跡の調査について） 社寺調査（調査先 後原町勝善寺・大里町円満寺・同町福 泉寺 調査員 伊藤委員・高木主査・敷野・斎藤 ※胎内 鉛文をもつ祝迦如来像を発見）	
7・19	7・22	7・19	高木主査、甲府市占文書研究会例会に出席。近世文学史料 等の筆写について協力を依頼	
8・7	8・6	8・6	有泉委員、県立図書館において新聞インデックス作業を指 導	
7・23	7・23	7・23	近・現代専門部会（第2回）	
		7・23	時 間	午後4時～
		7・23	会 場	市史編さん担当
		7・23	協議内容	1 新聞インデックス作業について 2 GHQ関係史料の史料化について 3 近世編との時代区分について 4 日次案について
		7・24	高木主査・敷野・斎藤、朝氣道路発掘現場を見学	
		7・24	斎藤委員委員外学生4名 小瀬町松木家において文書整理 (26日まで)。市内巡回下見及び上猪澤寺町一の森経塗遺 跡現地確認調査を実施（調査員 斎藤委員外委員・高木主査・ 敷野・斎藤）	
		7・31	斎藤委員外学生4名、小野家文書を整理（8月1日ま で）	
		8・1	考古・古代・中世専門部会（第2回）	
		8・1	時 間	午後3時～
		8・1	会 場	パンやレストラン
		8・1	協議内容	1 一の森経塗遺跡の発掘について 2 武田関係史料日記の編集について 3 「通史編」日次案の検討
		8・7	勝善寺発見の祝迦如来像について	
		8・7	社寺調査（調査先 総行四丁日慈光院 調査員 伊藤委員、 高木主査、甲府市占文書研究会例会に出席。近世文学史料 等の筆写について協力を依頼）	

8・9	高木主査、敷野・斎藤) 社寺調査（調査先 後深町勝養寺 調査員 織田・服部・ 中沢・伊藤・秋山各委員、高木主査・敷野・斎藤）
8・12	市史編さん資料室に、リーダー・プリンターを設置 民俗・美術工芸専門部会（第3回）
8・21	時 間 午後2時～5時 会 場 市史編さん担当 協議内容 1 各部会調査報告 2 板日次の発行 「市史編さんだより」第4号納品
8・27	近世寺門部会（第3回） 時 間 午前9時～12時 会 場 市史編さん担当 協議内容 1 各部会作業状況報告 2 第2次セレクト史料について
9・5	市内意見を実施 時 間 午後1時～5時30分 出席者 編さん委員・寺門委員・協力員 計34名 見学場所 新開発洋房外市内13か所 市史編さん委員会合同懇親会 会場 リックス
9・28	秋山義貞米室（勝若・秋山如来像胎内銘文の解説について） 高木主査・敷野、国母文化協会会員会議へ出席（史料調査 への協力を依頼）
8・31	高木主査、敷野、秋山義貞米室（勝若・秋山如来像胎内銘文の解説について） 高木主査・敷野、国母文化協会会員会議へ出席（史料調査 への協力を依頼）
9・2	高木主査、古代の山梨を知る会役員会へ出席 文学関係史料及びヒヤリング調査（調査先 平瀬町久保寺
9・11	紀氏宅・同町長谷川博氏宅 調査員 白倉委員、高木主査・ 敷野・斎藤) ※事務局斎藤・保坂、県立図書館における「近世史料編」 原稿作成作業を開始（10月29日までに計33日、二〇〇字 精原稿用紙五六七枚分を墨写）
9・13	萩原委員、山本調査協力員、高木主査・敷野、一の森經家 道跡発掘調査について、曾林署及び関係自治公長宅を訪問 し、発掘の承諾及び調査協力を要請
9・18	甲府市古文書研究会、私立図書館において「近世史料編」 の原稿作成（12日まで） 柴辻委員、群馬県史編さん室へ出張（武田関係文書調査） 市史研究編集会議（第1回）
9・19	高木主査、福木光彦氏宅を訪問（「江戸時代の甲府上水」 の寄贈を受ける）
9・25	高木主査、県立図書館に飯田委員を訪問（「近世史料編」 の編集について） 高木主査、県立図書館に飯田委員を訪問（「近世史料編」 について、柴辻委員・高島雄氏と打ち合せ）
9・28	萩原委員、敷野、繩口調査協力員宅を訪問（姫見塚につい て国母文化協会会員3名より説明を受ける） 市史研究編集会議（第2回）
10・1	時 間 午後4時

			会 場 市史編さん担当	教野、甲府林務事務所職員2名と併に、一の森経塚遺跡発掘予定地を現地調査
10・8			協議内容 第2号の編集・レイアウトについて	甲府林務事務所より保安林内作業許可がおりる 柴辻委員・高島経雄氏來至(「武田関係史料日録」原稿を持參。高木主査と編集方法等について協議)
10・14		近世専門部会(第4回)	時 間 午後3時	史料調査(調査先 岩葬町人泉寺 調査員 柴辻・高島典男内委員、高島氏、斎藤紹信)
10・14		近・現代専門部会(第3回)	時 間 午後4時	一の森経塚遺跡発掘調査局を市教委に提出
10・15		時 間 午後4時	場 所 山史編さん担当	社寺調査(調査先 城東丁口日・石川家不動尊・朝氣一丁 日光正寺・伊勢二丁口・光明寺・朝口二丁口 広正寺・伊勢二丁口 遠光寺 調査員 伊藤委員)
10・15	(対象 石原衡氏)	協議内容	1 新聞インデックス作業について 2 GHQ関係史料の活用について 3 GHQ関係ヒヤリング調査の実施について	高藤・保坂、県立図書館における「近世史料編」原稿作成 作業を再開
11・7			時 間 午後3時	担当事務打ち合せ(編さん委員会、「市史の夕べ」の進行について)
11・14			場 所 山史編さん委員会(第2回)	市史編さん委員会(第2回)
11・21			時 間 午後3時	市上委員会外学生2名、県立図書館において「近世史料編」原稿作成
11・22			場 所 山史編さん委員会(第2回)	市上委員会外学生2名、県立図書館において「近世史料編」原稿作成
11・25			時 間 午後3時	担当事務打ち合せ(編さん委員会、「市史の夕べ」の進行について)
11・26			場 所 山史編さん委員会(第2回)	市史編さん委員会(第2回)
11・25~26			時 間 午後1時~2時15分	市上委員会外学生2名、県立図書館において「近世史料編」原稿作成
10・10	市制95周年記念式典 於県民会館 高木主査・教野流動	協議内容	1 昭和60年度市史編さん事業 上半期のま	考古・古代・中世(第3回)、近世(第5回)、近・現代
10・10	服部委員、大鏡田地区において民俗ヒヤリング調査		とめ	(第4回)、民俗・美術工芸(第4回)、刊行(第1回)
10・17	古代の山梨を知る会 中込茂樹名誉会長外1名来室		2 市史編さん事業の今後について	内作業許可申請を提出
10・18	高木主査・教野、甲府林務事務所を訪問へ一の森経塚遺跡発掘に伴う保安林内作業許可申請について			
10・29	教野、甲府税務署を訪問(原稿料に係る所得税の源泉徴収について)			
11・1	教野、甲府林務事務所に一の森経塚遺跡先鋒に伴う保安林内作業許可申請を提出			

各専門部会開催

時 間 午後2時30分～4時

会 場 同右

協議内容

考古・古代・中世部会

1 武田氏文書日録の編集状況について

2 一の森発掘調査について

近世部会

1 「近世史料編」収録史料のセレクト及び

筆者状況について

2 筆者・解説等の原稿化促進について

近・現代部会

1 G.H.Q関係ヒヤリングの実施について

2 「近・現代史料編」の骨格について

民俗・美術工芸部会

1 各委員調査・研究報告

2 「民俗・美術工芸史料編」の目次・執筆

口程等について

刊行部会

1 昭和61年度市史編さん関係予算要求（案）

について

郷土史を学ぶ—市史のタペー開催

時 間 午後5時1/8時30分

会 場 甲府市南西公民館

講話 戦国時代の甲府……………柴辻俊六

近世甲府近在……………高橋典男

甲府近郷の親分子分情行……………服部治郎

受講名 70名 「市史研究」2号頒布

11・28 戦後の甲府市政に係る座談会を開催（近・現代専門部会）

時 間 午後4時7時

会 場 ベルエストラ

ヒヤリング対象者 曽根康夫・樋島昇・渡本愛子・小林

静・保坂忠信・奈良進 各氏

12・11・29 山口新蔵「甲府市史研究」第2号の紹介記事掲載

昭和61年度予算要求書提出

伊藤、「戦後の甲府市政に係る座談会」収録データー翻訳開始

（12月21日終了）

12・4 甲府市古文書研究会、県立図書館において「近世史料編」

の原稿作成

史料調査（調査先 北口三丁目 豊田幸友氏宅 調査員

塙原調査協力員 高木主査・敷野・高藤）

天尊寺所蔵美術資料を写真撮影

12・17～19 高木主査・敷野・高藤・和歌山市史編さん業務を視察

について

12・18 齋藤典男委員長室（豊田文書を整理）

12・20～21 北原委員外学生3名、県立図書館において「近世史料

編」原稿作成検出

12・21～22 一の森狂歌遺跡第一次調査（経塚遺構3基を

中尾良次氏より甲府市地籍圖を借用

12・23	考古・古代・中世（第4回）、近世（第6回）、近・現代（第5回）、民俗・美術工芸（第5回）各専門部会、及び合意懇親会を開催	時 間 午後5時	会 場 紫玉苑
12・24	増田委員、県立図書館において「近世史料編」原稿作成協議内容	—各委員相互の意見交換—	
12・25	増田委員、県立図書館において「近世史料編」原稿作成	・の森経塚遺跡発掘調査について記者発表	
1・6	1・6	1・6	1・6
1・8	1・8	1・8	1・8
1・10	1・10	1・10	1・10
1・13	1・13	1・13	1・13
1・9	1・9	1・9	1・9
1・20	1・20	1・20	1・20
1・22	1・22	1・22	1・22
1・23	1・23	1・23	1・23
1・27	1・27	1・27	1・27
民俗・美術工芸専門部会	民俗・美術工芸専門部会	民俗・美術工芸専門部会	民俗・美術工芸専門部会
会 場	会 場	会 場	会 場
市史編さん担当	市史編さん担当	市史編さん担当	市史編さん担当
時 間	午後2時	午後2時	午後2時
協議内容	1 各委員調査・研究状況	2 「史料編」執筆者の選定について	3 「史料編」掲載写真一覧表の作成について
1	2	3	
2・7~9	北原委員外学生3名、県立図書館等において「近世史料編」原稿作成	北原委員外学生3名、県立図書館等において「近世史料編」原稿作成	北原委員外学生3名、県立図書館等において「近世史料編」原稿作成
2・13	2・13	2・13	2・13
2・14	2・14	2・14	2・14
2・16	2・16	2・16	2・16
2・17	2・17	2・17	2・17
2・26	2・26	2・26	2・26
2・27	2・27	2・27	2・27
2・28	2・28	2・28	2・28
3・2~4	3・2~4	3・2~4	3・2~4
3・4	3・4	3・4	3・4
第14回	近世専門部会	近世専門部会	近世専門部会
時 間	午後1時~4時	午後1時~4時	午後1時~4時
会 場	市史編さん担当	市史編さん担当	市史編さん担当
出席者	村上・北原・白倉・手塚・増田・安達・(斎藤)各委員、高木主計・敷野・高橋・保坂	村上・北原・白倉・手塚・増田・安達・(斎藤)各委員、高木主計・敷野・高橋・保坂	村上・北原・白倉・手塚・増田・安達・(斎藤)各委員、高木主計・敷野・高橋・保坂
協議内容	1 「近代史料編」原稿作成状況について		
1			
1・28	1・28	1・28	1・28
栗	栗	栗	栗

2 「史料編」の日次案について

3 他

1 の森経営遺跡発掘調査報告の作成について

いて

3・6

史料写真撮影調査（調査先 塚原町恵連院 調査員 高木主査・敷野・斎藤）

3・11

飯田・斎藤（典男）両委員末尾（高木主査と「近世史料編」日次案について検討）

3・13

高木主査・敷野、東京出張（柴辻委員とともに、武田氏文書目録）最終校正)

3・25

調査協力員会議

時 間 午前11時

会 場 館やレストラン

協議内容 1 編さん事業の進捗状況、及び史料調査状況について

2 61年度編さん事業計画、及び史料調査の重点

3・26

市史編さん委員会全体会議

時 間 午後1時30分

会 場 館やレストラン

協議内容 1 昭和60年度市史編さん事業のまとめ

2 昭和61年度市史編さん事業計画について  
考古・古代・中世（第14回）、近世（第15回）、近・現代（第21回）、民俗・美術工芸（第20回）各専門部会開催

昭和61年度

4・1 碇記、飯室るり子・芝田幸代採用

4・10 甲府市と平府市市史編さん委員会・甲府市古文書研究会との間に業務委託契約締結

4・13 伊藤委員、社寺調査（大里町瑞光寺・吉上条町雪窓院・貢川（丁目）慈源寺）

小沢秀之委員、玉諸神社祭を調査

4・14 伊藤委員、社寺調査（桜井町逍遙院・同町東禅寺・横根町光福寺）

協議内容 考古・古代・中世部会

4・17 都留市史編さん室より視察來訪（3名）

## 4・18 民俗・美術工芸部会（第21回）

時 間 午後3時～

場 所 編さん担当

協議内容

1. 執筆予定者の選定について  
2. 目次案の検討  
3. 執筆基準について

4・21

小沢秀之委員、山城地区にて民俗調査  
4・24 編さん室所蔵地（縦）図類の整理を開始

4・26～27 甲府市古文書研究会、市立図書館において向町小林家

文書を整理

5・2 議員より市長へ「甲府市史編さんに関するべき事項並びに近世甲府の推移を示す史料の状況について」答申（昭和60年度分）、市長より議員委員長へ「甲府市史編さんに関して必要となるべき事項並びに民俗・美術工芸及び近世史に係る史（資料）科の状況について」諮問

新専門委員・調査協力員委嘱式

市史編さん委員会議（第13回）

時 間 午後3時～

会 場 拙やレストラン

協議内容 1. 市史編さんに関する現状について（専門委員の増員・協力員の委嘱・61年度業務

委託契約締結）

2. 昭和61年度市長諮問について

考古・古代・中世部会  
第22回）、民俗・美術工芸（第21回）、各専門部会開催

## 時 間 午後4時～

会 場 同 上

協議内容

1. 61年度史料調査計画  
2. 史料編の構成・執筆分担

4・21

「近世史料編」原稿執筆状況の確認

4・24 収録史料の精査及び取捨

4・26～27 細目及び収録史料配列順序の確定

近・現代部会

5・21 近代史料編の構想について

5・22 61年度調査計画について

5・23 民俗・美術工芸部会

5・27 史料編執筆予定者の選定

5・28 日次案の検討

5・29 版面委員來室（史料編収録史料をチェック）

5・14 小沢秀之委員、民俗調査（池田地区）

5・16 小沢秀之委員、民俗調査（猪狩町）

5・22 社寺調査（調査員 伊藤委員・高木主査・數野・渡辺・対象 桜井町東禅寺・朝日四丁目淨興寺・横根町光福寺・青光寺・丁日善照寺・宝二丁目光雲寺）

- 5・23 市内各小・中学校へ、校務口説に係るアンケート調査票を送付

考古・古代・中世（第15回）、近世（第16回）、近・現代（第22回）、民俗・美術工芸（第21回）、各専門部会開催

会場 編さん担当

会場 編さん担当

協議内容

1 近代史料編の構成について

2 商家のおかみさんによる座談会の開催について

3 新聞インデックス作業について

5・28 小沢秀之委員、民俗調査（飯田地区）

2 表記基準の作成

3 新聞インデックス作業について

6・3 小池主幹・高木主査・敷野・渡辺・宮木連絡所において猪  
狩区有文書を調査

6・6 美術資料調査（調査員 守屋委員・敷野・渡辺 調査先  
中央二丁目大木精之助宅 ※二代目広重を中心とする肉筆  
画約50点を撮影）

6・23 伊藤委員来室（古文書研究会、林家文書を整理  
報告）

6・24 伊藤委員来室（社寺調査について報告）

6・6 近世専門部会（第17回）

6・9 時間 午後5時

6・27 社寺調査（調査員 伊藤委員・山本調査協力員・高木主査・  
敷野・渡辺 調査対象 東光寺・町婦命院・下横琴寺・長宝  
寺・同町白山神社）

6・24 伊藤委員来室（古文書研究会、林家文書を整理  
報告）

6・10 白倉・清水内委員来室（近世史料編 取締内容の調整）

6・17 伊藤委員・江間忠常氏・社寺調査（上布郡町立病院・同町  
正覚寺・高成町日性院）

7・10 県立図書館においてリーダー・プリンターによる新聞インデックス  
作業を開始（8月30日までに延一八〇時間を実施）

7・15 竹山・白倉内委員来室（古文書研究会 原稿提出）

6・19 小沢秀之委員、民俗調査（石窓町・茶道）

6・21 白倉委員来室（文書資料について照合作業）

7・18 座談会（女性からみた戦前の町と暮らし）を開催（主催  
近・現代専門部会）

7・29 伊藤委員・江間忠常氏・社寺調査（上横琴寺・下横琴寺・下  
横琴寺町長宝寺・同町興國寺・同町白山神社）

8・1 近・現代専門部会（第23回）

8・1 渡辺洋子氏来室（甲府城内建築物の復原図を寄贈）

6・23 時間 午後5時

6・21 伊藤委員来室（大木家美術資料調査報告）

6・22 伊藤委員・江間忠常氏・社寺調査（上横琴寺・下横琴寺・下  
横琴寺町長宝寺・同町興國寺・同町白山神社）

7・29 伊藤委員・江間忠常氏・社寺調査（上横琴寺・下横琴寺・下  
横琴寺町長宝寺・同町興國寺・同町白山神社）

8・1 渡辺洋子氏来室（甲府城内建築物の復原図を寄贈）

8・11

近世専門部会（第18回）

時 間 午後3時

会 場 編さん担当

協議内容 1 「近世史料編」掲載史料の確定と構成

2 組見本の納品

3 校正及び印刷日程について

「近世史料編」組見本納品

8・12 蔵山委員来室（「近世史料編」原稿入稿について）

8・13 「近世史料編」第一回入稿（第七～十章）

8・19 「近世史料編」第二回入稿（第一～四・六章）

8・20 市史研究編集会議（第10回）

時 間 午後5時

会 場 編さん担当

協議内容 1 「市史研究」第3号掲載原稿の確認

2 編集・校正日程について

8・23 伊藤委員、社寺調査（上積翠寺町長宝寺・桜井町造道院・岡町東禅寺）

8・27 民俗・美術工芸専門部会（第23回）

時 間 午後3時

会 場 編さん担当

協議内容 1 「民俗・美術工芸史料編」組見本の検討

2 秋葉分担の確認

9・2 山本委員来室（GHQマイクロフィルムの焼付について）

9・10 小沢秀之委員、民俗調査（山城地区）

9・24～25 甲府市古文書研究会、竹口向村文書を整理

9・26

小池主幹・高木主査・数野・大栗守を調査

「近世史料編」の初校を開始

小沢秀之委員、武田神社等において石碑調査

史料調査（調査員 山本委員・船口調査協力員 調査対象

数野・渡辺、「市史研究」掲載字真を撮影（市内各所）

住吉四丁目（数野八郎氏宅）

「市史編さんだより」第6号入稿

「市史研究」第3号納本

斎藤康慈・山本両委員、出生小学校にて校務日誌を調査

堺等市より本市編さん業務を視察來訪

社寺調査（出陣者 西川新次郎立夫術館長・伊藤・斎藤典

男両委員、高木主査・渡辺、地元協力者 江間忠寄・斎藤

神悟氏ほか）

山梨日々新聞に「市史研究」第3号の紹介記事掲載

磯貝委員長・田代委員、東京国立博物館「絵画展」（本市

免賛賛料展示）を視察

市史編さん委員会議（第14回）

時 間 午後1時

会 場 缶やレストラン

協議内容 1 近世町方史料編の編集状況について

2 62年度事業計画について

考古・古代・中世（第16回）、近世（第19回）、近・現代（第24回）、民俗・美術工芸（第24回）、飛行（第4回）の各専門部会開催

時 間 午後2時40分

会場同右

考古・古代・中世部会

場所編さん担当

協議内容 近代史料編目次案の検討

市史編さん全体会議

時間 午後5時30分

- 1 史料編目次案と執筆分担について  
2 今後の調査計画について

近世部会

1 近世町方史料編の進行状況  
2 掲載内容の確認

近・現代部会

1 近代史料編の構想及び執筆計画について  
2 その他

民俗・美術工芸部会

1 史料編執筆状況について  
2 史料編組見本の検討

民俗・美術工芸部会

1 史料編執筆状況について  
2 史料編組見本の検討

刊行部会

1 刊行計画の一部変更について  
2 近世町方史料の領布價格について

刊行部会

1 「市史編さんだより」第6号発行

新聞インデックス作業

1 12月3日  
2 12月10日

新藤康吉委員、県立図書館において新聞インデックス

1 12月11日  
2 12月13日

新藤康吉委員、小沢秀之委員、民俗調査（西油川町）

1 12月12日  
2 12月12日

小沢秀之委員、民俗調査（西油川町）

1 12月18日  
2 12月20日

坂本委員、県立図書館において新聞インデックス

1 12月23日  
2 12月23日

近・現代部会（第25回）

時間 午後2時30分

場所 古名屋ホテル

協議内容 編さん事業の今後の展望について

深沢勝氏・斎藤典男委員・敷野・渡辺・藤村記念館所蔵史料調査

史料編掲載写真を撮影

二沢一也氏米室（乙黒政方の芸能を持參）

高木玉香・敷野・渡辺・藤村記念館所蔵史料調査

斎藤典男委員・敷野・渡辺・深沢勝氏・藤村記念館において近世町方史料編掲載写真を撮影

斎藤典男委員・高木玉香・敷野・深沢勝氏・坂田典信氏宅にて坂田文書を撮影

小沢秀之委員・民俗調査（国母地区）

敷野・渡辺・近世町方史料編掲載写真を撮影

小沢秀之委員・樋口調査協力員・大里地区において念佛講を調査

小沢秀之委員・民俗調査（西油川町）

近世町方史料編パンフレットを編集

小沢秀之委員米室（大里地区念佛講について報告）

近・現代専門部会（第26回）

時 間 午後4時

場 所 編さん担当

協議内容 近代史料編の検討

2・4	時 間	午後3時～
3・13	場 所	担当事務室
	協議内容	史料の調査・研究状況、及び史料編執筆状況について
		中国四川省研修生劉戰國氏、本山編さん業務を研修
2・10		2・10 稲葉明氏来至（石氏家文書を持参）
2・12		2・12 甲府市古文書研究会、石氏家文書を整理
2・14		2・14 守屋委員、東京国立博物館において、市史関係美術史料の鑑定を依頼
2・24		2・24 高木主査、穂貝委員長宅を訪問（近岡町方史料編の監修作業）
3・6		3・6 山本委員、近・現代に係るヒヤリング調査（上石田地区）
	時 間	午後4時～
	場 所	編さん担当
	協議内容	1 仮日次の検討
2		2 収録史料の状況
3・10		3・10 山本・島袋両委員、市議会業事録を調査
		高木主査、清水委員と「方言」「民謡」の執筆について協議
3・13		3・13 草津町法編さん業（2名）より本市編さん業務を視察來訪
4・15		4・15 伊藤委員・河野氏、社寺調査（飯田八幡神社）
4・13		4・13 ～ 14 近岡町方史料編を一般配布（西序令会議室 午前10時～午後4時）
		市史予約申込者へ宅配開始

- 山梨県書店組合甲府支部長 須藤氏外2名来室（甲府市史の販売について要望書提出）
- 5・13 高木主査、書店組合との甲府市史販売契約について顧問弁護士と協議
- 5・18 高木主査・數野・芝田、史料調査（愛宕神社文書・府中八幡神社文書を借用）
- 5・19 甲府市と甲府市市史編さん委員会、甲府市古文書研究会との間に業務委託契約締結
- 考古・古代・中世部会（第17回）
- 時 間 午後3時～
- 場 所 箱やレストラン
- 協議内容 1 史料編の構成及び執筆計画について  
2 免振調査計画について
- 近世部会（第20回）
- 時 間 午後3時～
- 場 所 箱やレストラン
- 協議内容 1 史料編の構成及び執筆計画について  
2 免振調査計画について

- 5・20 楠本・北原両委員、高木主査、村方史料編の編集について
- 5・21 深沢勝氏、樋さん室において府中八幡神社文書を撮影（斎藤典男委員監場）
- 5・22 山本委員・高木主査・數野・飯室、製糸関係史料調査（中央五丁目・中村英庭氏宅）
- 近・現代専門部会（第28回）
- 時 間 午後5時～
- 場 所 編さん担当
- 協議内容 1 近代史料編の構成及び執筆分担について  
2 今後の調査計画
- 5・23 楠本・北原両委員、高木主査、村方史料編の編集について
- 5・24 伊藤委員・河野氏、社寺調査（立本寺・円光院・国母熊野神社）
- 5・25 楠本・北原両委員、高木主査、村方史料編の編集について
- 5・26 伊藤委員・河野氏、社寺調査（立本寺・円光院・国母熊野神社）
- 5・27 飯田・北原両委員、高木主査、村方史料編の編集について
- 協議（於県立図書館）
- 6・1 市史編さん委員会開会
- 時 間 午前11時～
- 会 場 自治研修センター
- 協議内容 1 正副委員長の選出
- 2 市史編さん事業の経過及び今後の計画について
- 協議内容 史料編執筆状況の確認
- 藤原武芳氏来室（文献史料を古跡）
- 市史編さん全体会議（第8回）

		時	間	午後1時15分	調査協力員事務打ち合せ会議
会	場	同	右		時
協議内容	1	昭和62年度市史編さん事業計画について	間	午後2時30分	調査協力員事務打ち合せ会議
考古・古代・中世（第18回）、近世（第21回）、近・現代（第29回）、民俗・美術工芸（第27回）、刊行（第5回）各専門部会開催	2	その他	午後2時30分		
考古・古代・中世部会	1	発掘調査計画について	6・17	6・18	熊本市より本市編さん業務を視察（職員2名）
史料編集部会次回の作成について	2	史料編集目次の作成について	6・24	6・24	府中八幡神社文書・愛宕神社文書を撮影
近世部会	1	村方史料編の構成及び、執筆計画について	6・25	6・25	山本委員、国会図書館において史料調査
2	市史講座の運営について	7・1	7・1	増田委員、県立図書館及び市史編さん担当において史料調査	
近・現代部会	1	史料編取録史料の選定について	7・8	7・8	史料調査（調査員 増田・齊藤典男両委員、樋口協力員、高木玉喜、敷野、又田 調査先 三沢一也・田中静江・岡他平・秋山忠雄・大間英雄各氏宅）
2	史料編執筆計画について	7・9	7・9	民俗・美術工芸史料編の原稿チェック作業を開始	
民俗・美術工芸部会	1	民俗・美術工芸史料編の取録内容について	7・13	7・13	山本委員、編さん担当及び向町小林要治氏宅において史料調査
2	編集日程について	14	14	教野・古府中町教野保成・保坂勝両氏所蔵史料を調査	
刊行部会	1	近世史料編の頒布状況について			上水道関係史料調査（調査員 有泉委員・高木玉喜・敷野
2	書店組合からの要望とその対応について			調査先 水道局・半澤淨水場・他）	
				鈴尾正幸氏来室（「方言」の原稿作成について）	
				社寺調査（調査員 伊藤委員・相原協力員・高木玉喜・敷野	
				齊藤康彦委員・保坂家文書を整理	

7・14/15 甲府市古文書研究会、立法院文書を整理  
7・21 第3回「市史の夕べ」開催

時間 午後5時20分～8時

会場 社教センター大ホール

講話 「甲府御金蔵破り一件」 北原 道

「町役人の交代と名主申合取定書」 手塚寿男

「甲府の時の趣」 飯田文弥

入場者 約100人

7・24 リーダープリンターによる新聞インデックス作業開始

座談会「甲府における諫言のあゆみ」開催

主催 近・現代専門部会

ヒヤリング対象 中村英雄氏、外6名

福井市史編さん委員、立川氏来室（史料調査）

齊藤康彦委員来室（新聞インデックス作業のアルバイト学生を指導）

8・4 史料調査（調査員 坂本、山本内委員、數野、芝田 調査）

先城東二丁目長谷俊郎氏宅

市史研究編集会議

時間 午後5時15分！

会場 室やレストラン

座談内容 「市史研究」4号の編集及び校正日程について

北原委員来室（村方史料編集史料のピックアップ）

民俗・美術工芸専門部会（第27回）

時間 午後2時～6時30分

会場 室やレストラン

協議内容 民俗・美術工芸史料編の原稿チェック、及び  
8・26 齊藤康彦委員・飯室・三枝、県民情報センターにおいて統計史料調査

9・2/3 国谷美系博物館所蔵史料調査（石見・斎藤・島袋・山本各委員、高木主査、数野、飯室）

9・8 飯室・三枝、県民情報センターにおいて統計史料調査

9・8/9 甲府市古文書研究会、保坂家文書を整理

9・9 近・現代専門部会（第30回）

時間 午後4時30分！

会場 室やレストラン

協議内容 1. 統計史料の掲載方法について

2. 各委員調査、研究状況について

山本委員、新町においてヒヤリング調査

高木主査・数野・芝田、朝日二丁目二浦正弘家を調査（若尾園保史料の寄贈を受ける）

9・10 高木主査・久保寺、山梨民謡協会会長 望月真光氏宅を訪問（民謡の分類方法について）

9・14 川田鶴林撰定地名調査（調査員：秋原委員・久保寺・協力員・高木主査・数野 現地案内：長谷川篤郎・塙田耕・長谷川政一・長谷川保各氏）

数野、文化財研究所に秋原委員を訪問（田代木戸口を加えて、遺跡発掘調査及び、史料撮影等內容について協議）

9・21 敦野、長谷川篤郎・長谷川保・高野令司・望月真光太郎・山口哲各氏宅を訪問（遺跡発掘調査の承諾書をいただく）

9・22	清水・白倉尚委員会室（近代史料編への文字史料の掲載について高木主査と協議）
10・6	三浦正弘氏より、片尾因係史料の追加寄贈あり
10・7	甲府税務署へ給与支払事務所開設届を提出
10・13	飯室・久保寺、藤部委員宅を訪問（民俗・美術上芸史料編の原稿監修を依頼）
10・14	高木主査、藤部委員宅にて史料編第8巻のリライト、その後職員委員長宅を訪問（事務打ち合せ）
10・19	古代の山梨を知る会会長 久保寺春雄氏、甲斐歴史会会长 花井邦直氏、同事務局上橋通貢・小林森雄氏来室（遺跡発掘調査について協力を依頼）
10・22	一橋大学研究生 フランシス・モット氏来室（甲府城関係史料を調査）
10・23	数野、文化財研究所に発掘器材を運搬、併せて文化財研究所 横原氏と川田鶴勝推定地の下見、及び萩原委員を交えて発掘打ち合せを行う
10・27	「市史研究」第4号納品
11・5	川田鶴勝発掘調査着手
11・12	市史編さん委員会議（第16回）
11・13	YBS、川田鶴勝発掘現場を収材
11・16	山口新聞に、川田鶴勝発掘調査の記事掲載
11・17	川田鶴勝及び上士忍遺跡現地説明会を開催（出席者15名、考古・古代・中世専門部会（第19回）始式出席）
11・18	YBS・山口新聞社取材
11・19	川田鶴勝現地説明会について
11・24	考古・古代・中世専門部会（第31回）近・現代専門部会（第31回）
11・25	川田鶴勝発掘調査（第22回）
11・25	近世専門部会（第22回）
11・25	時 間 午後5時
11・25	会 場 住やレストラン
11・25	協議内容 「民俗・美術工芸史料編」の編集について
11・25	担当事務打ち合せ（「民俗・美術工芸史料編」原稿チエツク及び入稿について）
11・25	川田鶴勝発掘調査において、土器の調査及び構跡を発見

会場 案やレストラン

協議内容 「近世村方史料編」原稿執筆状況について

11・30

竹山義夫委員御逝去

12・11 富士吉田市史編さん室、望月・奥脇尚氏視察来訪

12・14 「民俗・美術工芸史料編」写真原稿整理開始

12・15 高木主査・敷野・芝田、史料調査（竜王町）長谷川博氏宅、

上布那町 米山田氏宅

12・16 山本委員来室（中村英進氏、近・現代ヒヤリング調査）

12・21 敷野・芝田・小池、史料調査（朝日二丁目 中沢昭三氏宅）

12・22 有泉・齊藤康彦両委員来室（行政史料調査）

12・23 市史編さん全体会議（第9回）

12・24 記録を市教育委員会に提出

1・18 上土器遺跡・川田跡出土遺物の発見届・保管証・保管請

12・24 午後4時

会場 古名屋ホテル

協議内容 市史編さん事業の現状と今後の展望について

12・24 敷野・芝田・小池、史料調査（竜王町）長谷川博氏宅、

上布那町 米山田氏宅

12・24 山本委員来室（中村英進氏、近・現代ヒヤリング調査）

12・24 記録を市教育委員会に提出

1・18 上土器遺跡・川田跡出土遺物の発見届・保管証・保管請

12・24 午後4時

会場 古名屋ホテル

協議内容 市史編さん事業の現状と今後の展望について

12・24 敷野・芝田・小池、史料調査（竜王町）長谷川博氏宅、

12・24 上土器遺跡・川田跡出土遺物の発見届・保管証・保管請

12・24 午後4時

会場 古名屋ホテル

協議内容 市史編さん事業の現状と今後の展望について

12・24 敷野・芝田・小池、史料調査（竜王町）長谷川博氏宅、

12・24 上土器遺跡・川田跡出土遺物の発見届・保管証・保管請

12・24 午後4時

2・12

史料調査

（調査員：磯貝委員長、服部・秋山・中沢各委員、

高木主査・敷野・芝田

調査対象：湯村三丁目 渋江一

雄氏宅・宮原町 向山武可氏宅）

2・15

史料調査（調査員：敷野・芝田・飯室

調査先：宮原町

向山武可氏宅・中央五丁目 中村英雄氏宅

2・19

久保寺・小池、国会図書館において史料調査

2・22

24

高木主査・敷野・高松市史編さん業務を視察

2・26

齊藤康彦・鳥袋両委員来室（近・現代史料セレクト作業）

3・2

近・現代専門部会（第33回）

3・2

史料調査（調査員：磯貝委員長、服部・秋山・中沢各委員、

高木主査・敷野・芝田

調査対象：湯村三丁目 渋江一

史料調査

（調査員：磯貝委員長、服部・秋山・中沢各委員、

高木主査・敷野・芝田

調査対象：湯村三丁目 渋江一

3・18	斎藤典男委員・高木正一・敷野・芝田・山梨中央銀行において いて今澤家文書調査	4・11～12	甲府市古文書研究会、向山家文書を整理
3・19	高木主益・久保田、畠岡弁護士と協議（古文書作権について）	4・14	山本・坂本内委員ヒヤリング調査（対象：小林静氏）
3・22	新井潤氏・敷野・芝田、「民俗・美術工芸編」口絵写真撮影（国玉町中込賀治氏宅・善光寺・金枝神社）	4・19	民俗・美術工芸専門部会（第29回）
3・22	新井潤氏・敷野・芝田、「民俗・美術工芸編」口絵写真撮影（国玉町中込賀治氏宅・善光寺・金枝神社）	4・11～12	甲府市古文書研究会、向山家文書を整理
3・24	新井潤氏・敷野・芝田、「民俗・美術工芸編」口絵写真撮影（国玉町中込賀治氏宅・善光寺・金枝神社）	4・14	山本・坂本内委員ヒヤリング調査（対象：小林静氏）
3・25	斎藤康彦・島袋内委員來京（近・現代史料セレクト作業）	4・19	民俗・美術工芸専門部会（第29回）
3・25	山日新聞に市史刊行物の広告掲載	4・28	午後5時～
3・26	山梨新聞に市史刊行物の広告掲載	会 場	市史編さん担当事務室
3・27	新井潤氏・小沢秀之委員・敷野・向町の「百万遍」及び同町慈岩寺の「大般若空」を撮影	協議内容	「民俗・美術工芸編」の装丁及び校正について
3・28	山本委員、史料調査（中央三丁目 山口かよ子氏宅）	5・2	午後5時～
3・29	高木主益、山梨日日新聞社を訪問（山日新聞マイクロフィルムの複製について）	山本委員、ヒヤリング調査（対象：宝一丁目 前島貞造氏）	午後5時～
		伏原・新藤西委員来京（史料調査）	
		「市史編さんだより」第9号納品	
		機員委員長から原市長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに考古・古代・中世並びに近世村方及び近・現代史に係る史（資）料の状況について」答申（62年度分）	
		引き続き、市長から委員長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに近世・近代の市史のすじみち及び現代史に係る史（資）料の状況について」諸問	
		市史編さん委員会議（第17回）	
昭和63年度			
4・4	宮本村役場文書整理	時 間	午前10時～
4・5	近・現代専門部会（第34回）	時 間	午後4時～
	会 場	市史編さん担当事務室	
	協議内容	1 新専門委員・調査協力員の増員について	
	2 新専門委員・調査協力員の増員について	時 間	午前11時～
	会 場	同 右	
	市史編さん今体会議（第10回）		

時 間 午前11時10分

会 場 同 右

協議内容 昭和63年度市史編さん事業計画について

考古・古代・中世（第20回）、近世（第23回）、近・現代

（事務打ち合せ）、民俗・美術工芸（第30回）、刊行（第6回）各専門部会開催

時 間 午後1時

会 場 同 右

協議内容 考古・古代・中世部会

1 史料編第1巻の骨格及び原稿執筆状況と問題点について

2 発掘調査及び史料調査について

近世部会

1 史料編第五巻（村方）の編集日程及び、原稿作成状況について

2 今後の編集作業及び調査計画について

近・現代部会

1 近・現代史料編の骨格及び通史編の構想について

2 凡例・目次について

民俗・美術工芸部会

1 「民俗編」「美術工芸編」の発行と領布について

2 今後の調査計画について

資料調査（伊藤・高木主査、教野・觀光課谷口課長、教育委員会植松主査）

資料調査（北原委員長室（伊藤・高木主査、教野・觀光課谷口課長、教育委員会植松主査）

刊行部会

1 「民俗編」「美術工芸編」の領布価格について

調査協力員会議

1 今後の史（質）料調査計画について

5・6 高木主査・教野・縣立図書館を訪問（マイクロフィルムの複製について図書館長と懇談）

5・13～14 「民俗編」「美術工芸編」出版校正（於：立川市 行政

学会印刷所 出張者：服部・伊藤組孝・植松・小沢秀之・守屋各委員、高木主査・教野・芝田・久保寺）

5・16～17 中府市古文書研究会、向山家文書・米山家文書を整理

5・24 山本委員 県立図書館において史料調査

高木主査・山梨県書店商業組合と市史の水質契約について協議

甲府古店販売促進協議会との間に市史販賣契約締結

6・4 山口新聞に「民俗編」「美術工芸編」発刊の記事掲載

6・6～7 中府市古文書研究会、齊藤神代氏所蔵 旧種田家文書を整理

6・7 山本委員、県立図書館において史料調査

史料調査（調査員：高木主査・教野・芝田 調査先：精琴寺・大乗寺）

6・13 高木主査・教野・觀光課谷口課長・教育委員会植松主査・伊藤・高木主査・教野・觀光課谷口課長・教育委員会植松主査・

民俗・美術工芸専門部会（第31回）

時 間 午後5時30分

会 場 大黒屋

協議内容 「民俗編」「美術工芸編」編集会議

北原・山木両委員来室（史料調査）

6・15 近世専門部会（第24回）

時 間 午後3時

会 場 市史編さん担当事務室

協議内容 1 「近世（村方）史料編」の草写及び解説

2 原稿の進行状況について

3 描寫史料ピックアップ

6・21 県立図書館において、美術工芸資料を調査（調査員：守屋

委員・廣瀬清氏・高木主査・芝田）

6・22 市史研究編集（第11回）

時 間 午後4時

会 場 市史編さん担当事務室

協議内容 「市史研究」第5号 武田氏特典の編集につ

いて

6・23 敷野、甲府土木山口氏と湯村山城跡発掘について打ち合せ

6・25 都留市史編さんより来室（都留市史を寄贈）

6・28 敷野・芝田、史料調査及び歴史（善光寺二丁目志村晴子氏宅・上部郡町米山田宗氏宅・下部郡町角田隆弘氏宅）

7・6 調査協力員会議

時 間 午後4時

会 場 釜やレストラン

協議内容 石造物調査の方法・日程について

新聞インデックス開始

有泉・鳥袋・山木各委員、県立図書館及び市史編さん事務

室において史料調査（新聞インデックス・他）

7・7 昭和63年度業務委託契約締結

考古・古代・中世専門部会議（第21回）

時 間 午後4時

会 場 市史編さん担当事務室

協議内容 1 湯村山城跡発掘調査の実施について

2 史料編執筆状況の確認

7・12 日原安弘氏来室（湯村山城跡発掘調査の参加者確保を依頼）

近・現代専門部会（第35回）

時 間 午後4時

「現代史料編」担当委員打ち合せ

午後5時

近・現代部会

会 場 市史編さん担当事務室

協議内容 「近代史料編」執筆状況について

7・18 田代・萩原内委員、山梨文化財研究所平野・宮沢内氏、高

木主査・敷野、湯村山城跡発掘調査に伴うトレンチ設定場所を検討

7・19 湯村山城跡発掘調査開始式（出席者：田代・萩原内委員、

平野・宮沢内氏、矢釜主幹・高木主査・敷野・調査参加者、他）

7・21 齋藤庫蔵委員来室（史料調査）

清水・白倉・松本各委員、高木主査・久保寺、文学史料のセレクトについて協議

7・28 近・現代部会主催「戦後の市政を語る座談会」開催 時間 午後2時～

会場 自治研修セントラル

8・2 史料調査（調査員：熊原康彦委員・教野・芝田 調査先：

奥野家・松木家・後藤家・鳥田家・小野家・庄瀬家・堀内家）

8・3 史料調査（調査員：齊藤康彦委員・教野・芝田 調査先：

平瀬・竹口向・草鹿沢・上平半・下黒平・猪狩・上寺那各

区有文書、金坂神社文書）

8・5 有泉・齊藤康彦・坂本・島袋各委員・執筆打ち合せ

清水・白倉・松本各委員、文学関係打ち合せ

8・10 坂田香音米空（『近世史料編』原稿元成及び収録史料のピックアップについて）

山口新聞小保記者来室（湯村山城跡発掘調査について取材）

8・11 近・現代専門部会（第36回） 時間 午後5時～

会場 市史編さん担当事務室

協議内容 「近世史料編」掲載史料の検討

8・19 山史研究編集会議（第12回） 時間 午後5時～

会場 市史編さん担当事務室

協議内容 「市史研究」第6号の編集について

8・24 清水・松本・白倉各委員、高木主香・久保守、文学関係打ち合せ

8・26 近世専門部会（第25回）

7・28 時間 午後1時～

会場 市史編さん担当事務室

協議内容 1 策定・解説済史料と追加すべき史料

8・27 2 片方編の仮日次について

村上委員、県立図書館において史料調査

8・27 有泉委員室（史料調査）

高木主査・教野、湯村山城跡発掘現場を視察

史料調査（調査員：有泉・山木両委員、教野

調査先：若松町大沢伊三郎氏宅）

9・12 9・7 市内巡回調査を実施（巡回場所：湯村山城跡・石塚・湯村山城

跡・塙沢寺・荒川信玄堤・二ツ木門・竜頭セキ・国母工業

園地）

9・12 9・7 近・現代専門部会（第37回） 時間 午後5時～

会場 答やレストラン

協議内容 1 分野別「概説」執筆について

2 武井家文書の扱いについて

9・22 坂本・松本・島袋・山本各委員、近代関係打ち合せ

白倉・松本両委員、文学関係打ち合せ

9・27 9・27 近世専門部会（第26回） 時間 午後3時～

会場 市史編さん担当事務室

協議内容 1 原稿元成状況の把握

2 日次案の検討

9・29 考古・古代・中世専門部会（第22回）

	時 間	午後3時	時 間	午後4時
会 場	市史編さん担当事務室		会 場	右
協議内容	1 原稿完成状況の把握	1 「市史編さんだより」第10号発行	11 桜井委員来室(史料編原稿チェック)	11・14 桜井委員来室(史料編原稿チェック)
10・1	2 凡例・目次案の検討	10・4 史料借用(五味家・中沢家・早川家・高田家)	11・17→18 坂本・山本両委員来室(史料編原稿チェック)	11・18 石造物調査打ち合せ会議
10・4	10・6→7 甲府市古文書研究会、小野家文書を筆写	10・8 近・現代専門部会(第38回)	11・21 伊東・新藤・萩原各委員、高木主委・飯室・現代史料編	11・22 近・現代専門部会(第40回)
10・6→7	11・8 時間 午後5時	11・10 時間 午後5時	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
10・8	会 場 市史編さん担当事務室	YBSテレビ、石尾関係史料を取材	11・21 伊東・新藤・萩原各委員、高木主委・飯室・現代史料編	11・22 楽器打ち合せ
11・10	協議内容 1 「近代史料編」凡例・目次案の検討	10・25 「市史研究」第5号配付(9/1発行)	11・21 伊東・新藤・萩原各委員、高木主委・飯室・現代史料編	11・22 楽器打ち合せ
11・10	2 「市史研究」第5号刊行の記事掲載	10・26 読光新聞丸山記者、「市史研究」第5号について取材	11・21 伊東・新藤・萩原各委員、高木主委・飯室・現代史料編	11・22 楽器打ち合せ
11・10	YBSテレビ、石尾関係史料を取材	11・8 小沢秀之委員来室(石造物調査について)	11・21 伊東・新藤・萩原各委員、高木主委・飯室・現代史料編	11・22 楽器打ち合せ
11・10	清水・白倉・松本各委員、文学関係打ち合せ	11・10 時間 午後2時	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
11・10	会 場 笹やレストラン	11・11 「近代史料編」入稿	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
協議内容	昭和63年度後半期の市史編さん事業の推進について	11・12 岡山市より本市編さん業務を観察来訪	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
考古・古代・中世(第23回)、近世(第27回)、近・現代(第39回)各専門部会開催	11・12 時間 午後2時	11・12 「市史研究」第6号発行	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
11・12	会 場 笹やレストラン	11・12 時間 午後2時	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
11・12	協議内容 昭和63年度後半期の市史編さん事業の推進について	11・12 時間 午後2時	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
11・12	考古・古代・中世(第23回)、近世(第27回)、近・現代(第39回)各専門部会開催	11・12 時間 午後2時	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
11・12	12・1 高木主委、市議会事務局と現代史料編収録資料(諸願・陳情・議事録など)について協議	12・1 「市史研究」第6号発行	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ
11・12	12・2 山日新聞、「市史研究」第6号及び「市史の夕べ」について	12・2 萩原委員・敷野・蓮座等境内の「四〇〇年会」記念碑を調査	11・22 楽器打ち合せ	11・22 楽器打ち合せ

## 収材

	会 場	古名屋ホテル
	協議内容	市史編さん事業の進捗状況と今後の課題について
12・3	山日新聞に「市史のタバ」開催の記事掲載	
12・6	市広報ラジオ番組で市史編さん事業を紹介	松本山より本市史編さん業務を視察来訪
	郷土史を学ぶ講演会「市史のタバ」開催	
	時 間 午後5時10分～	会 場 甲府市東部市民センター
	講師及び演題	
	受 講 者 83人	鶴部治則 「甲府の習俗」
		田代 孝 「川田館跡・上土器遺跡の発掘
	調査」報告	樋貝正義 「甲府東部の歴史のあらまし」
		「甲府東部の歴史のあらまし」
12・6～7	甲府市古文書研究会、久保寺家文書を整理	
12・7	福井市立郷土歴史博物館より調査來訪 (山県昌吉関係資料について)	
12・14	倉敷市より本市史編さん業務を視察來訪	
12・19～21	近・現代専門部会 (第41回)	
12・20	近・現代専門部会 (第41回)	
	時 間 午後5時30分～	会 場 市史編さん担当事務室
	協議内容 「現代史料編」未年表の作成及び資料のセレクトについて	
3・23	近世専門部会 (第28回)	
3・23	時 間 午後3時～	会 場 市史編さん担当事務室
	協議内容 「近代史料編」校正ゲラ相互チェック	
3・24	高木主計 東京出版 (史料編集打ち合せ)	
3・28	考古・古代・中世専門部会 (第24回)	
	時 間 午後5時30分～	
	協議内容 「現代史料編」未年表の作成及び資料のセレクトについて	
12・22	市史編さん全体会議 (第11回)	

			時 間 午後3時
会 場	市史編さん担当事務室		
協議内容	「考古・古代・中世史料編」校正グラ相互通エク		
3・29～30	坂本委員、東京出張（史料調査）		
平成元年度			
4・6	石造物調査打ち合せ会議（臨地調査、及び調査方法の検討）		
4・7	高木主査・教野、甲府税務署を訪問（市史編布に伴う一般消費税の取り扱いについて協議）		
4・17	近世専門部会（第29回）		
時 間	午後4時?		
会 場	忙やレストラン		
協議内容	1 「近世通史編」目次（案）の検討 2 「近世通史編」の校正について		
4・20	矢笠玉幹・高木主査・教野・久保寺、東京出張（史料編集・印刷打ち合せ）		
4・21	「マンガ甲府の歴史」編集打ち合せ		
4・24	近・現代専門部会（第44回）		
時 間	午後5時		
会 場	忙やレストラン		
協議内容	1 「近代史料編」の校正進捗状況について 2 「現代史料編」・「近代通史編」編集につ		
5・12	ぎょうせい川木氏・シナリオライター西田氏・マンガ家石倉厚・氏来室（「マンガ甲府の歴史」編集打ち合せ）		
5・15～16	「原始・古代・中世」「近世」「近代」史料編出張校正（於：行政庁会印刷所 参加者：磯貝委員長・田代・坂本・島袋・柴辻・北原・増田・山本各委員、高木主査・教野・久保寺・鎌田・宮澤）		
5・17～18	甲府市古文書研究会（宮本村役場文書を整理）		
5・25	山日新聞に「原始・古代・中世」「近世」「近代」史料編発行の記事掲載		
5・31	「原始・古代・中世」「近世」「近代」史料編収入、編布開始		
6・1	磯貝委員長から原市長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項ならびに近世・近代の市史のすじみち及び現代史による史（實）料の状況について」答申（63年度分）、引き継ぎ市長から委員長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに原始・古代・中世と現代の市史のすじみち及び市内石造物の状況について」請問		
7月	市史編さん委員会議（第19回）		
時 間	午後1時		
会 場	自治研修センター		
市史編さん委員・専門委員・調査協力員委嘱式			
時 間	午後1時30分		
会 場	同 右		
市史編さん全体会議（第12回）			
時 間	午後1時45分		
4・25	新藤・萩原両委員室（市行政文書調査）		
じて			

## 会場 同右

協議内容 平成元年度市史編さん事業計画について

考古・古代・中世（第25回）、近世（第30回）、近・現代

（第45回）、刊行（第7回）各専門部会、調査協力員会議

開催 時間 午後3時～

会場 同右

協議内容 考古・古代・中世部会

1 通史編第一巻（原始・古代・中世）の編集構想について

2 分担について

3 执筆要項の検討

4 近世部会

5 通史編第二巻（近世）の日次設定と執筆

6 执筆要項の検討

7 現代部会

8 現代史料編・近代通史編の編集状況と今

9 刊行部会

10 市史編さんによる委託契約について

11 市史の領布について

12 調査協力員会議

13 市内石造物調査の進行状況について

14 中府書店販売促進協議会と甲府市史領布に伴う売買契約締結

6・7

## 調査(1)

6・13 現代担当委員、市議会事務局図書室所蔵史料及び市行政文書を調査

近・現代専門部会（第46回）

時間 午後5時30分～

会場 ホテルレストラン

協議内容 「現代史料編」掲載史料の検討

有宋委員会室（行政文書調査）

6・15 文学担当委員打ち合せ（清水・白倉・松本・塙野各委員、

高木主立・山田・久保寺）

6・22 石造物調査打ち合せ会（小沢秀之委員、今丸・相原尚協力員、高木主立・山田・官澤）

教野・県庁市町村課を訪問（業務委託契約に伴う消費税の

扱いについて協議）

考古・古代・中世専門部会（第26回）

6・27 時間 午後4時～

会場 ホテルレストラン

協議内容 执筆分担について

1 「原始・古代・中世通史編」日次案の検討と

2 执筆要項の検討

3 近・現代専門部会（第47回）

4 時間 午後5時30分～

会場 ホテルレストラン

5 協議内容 1 「現代史料編」日次案の検討

2 「近代通史編」執筆要項の検討

7・4 近世専門部会（第31回）

			時 間 午後2時	8・7 「まんが甲府の歴史」シナリオ検討会
7・6	協議内容 「近世通史編」旨次及び執筆項目の検討 調査協力員会議	会 場 桜やレストラン		
7・12	協議内容 石造物調査の状況及び今後の調査・整理計画 文学関係者からのヒヤリング調査（調査員：清水・白倉・ 松本・塩野各委員、高木主査・数野・山田・久保寺・宮澤 対象者：望月幸朗・鈴木東峰・杉田巖各氏）	会 場 桜やレストラン	時 間 午後2時～	8・9 文学関係者からのヒヤリング調査（調査員：白倉・松本・ 塩野各委員、高木主査・数野・山田・久保寺 対象者： 一瀬稔・中村鬼十郎・鶴沢八十一年氏）
7・17	協議内容 「近代通史編」の執筆状況について 甲府市古文書研究会と平成元年度業務委託契約締結	会 場 桜やレストラン	時 間 午後5時30分	8・14 小沢秀之委員・金丸協力員・数野・山田・石造物調査（飯 田二丁目乙無家）
7・21	旭川市より、本市史編さん業務を視察來訪 甲府市古文書研究会と平成元年度業務委託契約締結 ぎょうせい石井氏・シナリオライター西田氏来室（「まん が甲府の歴史」の編集について）	会 場 桜やレストラン		8・17 史料調査（調査先：一宮町浅間神社 調査員：森藤典男 委員・高木主査・数野・山甲・宮澤）
7・31	文学関係者からのヒヤリング調査（調査員：白倉委員、高 木主査・久保寺 対象者：中沢信吉委員）	会 場 桜やレストラン		8・22 文学相当委員打ち合せ（清水・白倉・松本・塩野各委員、 高木主査・山田・久保寺）
8・1	文学担当委員打ち合せ（清水・白倉・松本・塩野各委員、高 木主査・久保寺 対象者：中沢信吉委員）	会 場 桜やレストラン	時 間 午後5時	8・23 石造物調査臨地研修（須玉町御殿山寺）
8・27	調査について（	講師及び演題		8・29 市史研究編集会議（第13回）
9・6	郷土史を学ぶ「市史の夕べ」開催 協議内容 「近世通史編」執筆状況について	会 場 北公民館	時 間 午後4時～	9・5 協議内容 「甲府市史研究」第7号の編集について 高木主査・久保寺・文学関係史料調査（下石田・二丁目上野 久雄氏宅）
8・27	金丸・相原西協力員、山田、伊勢崎市へ出張（石造物 調査について）		時 間 午後5時14分～	—147—

11・7	近・現代専門部会（第50回）	時 間 午後5時30分
11・15～17	高木主査・数野、他都市史編さん業務視察（新潟市・他）	協議内容 「現代史料編」掲載史料の検討
11・20	近世専門部会（第33回）	時 間 午後3時～
11・21	「近世通史編」執筆状況について	協議内容 「近世通史編」執筆状況について
11・22	史料調査（調査員：高木主査・数野・宮澤 調査先：門 光院・古八幡神社）	史料調査（調査員：高木主査・数野・宮澤 調査先：門 光院・古八幡神社）
11・27	島袋・坂本・山本各委員主宰（「近代通史編」編集打ち合 せ）	村上委員室（「近代通史編」の執筆について）
11・28	考古・古代・中世専門部会（第27回）	時 間 午後5時30分
12・12	平岡次郎右衛門関係史料調査（調査員：村上委員・高木主 査・数野・山田 調査先：竜王町 玄広寺・大広寺・他）	協議内容 「原始・古代・中世通史編」日次案の検討
12・20	「市史編さんだより」第12号発行	
12・22	市史編さん全体会議（第13回）	

10・13	「市民のくらし—うつりかわ り」	時 間 午後5時30分
10・17	松本 武秀 「江戸時代、甲府の文人たち」	受講者 一二一人
10・18	近・現代専門部会（第49回）	時 間 午後5時～
10・19	会場 徒歩やレストラン	会 場 徒歩やレストラン
10・20	「近代通史編」「現代史料編」の執筆状況につ いて	協議内容 「近代通史編」「現代史料編」の執筆状況について
10・21	「まんが甲府の歴史」納品	
10・22	「市史研究」第7号 一市制100周年特集 発行	
10・23	「まんが甲府の歴史」関連記事が各新聞に掲載される	
10・24	市制百周年記念映画制作の一環として市史編さん業務を担 影	
10・25	自治会を通じて巾内全世帯へ「まんが甲府の歴史」配布開始	
10・26	文学関係者からのヒヤリング調査（調査員：白鳥・塙 野西委員、久保寺 対象者：保坂耕人氏・一瀬登氏・他）	
10・27	調査協力員会議	
10・28	会場 徒歩やレストラン	時 間 午後2時～
11・1	協議内容 「原始・古代・中世通史編」日次案の検討	
11・2	石造物調査カード第二次集約及び今後の調査	
11・3	活動について	

1・9	伊東・新藤・荻原各委員会（「現代史料編」）	古名屋ホテル 会場
協議内容 市史編さん事業の進捗状況と今後の課題について		
1・17	「近代史編」	セレクトについて協議
1・18	史料調査（調査員：小沢秀之委員・高木主査・敷野・山田・宮澤 調査先：猪狩区有文書・他）	「近代史編」 入稿
1・23～24	甲府市古文書研究会、古文書を整理	
2・7	経済関係史料調査（調査員：新藤・荻原・島袋・坂本・山本各委員、高木主査・敷野・杉山 調査先：甲府商工会議所）	「近世史編」執筆状況について
2・27～28	金丸・古屋・中沢各委員、山田、長野県高遠町山張（石造物調査について）	「近世史編」執筆状況について
3・1	現代史料編纂打ち合せ（島袋・新藤・荻原・山本各委員、高木主査・杉山）	「近世史編」執筆状況について
3・12	近・現代専門部会（第51回）	「近世史編」執筆状況について
時 時間 午後1時		
会 場 市史編さん事務室		
協議内容 1 「現代史料編」掲載史料の最終集約		
2 「近代史料編」の校正作業について		
3・15	熊本市より本市史編さん業務視察來訪	
現代史料編纂打ち合せ（伊東・新藤・荻原・島袋・山本・坂本各委員、高木主査・敷野・杉山）		
3・16	松本市より本市史編さん業務視察來訪	

3・17	現代史料編纂打ち合せ（伊東・荻原・島袋・山本・坂本各委員、高木主査・敷野・杉山）	市史編さん事務室 会場
3・20	近世専門部会（第34回）	午後4時～
3・22	考古・古代・中世専門部会（第28回）	午後4時～
時 時間 午後4時～		
会 場 市史編さん事務室		
協議内容 1 「原始・古代・中世通史編」執筆状況について		
平成2年度		
4・1	市長室に専ら市史編さん業務を分掌とする専門土幹（課長職）新設。高木主幹配置される。室内運用により敷野主任以下、市史編さん室へ流动	市史編さん事務室 会場
4・7	「市史編さんだより」第13号納品（3／20付）	午後3時～
4・18	近世専門部会（第35回）	
時 時間 午後3時～		
会 場 市史編さん事務室		
協議内容 「近世通史編」執筆状況について		
4・20	史料調査（調査員：島袋・山本西委員、高木主幹・敷野・山田・杉山 調査先：千家小・球美小・伊勢小・下河原	

5・2	町橋口家 折柳さん委員・調査協力員委嘱式 調査協力員会議	午前11時
5・15	会場 石造物調査（調査員：小沢秀之委員・金丸協力員・植松又次氏・山田 調査先：坂田一丁目乙黒家） 近・現代専門部会（第52回）	午前11時
5・16	会場 市史編さん事務室 協議内容 「近代通史編」の編集状況について	午後5時30分
5・17	会場 刊行専門部会（第8回） 時 間 午後1時30分	午後1時30分
5・25	会場 第4委員会室 協議内容 1 市史の編集状況と問題点 2 市史編布価格の設定について	午後1時30分
6・7	会場 现代史料編纂集打ち合せ（伊東・新藤・萩原・島袋各委員、高木主幹・杉山） 石造物調査打ち合せ会議（小沢秀之委員・古屋・相原・金丸各協力員、高木主幹・山田・宮澤） 清水・松本・塙野各委員、高木主幹・杉山・久保寺）	午後1時30分
6・13	会場 现代史料編纂集打ち合せ（伊東・新藤・萩原・島袋・山本・秋田市より本市史編さん業務を視察來訪）	午後1時30分
6・14	会場 市史編さん全体会議（第14回）	午前11時15分
6・27	会場 西序書I会議室 協議内容 「現代史料編I・現代通史編」の編集計画について	午前11時
7・12	会場 甲府書店販売促進協議会との間に市史売買契約締結者：塙野・松本・山本・坂本・鳥袋各委員、高木主幹・敷野・山田・久保寺・鎌田・宮澤）	午前11時
7・19	会場 近・現代専門部会（第53回） 「現代史料編I」「近代通史編」納品	午前11時
7・20	会場 西序書I会議室 協議内容 「現代史料編II・現代通史編」の編集計画について	午前11時
7・25	会場 職員委員長から原市長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき手項並びに原始・古代・中世と現代の市史のすじみ及び市内石造物の状況について」答申（平成元年度分）、引き続き、市長から委員長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに原始・古代・中世から現代に至る市史のすじみの概要及び市内石造物の状況について」諸問市史編さん委員会議（第20回）	午前10時
8・13	会場 自治研修センター 協議内容 市史編さん全体計画について	午前11時
8・14	会場 市史編さん全体会議（第15回）	午前11時
6・25	会場 西序書I会議室 協議内容 「現代史料編II・現代通史編」の編集計画について	午前11時
6・26	会場 西序書I会議室 加者：伊東・新藤・萩原・島袋・山本・塙野・松本各委員、高木主幹・敷野・山田・久保寺・小池・杉山）	午前11時

会場同右

協議内容 平成2年年度市史編さん事業計画について

考古・古代・中世（第29回）、近世（第36回）、近・現代

（事務打ち合せ）各専門部会、調査協力員会議開催

時間 午後1時15分～

会場同右

協議内容 考古・古代・中世部会

通史編第一巻（原始・古代・中世）執筆原

稿の調整と印刷・校正日程について

近世部会

通史編第二巻（近世）執筆原稿の調整と印

刷・校正日程について

近・現代部会

今後の原稿執筆・編集計画について

調査協力員会議

市内石造物調査の案約について

松山市より本市史編さん業務を視察來訪

金沢市より本市史編さん業務を視察來訪

市史研究編集会議（第14回）

時間 午後1時30分～

会場 市史編さん事務室

協議内容 「市史研究」第8号の編集について

8・15 石造物調査会議（小沢秀之委員・金丸・吉盛・武井・中沢・高藤各協力員、高木正幹・數野・山田・宮澤）

8・29 市史編さん委員会部内所蔵機関合同資料調査及び研修

10・11

会場 西庁舎1F会議室

時間 午後5時～

会場 西庁舎1F会議室

協議内容 「近世通史編」執筆原稿の検討

会

（八千子市郷土資料館、国立公文書館、内閣文庫、明治大

学刑事・考古博物館 28名参加）

9・4～5 甲府市古文書研究会、宮本村役場文書整理

9・7 熊本市より本市史編さん業務を視察來訪

9・17 行政資料調査（新藤・萩原・山本・島袋・坂本各委員）

近・現代専門部会（第54回）

時間 午後5時～

会場 西庁舎1F会議室

協議内容 「現代史料編II」掲載史料の検討

10・3 行政資料調査（萩原・島袋・坂本・山本各委員）

10・5 史料調査（調査先：山宮町飯沼家・福島家・青松院 調査員：坂本委員・高木正幹・数野・杉山）

10・5 甲府商工会議所資料調査（伊東・新藤・萩原・島袋・坂本・山本各委員、高木正幹・数野・杉山）

近・現代専門部会（第55回）

時間 午後5時～

会場 西庁舎1F会議室

協議内容 「現代史料編II」掲載史料のセレクト方法について

10・8 会場 西庁舎1F会議室

時間 午後1時30分～

会場 佐やレストラン

協議内容 「近世通史編」執筆原稿の検討

10・16	石造物調査カードセレクト（小沢秀之委員・金丸協力員・高木主幹・山田）
10・19	考古・古代・中世専門部会（第30回）
	時 間 午後1時30分～
	会 場 西庁舎1F会議室
	協議内容 「原始・古代・中世通史編」原稿執筆状況について
10・20	「市史研究」第8号発行
10・24	高木主幹・数野・他都市業務検察（青森市、他）
10・25	「市史編さんだより」第14号発行
10・26	文学執筆者会議（清水・白倉・塙野各委員・山田・宮澤・深沢）
10・30	近・現代専門部会（第56回）
	時 間 午後5時～
	会 場 西庁舎1F会議室
	協議内容 「現代史料編目」掲載史料のセレクトについて（エボック事項の抽出）
11・1	新嘱託職員採用（二谷京子・塙田昭子・武川リエ・深沢恵子）
11・8	現代史料調査（調査先：ボランティアセンター・他 調査員：新藤・荻原・島袋・坂本・山本各委員）
11・14	「原始・古代・中世通史編」「近世通史編」入稿開始
11・15	石造物調査会議（小沢秀之委員・金丸・吉屋・斎藤各協力員・高木主幹・数野・山田・宮澤・塙田・武川）
	史料調査（調査先：農業センター・他 調査員：島袋委員）
11・20	員・高木主幹・数野・杉山・深沢）
11・21	山本委員・婦人問題関係ヒヤリング調査（秋山二葉氏、小沢秀之委員・金丸・中沢内協力員・山田・石造物調査）
11・27	新藤・荻原・島袋・坂本・山本各委員会議（史料調査）
11・29	第6回「市史の夕べ」開催
	時 間 午後5時10分～
	会 場 総合市民会館
	講師及び演題
	受講者 89人
	・金丸平甫 「甲府の石造物」
	・守屋正彦 「甲府繪画史の概観」
	・伊東壯 「GHQ文書による戦後の甲府」
12・3	現代史料調査（新藤・荻原・島袋・坂本・山本各委員）
12・4	史料調査（調査員：高木主幹・数野・武川・深沢 調査先：古市場今橋家）
12・4～5	甲府市古文書研究会、今橋家文書を整理
12・11	現代史料調査（調査員：新藤・荻原内協力員・高木主幹・数野・塙田・武川 調査先：県境センター）
12・12	年表作業開始
12・12	「原始・古代・中世通史編」初校出
	近・現代専門部会（第57回）
	時 間 午後4時～
	会 場 西庁舎3F小会議室
	協議内容 「現代史料編目」掲載史料のセレクトについて

12・26	市史編さん全体会議（第15回）	本・山木各委員、高藤・清水丙氏、高木主幹・武川・深沢・塚田)
時 間	午後5時30分	久留米市市史編さん室より視察來訪（堤美男主幹）
会 場	古名屋ホテル	現代資料セレクト作業（伊東・新藤・荻原・島袋・坂本・山木各委員、高藤氏、高木主幹・一谷・塚田・武川・深沢・山梨大学八束助教授来室（統計編、編集打ち合せ）
協議内容	「平成2年度市史編さん事業の現況と今後に ついて」	小倉武氏来室（所蔵中世文書を参考、撮影）
1・9	編さん室において、「年表」「索引」読み込み・カード作成 作業（橋本はるみ・小沢恵津子・浅原美津江 以後、週2 ~3日、継続して作業続行）	「編さんだより」第15号納品
1・21	島袋・山木両委員、高木主幹・武川、現代ヒヤリング調査 (京島幸男氏)	高木主幹・宮澤、東京山張（村上・北原委員と通史編第 一巻）編集打ち合せ)
2・13	近・現代専門部会（第58回） 時 間 午後5時	嘱託職員 小池真奈美・塚田恵子・武川リエ・深沢恵子、 退職
会 場	西庁舎1F第2会議室	平成3年度
協議内容	1「史料編第八巻 現代II」掲載史料のセ レクト	4・1 新藤託職員、飯野美香採用 現代資料セレクト作業（伊東・新藤・荻原・島袋・坂本・ 山木各委員、高藤・清水丙氏、高木主幹・一谷）
2・19	史料調査（調査先：酒折宮・石和八幡宮 調査員：高木主 幹・飯野・山田・宮澤）	4・2~3 甲府中古文書研究会、今橋家文書を整理
2・21~22	高木主幹・飯野・山田、県外資料調査（国立公文書館・ 国会図書館にて資料写真撮影）	4・8 「史料編第八巻 現代II」編集打ち合せ（伊東・新藤・荻 原・山木各委員、高木主幹・一谷）
2・25	現代資料セレクト作業（新藤・荻原・坂本・山木各委員）	坂本委員来室（現代資料チェック）
3・4	現代資料セレクト（新藤・荻原・坂本・山木各委員）	小沢秀之委員・金丸協力員来室（甲府の石造物）編集に ついて
3・7~8	甲府市古文書研究会、今橋家文書を整理	現代資料セレクト作業（伊東・新藤・荻原・島袋・山木各 委員、高木主幹・一谷）
3・12~13	現代資料セレクト作業（伊東・新藤・荻原・島袋・坂 本・山木各委員、高藤・清水丙氏、高木主幹・武川・深沢・ 塚田）	4・16 「史料編第八巻 現代II」編集会議（伊東・新藤・荻原・ 島袋・山木各委員、高木主幹・一谷）

島袋・坂本・山木各委員、斎藤・清水丙氏、高木主幹・二谷

5・14

「史料編第八卷 現代II」編集会議（伊東・萩原・島袋・坂本・山木各委員、斎藤・清水丙氏、高木主幹・二谷・小林）

5・16

「通史編第一巻」出版校正（磯貝・服部・田代・清水・秋山・柴辻各委員、高木主幹・斎藤・山田・宮澤・二谷・小林）

5・31

「通史編第一巻」納品

高木主幹・斎藤・山田・武井協力員宅を訪問（町内会関係文書を借用）

6・3

磯貝委員長から山本市長へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに原始・古代から現代に至る市史のすじみの概要及び市内石造物の状況について」答申。引き続き、市長から委員長へ「甲府市史編さんに關して必要となるべき事項並びに現代史に係る史（資）料の状況について」請問

市史編さん委員・新専門委員会議式

時 間 午後1時～

会 場 白治研修センター

市史編さん委員会議（第21回）

時 間 午後1時20分

会 場 同 上

協議内容 平成3年度市史編さん事業計画について

市史編さん全体会議（第16回）

時 間 午後1時45分  
会 場 同 右

協議内容 平成3年度市史編さん事業計画について

考古・古代・中世（第31回）、近世（第38回）、近現代（第59回）、刊行（第10回）、民俗・美術工芸（第16回）

各専門部会開催

時 間 午後3時

会 場 同 右

協議内容 考古・古代・中世部会

1 「通史編第一巻 原始・古代・中世」の編集・刊行について

編集總括

2 「年表・索引」「甲府の歴史」の編集について

近世部会

1 「通史編第一巻 近世」の編集・刊行について

近・現代部会

1 「史料編第八卷 現代II」の収録資料・目次・概説原稿の精査と印刷日程について

2 「通史編第四卷 現代」「甲府市の統計」「武井家文書集」等の編集計画について

刊行部会

1 通史編（第一・二巻）発刊に伴う諸手組格の決定について

2	市史編さん事業の見直しと終了後の対応について	6・27	「通史編第一巻」各部局配布
	調査協力員会議（民俗・美術工芸部会）	6・28	年表作業打ち合せ（橋本・浅原・小沢、高木主幹・敷野（二谷））
1	「甲府の石造物」の編集状況と今後の課題	7・10 / 11	甲府市古文書研究会、末木家文書を整理
2	印刷日程について	7・7 / 22	市史編さん委員会と平成3年度業務委託契約締結
6・4	年表作業（浅原・王・小沢・橋本）、引き継ぎ、随時編さん室に出勤し、事務別抽出・年表カット作成作業に従事	6・28	「現代史料編II」板入稿
6・6	現代行政関係史料取録打ち合せ（伊東・新藤・秋原各委員、高木主幹）	7・24 / 25	高木主幹・山田・金丸協力員、石造物編集打ち合せ
6・10	山口新聞記者、「通史編第一巻」の発行について取材	8・1	高木主幹・敷野、米沢市史編さん室・他を視察
6・11	石造物調査（東光寺・国母地蔵跡・東光寺の大地蔵調査員：高木主幹・敷野・山田・落合・古屋協力員）	8・1	嘱託職員丸茂直子、随時勤務嘱託職員小沢恵津子・浅原美津江・橋本はるみ採用
6・13	白倉・塙野・清水・松本各委員室（高木主幹・山田と文学打ち合せ）	8・6	石造物編集作業（相原・金丸・斎藤各協力員、高木主幹・敷野・山田）
6・18	「現代史料編II」編集会議	8・7	歴史市史編さん室より寺門委員浅川清栄氏視察來訪
	会場 桜やレストラン	8・19 / 20	「武井家文書集」編集打ち合せ
	時間 午後5時	8・21	石造物編集作業（金丸・相原・斎藤各協力員、高木主幹・敷野・山田）
2	「現代史料編II」各章概要原稿のチェック	8・20	「武井家文書集」編集作業
2	「甲府市の統計」の構想について	8・21	石造物編集作業（金丸・相原・斎藤各協力員、高木主幹・敷野・山田）
6・20	伊東・八束委員会議（「現代史料編II」「甲府市の統計」の構案について）	8・26	文学打ち合せ（白倉・清水・塙野各委員、高木主幹・山田・丸茂）
6・25	甲府書店販売促進協議会と市史充賀契約締結	8・27	「現代史料編II」編集打ち合せ
6・26	市長政策ヒヤリング——市史編さん事業について——	8・28 / 29	石造物編集会議（金丸・相原・斎藤各協力員、高木主幹）

幹・敷野・山田)

中沢信吉委員御逝去

9・2 現代史料編叢書史料点検（高木主幹・敷野・二谷）  
9・10 近・現代専門部会（第60回）

10・18 「現代史料編II」校正作業開始  
「市史研究」第9号納品

10・21 近・現代部会（第61回）

時 間 午後2時

時 間 午後5時30分～

会 場 小会議室

会 場 並レヌ3Fホール

協議内容 1 「現代史料編II」人稿前の最終調整  
2 「現代通史編」目次案の検討

協議内容 1 「現代史料編II」校正作業について  
2 「現代通史編」目次案の検討

市史編さん委員会（第22回）  
時 間 午後5時30分～

市史編さん委員会より、第16号納品

会 場 甲府オリンピック

会 場 並レヌ3Fホール  
参加者 1 「現代史料編II」目次案の検討

協議内容 1 「現代史料編II」の入稿について  
2 平成3年度その他刊行物の編集状況について

協議内容 1 「現代史料編II」の再校について  
2 「現代通史編」目次案の検討

9・11 埼玉文化協会加藤勉・小林甲子男両氏来室（文部省関係史料  
調査）  
9・12 石造物編集会議（金丸・相原・古藤各協力員、高木主幹・  
敷野・山田）

11・15 近・現代専門部会（第62回）  
時 間 午後4時30分～

会 場 市史編さん事務室

9・17～19 石造物編集会議（金丸・相原・古藤各協力員、高木主  
幹・敷野・山田）

協議内容 1 「現代史料編II」の再校について  
2 「現代通史編」目次案の検討

9・18 調訪市史編さん室茂川・高見丙氏来室（甲州街道関係史料  
調査）  
9・24 「現代史料編II」入稿  
10・2 市史原書分について、索引抽出作業に着手（一部、外部ア  
ルバイトへ依頼）

11・25 「現代史料編II」卷頭II撮影  
11・29 近・現代専門部会（第63回）  
時 間 午後5時～

会 場 市史編さん事務室

協議内容 1 「現代史料編II」目次案の検討  
2 「現代通史編」目次案の検討

10・3～4 甲府市古文書研究会、「官遊紀勝」を題写  
日付

12・4	高木主幹、浅川教育長と「現代史料編Ⅱ」収録の教育史料について協議	事業について協議	1・16	数野・宮沢、県立図書館において「近世通史編」口絵写真撮影
12・9	平成4年度市史編さん事業予算案提出	会場	1・17	「甲府の歴史」編集打ち合せ
12・10	「現代史料編Ⅱ」出版校正（念校・東京）	協議内容		「甲府の歴史」編集日程・構想について
12・11	磯貝委員長、飯田・白倉委員来室（高木主幹と平成4年度伊東部会長ほか委員6人 東京）	高木主幹・数野・宮沢、武井協力員宅を訪問（武井家文書借用）		
12・24	金丸協力員来室（石造物資料整理）	会場		
12・25	担当事務打ち合せ（全体会議について）	協議内容		
12・25	第17回市史編さん全体会議	高木主幹・数野・宮沢、武井協力員宅を訪問（武井家文書借用）		
12・26	時 間 午後5時30分	会場 古名屋ホテル	1・20	第64回近・現代専門部会
12・26	協議内容 平成3年度市史編さん事業の進捗状況	時 間 午後3時		
12・26	高木主幹・金丸協力員、小沢秀之委員宅を訪問	会場 市史編さん事務室		
1・6	石造物編集打ち合せ（金丸協力員・高木主幹・山田）	協議内容 1 「現代史料編Ⅱ」の概略		
1・9	高木主幹・数野、磯貝委員長及び伊東・八東委員を訪問（「甲府の歴史」編集会議の開催及び統計編の編集状況について・他）	2 「現代史料編Ⅱ」の日次調整と執筆について		
1・13	塙山市史編さん室 企画課 小池係長来室（山日新聞マイクロフィルムの借用について）	担当事務打ち合せ（当面の日程について）		
	塙山市史編さん室 設置のリーダーブリンクを用いて新聞インデックス作業開始	大和郡山市姉妹都市締結式（磯貝委員長・赤藤（典）委員出席（高木主幹・数野・宮沢・丸茂流動）		
	「現代史料編Ⅱ」現用品用72部、見本20部をわたす	半成3年原典微収集・支払い調査を各委員へ送付		
	書店組合に頒布用72部、見本20部をわたす	金丸協力員来室（石造物執筆について）		
1・28	石造物編集打ち合せ（金丸協力員・高木主幹・数野・山田・宮沢）	文学担当委員打ち合せ（白倉・清水・塙野・松本各委員、高木主幹・山田・金）		
1・29	八王子市郷土資料館 田村勝氏来室（安藤広重関係史料調査）			

1・30 武井家文書マイクロ撮影について、契約担当と協議

秋山・田代委員来室（「甲府の歴史」日次案提出）

平成4年度予算内示

2・3 現代史料編目・職員頒布申込締切（七四人より受付）

教野・伊東委員宅を訪問（「甲府の歴史」日次案を受けたる）

長田庄司氏来室（「市史編さんだより」原稿持参）

2・4 「甲府の歴史」編集会議

時 間 午前11時～午後2時30分

会 場 箕やレストラン

協議内容 「甲府の歴史」の執筆について

第65回近・現代専門部会

時 間 午後5時

会 場 事務室

協議内容 1 「現代通史編」日次案の確定と執筆分担について

2 执筆・編集・印刷日程について

2・5 山田・宮沢・東京出張（国公図書館文献資料調査）

2・6 斎藤（典）委員来室（「近世通史編」原稿持参）

2・8 石造物編集打ち合せ（金丸・丹沢協力員・山田）

2・10 丹沢協力員・山田・石造物補足調査

坂本・萩原委員来室

金丸協力員来室（石造物執筆について）

3・2 斎藤（典）委員来室（「近世通史編」校正持参）

3・4 教野・宮沢・県立図書館にて「近世通史編」口絵写真撮影

2・13 新藤・萩原委員来室

2・13 教野・宮沢・県立図書館及び市内各所にて「近世通史編」

2・13 マイクロ撮影

2・16 金丸協力員来室（石造物編集作業）

2・16 丹沢協力員・山田・石造物補足調査

2・18 「市史編さんだより」第17号編集作業開始

2・19 萩原・清水誠委員来室

2・19 担当事務打ち合せ（年度末に向けての事業推進について）

2・20 工業復興セミナー上田・人見氏来室（武井家文書マイクロ撮影、引き伸し打ち合せ）

2・24 斎藤委員来室（県立図書館マイクロ新聞資料読み取り）

2・26 金丸協力員来室（石造物編集について）

2・27 高木主幹・教野・原路市出張（21日まで）

2・28 丹沢協力員来室（石造物補足調査について）

2・29 石造物調査・写真撮影（金丸協力員・高木主幹・教野・山田・調査先：奥因寺・円光院・華光院・清泉寺・道鏡院・摩利支人・善光寺・米徳寺・長勝寺・福泉寺）

3・1 松木委員来室（「近世通史編」校正戻し）

3・2 石造物調査・写真撮影（金丸協力員・高木主幹・教野・山田・調査先：信玄火葬場・深草親音・口吉神社・他）

3・3 金丸協力員来室（石造物調査について）

3・4 斎藤・塙野委員来室

丹沢協力員米室（石造物補足調査について）

3・4～5 甲府市古文書研究会、史料整理

3・5 工業復写センター・田氏米室（武井家文書撮影・引き伸し）

3・10 中間報告（秋田市史編さん室より視察來訪）

3・11 秋田市史編さん室より視察來訪（杉沢文治・田口勝一郎内氏）

3・12 丹沢協力員米室（石造物補足調査について）

3・13 「近世通史編」写真・図版原稿入稿開始

3・14 「近世通史編」写真セレクト作業

3・15 丹沢協力員米室（石造物補足調査写真持參）

3・16 「近世通史編」口述収集

3・17 長田庄司氏米室（「市史編さんだより」校正持參）

3・18 宮沢・丸茂、県外史料調査（松本市）

3・19 諏訪職員玉川奈都配属用

新藤委員米室（行政資料調査）

3・20 「市史編さんだより」第17号再校出し

3・21 萩原委員、県立図書館でリーダープリンタ作業

新藤委員米室（新聞資料）

3・22 萩原委員、市立図書館において史料調査

3・23 斎藤（典）委員米室（「近世通史編」校正持參）

3・24 「工業復写センター・田氏米室（武井家文書マイクロフィルムW.P.引き伸し、及びデュープラスカルト納品）」武井家文書返却）

平成4年度

4・1 「近世通史編」巻頭口絵収集

4・2 斎藤（左）委員米室（「市史75年史、貸与）

4・3～6 磐貝委員長・斎藤（典）委員・敷野、大和郡山市へ出張（姉妹都市締結訪問団）

4・7～8 甲府市古文書研究会、史料整理

4・9 坂本委員、県立図書館において史料調査

4・10 新藤委員米室（史料調査）

4・11 山田、石造物補足調査

4・12 山田、文学館訪問（文学関係者調査）及び石造物補足調査

4・13 山田、石造物補足調査

4・14 山田、文学館訪問（文学関係者調査）及び石造物補足調査

4・15 平成3年度事業計画、年間スケジュール作成

4・16 萩原委員米室

4・17 山田、石造物補足調査（相模地区）

4・18 担当事務打ち合せ（当面の業務について）

4・19 第66回近・現代専門講会

4・20 時 間 午後4時～8時

会 場 専務室

協議内容 「現代通史編」の執筆状況について

4・21 宮沢、県立図書館に飯田委員を訪問（「近世通史編」の校正について）

山田、県立図書館において資料調査（文学関係）

4・25	数野、穂貝委員長宅へ近世今ゲラ持参、委員長監修業務
4・27	「近世通史編」出版校正（飯田・斎藤典男・村上・北原・増田各委員、高木主幹・数野・山田・宮沢・丸茂・金・玉川）
5・1	伊東委員来室（「武井家文書集」解説原稿提出・他）
5・8	高木主幹・数野・山田・宮沢、斎藤（典）委員（実父）弔問
5・6	萩原委員来室（史料調査）
5・8	飯田委員来室（「近世通史編」校正について）
5・8	飯田委員来室（「近世通史編」校正）
5・6	編さん委員・調査協力員委嘱式
5・11	時 間 午前10時～
5・11	会 場 市長室
5・11	調査協力員会議
5・11	時 間 午前11時～午後12時
5・11	会 場 飯やレストラン
5・11	協議内容 「甲府の石造物」の編集状況と今後の日程について
5・11	高木主幹・数野・宮沢、手塚委員宅を訪問（「近世通史編」校正チェック）
5・12	伊東委員来室（「現代通史編」用統計資料調査）
5・12	坂本委員来室（「現代通史編」一部原稿提出）
5・12	木本福社部長来室（野口小蘋給稿資料寄附）
5・13	甲府市古文書研究会、史料整理
5・14	「近世通史編」パンフレット原稿作成

5・15	坂本委員、編さん事務局及び県立図書館・文学館において史料調査
5・15	（株）ぎょうせい 大西北関東支社長来室（市史刊行物印頃日程について）
5・18	清水威委員来室（教育史料調査）
5・18	斎藤（左）委員、「現代通史編」一部原稿提出
5・19	高木主幹、数野、武井家文書集作業（写真原稿レイアウト、表題）開始
5・19	坂本委員、市史編さん事務室及び県立文学館において史料調査
5・19	新藤委員、市史編さん事務室において史料調査
5・21	有泉前委員来室
5・21	高木主幹・数野、武井家文書集作業担当事務打ち合せ（当面の日程について）
5・25	山本市长、編さん事務室を視察
5・25	年表組見本検討（高木主幹・数野・山田・宮沢・浅原・小沢）
5・26	高木主幹・数野・宮沢、手塚委員宅を訪問（「近世通史編」校正チェック）
5・26	伊東委員来室（「現代通史編」一部原稿提出）
5・26	着手委員、「甲府の歴史」原稿提出
5・26	塩野委員来室
5・28	山田、県立図書館において文学資料調査
5・28	第67回近・現代専門部会
5・28	時 間 午後5時～
5・28	会 場 飯やレストラン
5・28	協議内容 「現代通史編」の編集について

① 秋葉原稿の提出（状況）と今後の見通し  
② 各執筆名間で調整すべき問題点

③ 編集、リライト、印刷日程

6・29 「近世通史編」 諸品  
6・1 文学ヒヤリング調査（一瀬稔氏・白倉委員・高木主幹・宮澤）

時 間 午後3時～5時30分

会 場 桜やレストラン

八王子市郷土資料館より  
上井・田村内氏来室

6・3 市議員から山本市长へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに現代史に係る史（資料）の状況について」答申。  
5・5 市議員長から山本市长へ「甲府市史編さんに関する必要となるべき事項並びに本市発展の年次的なうつりとその概要について」請問。

市史編さん委員会議（第23回）  
時 間 午前10時30分～11時  
会 場 自治研修センター

協議内容 市史編さん事業の現状と今後について  
市史編さん全体会議（第18回）  
時 間 午前11時～12時

会 場 同 上  
協議内容 平成4年度市史編さん事業計画について  
考古・古代・中世・近世・民俗・美術工芸・近・現代・刊行、各専門部会、及び調査協力会議開催

時 間 午後1時～  
会 場 同 右

協議内容 考古・古代・中世部会

近世部会 合同会議

民俗・美術工芸部会

1 既刊市史の点検、総括（正誤表の作成）

近・現代部会

1 「町内会関係史料」の入稿について

2 「現代通史編」執筆原稿の調整について

3 「甲府市の統計」の編集について

刊行部会

1 市史編さん事業の見通しと終了後の対応について

調査協力員会議

1 「甲府の石造物」の編集状況と印刷・校正工程

6・10 市史編さん委員会、甲府市古文書研究会と平成4年度業務委託契約締結

6・11 工業復元センター上田氏来室（「町内会関係史料」マスター・フィルム納品）

6・12 書店組合と市史販売契約締結

6・15 「町内会関係史料」 日報編集作業開始  
山日新聞鈴木記者、「近世通史編」の発行について取材  
清水篤子議員、市議会本会議において市史編さん資料の活用について質問

6・27	内沢協力員・山田、石造物補足調査（能満寺ほか9カ所）	9・7	「甲府の石造物」編集作業開始（以後、11月13日までに39回の編集作業を行う）
7・3	担当事務打ち合せ（「現代通史編」編集会議の開催について、他）	9・22	高木主幹・教野、磯貝委員長・手塚委員宅を訪問（委員長事務打ち合せ、及び手塚委員へ近世年表カード作成依頼）
	市史編さん室所蔵史料点検作業		深草總吉石造物調査（丹沢・武井・吉澤協力員、高木主幹・
7・7	「現代通史編」編集会議	10・6	深草總吉石造物調査（丹沢・武井・吉澤協力員、高木主幹・
7・13	時 間 午前9時～午後5時	10・7	石造物調査（調査先：芥郷・平瀬地区、高木主幹・教野・
	会 場 ホテル和幸		教野・山田）
7・13	市史編さん事業終了後の対応について田中連長・高木主幹・		山田）
	石原秘書主幹・内藤広報主幹、部内協議		石造物調査（調査先：芥郷・平瀬地区、高木主幹・教野・
7・14	山田・県立図書館において文学史料調査	10・21	教野、伊東・八東委員を訪問（「甲府市の統計」初校わたらし）
7・21	「町内会関係史料」写真編集作業開始	11・3	山田・石原徹氏の協力を得て石造物補足調査（14カ所）
8・6	高崎市史編さん室より本市編さん業務を視察来訪	11・6	高木主幹・東京出張（印刷口程協議・他）
8・7	上葉復写センター上田氏米室（「町内会関係史料」CH焼付5冊を納品）	11・16	八東委員来室（「甲府市の統計」編集・校正打ち合せ）
8・10	山日新聞文化部畠月記者、市史編さん事業について取材	11・17	山田・石原徹氏の協力を得て石造物補足調査（13カ所）
8・24	「町内会関係史料」巻頭口絵撮影	11・18	石造物撮影（高木主幹・教野撮影失・川暮町・脚気石神社・淨興寺）
8・31	嘱託職員 金玉順退職	11・20	高木主幹・教野・東京出張（印刷打ち合せ・他）
9・1	嘱託職員 小宮山栄子採用	11・24	「職時中町内会関係史料」三〇〇冊納品
9・2	第68回近・現代部会	11・25	山日新聞鎌本記者、「町内会関係史料」について取材
	時 間 午後4時～8時		第69回近・現代専門部会
	会 場 ホテル和やレストラン		
	協議内容 1 「現代通史編」の校正について		
2	「甲府市の統計」組見本の検討	1	市史編第四卷現代編集状況について
3	「町内会関係史料」組見本の検討	2	甲府市史年表のリライトについて
9・3	武井静次郎氏来室（「町内会関係史料」の編集について）	3	その他

9・7	「甲府の石造物」編集作業開始（以後、11月13日までに39回の編集作業を行う）
9・22	高木主幹・教野、磯貝委員長・手塚委員宅を訪問（委員長事務打ち合せ、及び手塚委員へ近世年表カード作成依頼）
10・6	深草總吉石造物調査（丹沢・武井・吉澤協力員、高木主幹・
10・7	深草總吉石造物調査（丹沢・武井・吉澤協力員、高木主幹・
10・7	石造物調査（調査先：芥郷・平瀬地区、高木主幹・教野・
10・7	教野・山田）
10・21	山田）
11・3	石造物調査（調査先：芥郷・平瀬地区、高木主幹・教野・
11・6	教野、伊東・八東委員を訪問（「甲府市の統計」初校わたらし）
11・16	山田・石原徹氏の協力を得て石造物補足調査（14カ所）
11・17	高木主幹・東京出張（印刷口程協議・他）
11・18	八東委員来室（「甲府市の統計」編集・校正打ち合せ）
11・20	山田・石原徹氏の協力を得て石造物補足調査（13カ所）
11・24	石造物撮影（高木主幹・教野撮影失・川暮町・脚気石神社・淨興寺）
11・25	高木主幹・教野・東京出張（印刷打ち合せ・他）
	「職時中町内会関係史料」三〇〇冊納品
	山日新聞鎌本記者、「町内会関係史料」について取材
	第69回近・現代専門部会
	会 場 吉名屋ホテル
	協議事項 1 通史編第四卷現代編集状況について
	2 甲府市史年表のリライトについて
	3 その他

12・18	調査協力員・石造物編集会議 時 間 午後1時30分～4時	「甲府の歴史」写真セレクト
12・22	座談会「市史編さん事業を終え（るにあたつ）て」 会 場 本庁3F会議室 協議内容 「甲府の石造物」の校正及び、現地確認作業 について	1・19～20 中府市古文書研究会、史料整理 会 場 本庁3F会議室 協議内容 「甲府の石造物」の校正及び、現地確認作業 について
12・25	山本市長、職員委員長、服部・飯田・村上・島袋委員、事務局高木主幹 時 間 午後6時 会 場 ホテルランチやレストラン 担当事務打ち合せ（全体会議の進行について）	1・20 熊本市史編さん委員会・市史調査課 手塚委員長（年表校正打ち合せ）を訪問 2・3 高木主幹・敷野・浅原、元糸屋町中村家（史料調査）及び 2・4 八東委員長（甲府市の統計）再校もどし 2・5・8 「現代通史編」写真セレクト作業 2・10 市史研究入稿開始
13・1	第18回市史編さん全体会議 時 間 午後5時30分～	2・12 金丸・相原・中橋・丹沢協力員来室（「甲府の石造物」校正）
13・4	協議内容 市史編さん事業の現状と今後について	2・15 「甲府の石造物」巻頭口絵写真撮影（市内一円）
13・6	仕事始め式 中川・古屋・落合協力員来室（「甲府の石造物」校正戻し） 「甲府の歴史」写真セレクト作業	2・16 高木主幹・敷野、職員委員長宅を訪問（「甲府の歴史」、「甲府の石造物」監修依頼、他）
13・8	敷野・石造物調査（帶那山・善光寺・猪狩町） 石原氏・山田・石造物補足調査 「甲府の石造物」校正（金丸協力員・高木主幹・敷野・山田・宮沢）	2・17 「甲府の石造物」巻頭口絵レイアウト 2・19 山田・石原氏、石造物補足調査（市内一円） 2・24 高木主幹・敷野・山田、職員委員長宅を訪問（石造物校正受け取り、及び「現代通史編」「甲府の石造物」監修依頼） 7人
13・11	事務局高木主幹ほか7人	3・1～2 「甲府の石造物」出張校正（調査協力員7人、事務局 3・3～4 「現代通史編」出張校正（伊東議長ほか委員8人、
13・14	塩山市史 小菅信子氏来室（GHQ史料コピーを貸与）	3・5～ 完成式典、企画・準備
13・19	数野、職員委員長宅を訪問（「甲府の歴史」序章原稿受け取り）	3・15～ 「別編Ⅳ 年表・索引」校正

△以下予定△

3・22 「甲府市の統計」納品  
「別編Ⅲ 甲府の歴史」納品

3・23 「通史編第四巻 現代」納品  
調査報告書4 「甲府の石造物」納品

3・25 午後3時△  
市史編さん委員会（会場 古名屋ホテル）

午後4時～5時  
甲府市史完成記念式典（会場 同上）

午後5時△  
甲府市史完成祝賀会（会場 同上）



甲府市史編さん準備委員会開式（昭和57年8月26日）



準備委員会  
第1回編集部会  
(昭和57年10月7日)



市史編さん担当、  
西庁舎へ移転  
(昭和58年5月2日)



市史編さん委員会開式  
(昭和58年6月1日)



民俗聞き取り調査  
(昭和58年9月24~25日)



古屋喜男家文書調査  
(昭和58年9月27日)



各部会合同調査(円光院 昭和59年6月28日)



宮本地区総合史料調査  
(昭和59年7月24~25日)



甲府市古文書研究会、金櫻神社文書調査  
(昭和59年9月12~13日)



第1回市史の夕べ  
(於北公民館 昭和59年11月6日)



軍政部関係史料調査  
(於国会図書館 昭和60年4月3～4日)



柳沢文庫(奈良県)所蔵史料調査  
(昭和60年2月25～26日)



松木紀久家文書調査  
(昭和60年6月25日)



調査協力員事務打ち合せ会議  
(昭和60年6月7日)



一の森経塚遺跡発掘調査  
(昭和60年12月)



戦後の甲府市政に係る座談会  
(昭和60年11月28日)



市史編さん委員会、  
原市長へ答申  
(昭和60年4月10日)



座談会「女性からみた  
教前の町と暮らし」  
(昭和61年7月18日)



市史編さん室月間行事  
予定表  
(昭和62年2月)



山城地区方言調査  
(昭和62年3月28日)



座談会「甲府における藤  
糸業のあゆみ」  
(於自治研修センター  
昭和62年7月28日)



岡谷蚕糸博物館所蔵  
史料調査  
(昭和62年9月2～3日)



市史編さん委員会議  
(昭和62年10月28日)



上土器遺跡発掘調査  
(昭和62年11月)



川田館跡発掘調査  
(昭和62年10月)



向山武司家文書調査  
(昭和63年2月12日)



戦後の市政を語る座談会  
(於自治研修センター  
昭和63年7月28日)



湯村山城跡発掘調査  
(昭和63年7月)



市内巡見  
(於湯村山城跡発掘現場  
昭和63年9月7日)



文学ヒヤリング調査  
(平成元年8月9日)



石造物調査臨地研修  
(於須玉町海岸寺)  
平成元年8月23日



第5回市史の夕べ  
(於北公民館)  
平成元年9月6日



商工会議所史料調査  
(平成2年2月7日)



市史編さん室仕事始め  
(平成2年1月4日)



全体会議で磯貝委員長より山本市長へ答申  
(平成3年6月3日)



山本市長より市史編さん委員委嘱(更新)  
(平成3年6月3日)



同右(質疑風景)



第7回市史の夕べ  
(於総合市民会館 平成3年11月11日)



「近世通史編」出張校正  
(於立川市 平成4年4月27~28日)



編さん室を激励する山本市長  
(平成4年5月22日)

石造物調査  
雪道を踏みしめ、深草へ向かう調査員  
(平成4年2月27日)

石造物調査  
(深草参道 平成4年10月6日)

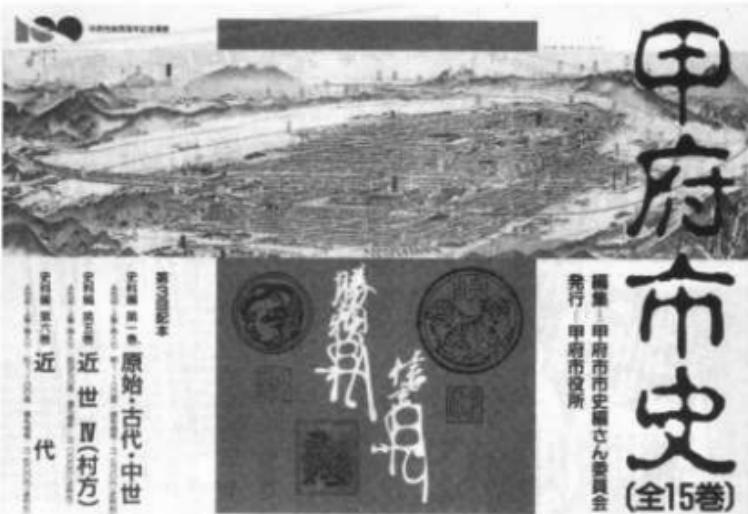




各種調査カード等、帳票類



市史申込パンフレット・チラシ



市史宣伝ポスター



書店用等、市史宣伝ポスター

山日 12月 14日

## よみかえる大木家文書 甲府市史編さんに生かす

山日 12月 13日

**6部会で市史つくら  
編さん委員15人を公募**

町の資料、掘り起し  
古文書、日記など広範囲で  
行なう

甲州令の変遷などを記載

山日 12月 14日

**数百点の資料集める  
市史編さん委員会  
円光院と一應寺を調査**

山日 12月 14日

**800年前の写経発見**

山日 12月 14日

**市内の古墳は55基  
北部山付き地帯に集まる**

山日 12月 14日

**新たに13基確認  
郷土史を学ぶ  
市史のタペ**

山日 12月 14日

**全10巻そろった一級品**

# 21世紀を目指し

10周年記念市史編

## 原始からのお通史

13巻に民衆の足跡



昭和13年1月 1月号

## 資料館建設を念願



昭和13年1月 1月号

## 資料提供呼び掛け

昭和13年1月 1月号

昭和13年1月 1月号

年	月	日	事
昭和13年	1月	1日	新元号「昭和」の施行
同	1月	2日	天皇御誕生日
同	1月	3日	天皇御即位式
同	1月	4日	天皇御即位祝賀式
同	1月	5日	天皇御即位祝賀式
同	1月	6日	天皇御即位祝賀式
同	1月	7日	天皇御即位祝賀式
同	1月	8日	天皇御即位祝賀式
同	1月	9日	天皇御即位祝賀式
同	1月	10日	天皇御即位祝賀式
同	1月	11日	天皇御即位祝賀式
同	1月	12日	天皇御即位祝賀式
同	1月	13日	天皇御即位祝賀式
同	1月	14日	天皇御即位祝賀式
同	1月	15日	天皇御即位祝賀式
同	1月	16日	天皇御即位祝賀式
同	1月	17日	天皇御即位祝賀式
同	1月	18日	天皇御即位祝賀式
同	1月	19日	天皇御即位祝賀式
同	1月	20日	天皇御即位祝賀式
同	1月	21日	天皇御即位祝賀式
同	1月	22日	天皇御即位祝賀式
同	1月	23日	天皇御即位祝賀式
同	1月	24日	天皇御即位祝賀式
同	1月	25日	天皇御即位祝賀式
同	1月	26日	天皇御即位祝賀式
同	1月	27日	天皇御即位祝賀式
同	1月	28日	天皇御即位祝賀式
同	1月	29日	天皇御即位祝賀式
同	1月	30日	天皇御即位祝賀式
同	1月	31日	天皇御即位祝賀式

年	月	日	事
昭和13年	1月	1日	新元号「昭和」の施行
同	1月	2日	天皇御誕生日
同	1月	3日	天皇御即位式
同	1月	4日	天皇御即位祝賀式
同	1月	5日	天皇御即位祝賀式
同	1月	6日	天皇御即位祝賀式
同	1月	7日	天皇御即位祝賀式
同	1月	8日	天皇御即位祝賀式
同	1月	9日	天皇御即位祝賀式
同	1月	10日	天皇御即位祝賀式
同	1月	11日	天皇御即位祝賀式
同	1月	12日	天皇御即位祝賀式
同	1月	13日	天皇御即位祝賀式
同	1月	14日	天皇御即位祝賀式
同	1月	15日	天皇御即位祝賀式
同	1月	16日	天皇御即位祝賀式
同	1月	17日	天皇御即位祝賀式
同	1月	18日	天皇御即位祝賀式
同	1月	19日	天皇御即位祝賀式
同	1月	20日	天皇御即位祝賀式
同	1月	21日	天皇御即位祝賀式
同	1月	22日	天皇御即位祝賀式
同	1月	23日	天皇御即位祝賀式
同	1月	24日	天皇御即位祝賀式
同	1月	25日	天皇御即位祝賀式
同	1月	26日	天皇御即位祝賀式
同	1月	27日	天皇御即位祝賀式
同	1月	28日	天皇御即位祝賀式
同	1月	29日	天皇御即位祝賀式
同	1月	30日	天皇御即位祝賀式
同	1月	31日	天皇御即位祝賀式

## あなたの歴史は?

自分史  
月報  
連動簿  
地図  
経営  
日記  
資料  
メモ



ラン  
渋谷  
六本木  
市ヶ谷  
北野町  
高井戸  
新宿  
二子玉川  
お城  
10号  
新宿  
タツコ  
ビーナス  
新宿・淀橋  
中野坂  
サッパ  
カフジ  
西中野  
ミルクホール  
手仕事  
お名前  
十文字  
八王子  
立川

さとうち五色園さんより「民のくらし」の記録を gammています。

興味・質問をお寄せください。 千葉県印西市西原1385番地 0471-611111 営業課

印西市 広報担当  
00620310308 郵便局

山田 夕美 11.10

## 若尾財閥の資料提供

会計元帳、手帳など約120点



### 近代経済史を解明へ 資料で古文書

今、古文書で書かれた「民のくらし」の記録が、いつまでも残され、伝承されるべきものだ。  
その記録をもとに、江戸時代後期に起きた大物頭の若尾氏の財政活動などを再現する資料として、  
今、古文書で書かれた「民のくらし」の記録が、いつまでも残され、伝承されるべきものだ。  
その記録をもとに、江戸時代後期に起きた大物頭の若尾氏の財政活動などを再現する資料として、  
今、古文書で書かれた「民のくらし」の記録が、いつまでも残され、伝承されるべきものだ。  
その記録をもとに、江戸時代後期に起きた大物頭の若尾氏の財政活動などを再現する資料として、  
今、古文書で書かれた「民のくらし」の記録が、いつまでも残され、伝承されるべきものだ。

### 江戸期の水晶産業も 华北地方も 北部など重点調査

近畿・東北地方の水銀産業	华北地方の水銀産業	北部などの重点調査
近畿・東北地方の水銀産業	华北地方の水銀産業	北部などの重点調査

## 「甲府市史研究」を創刊

毎年一回発行 編さんの中間報生田掲載

557.11.23  
日付未定  
題名未定  
著者未定  
出版社未定  
版数未定  
巻数未定  
頁数未定  
字数未定  
表紙未定  
本文未定

## 平成年度から市史研究

編さんの中間報生田掲載

517.11.30



会場中の歴史研究文庫を整理する武井静江さんら(左)、元町の歴史資料の武井さん(右)

## 戦時下の生活刻明に

### 甲府で回観板見つかる

甲府市立歴史博物館は、11月11日、昭和15年(1940)1月に作成された回観板(木製の看板)を収蔵した。この回観板は、甲府市立歴史博物館の開館準備の一環として、市立図書館で保管されていたが、甲府市立図書館が移転したことにより、甲府市立歴史博物館へ返却された。この回観板は、甲府市立図書館の開館準備の一環として、甲府市立図書館で保管されていたが、甲府市立図書館が移転したことにより、甲府市立歴史博物館へ返却された。

この回観板は、甲府市立図書館の開館準備の一環として、甲府市立図書館で保管されていたが、甲府市立図書館が移転したことにより、甲府市立歴史博物館へ返却された。

この回観板は、甲府市立図書館の開館準備の一環として、甲府市立図書館で保管されていたが、甲府市立図書館が移転したことにより、甲府市立歴史博物館へ返却された。

甲府・勝善寺

## 如来像に南北朝期の銘文

夢窓派とも関係か

文中に絶海中津の名



山野新鏡  
文中に絶海中津の名  
ナゾの生涯がわかる  
市史編さんで新資料

南北朝の銘文  
文中に絶海中津の名  
ナゾの生涯がわかる  
市史編さんで新資料

南北朝の銘文  
文中に絶海中津の名  
ナゾの生涯がわかる  
市史編さんで新資料

「甲府市史研究」第2号が発刊  
代官所の変遷について

## 陶製の経筒容器が出土 白山信仰と関連か



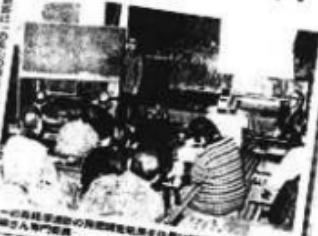
信虎前解明に手掛けられ

南北朝の銘文  
文中に絶海中津の名  
ナゾの生涯がわかる  
市史編さんで新資料

南北朝の銘文  
文中に絶海中津の名  
ナゾの生涯がわかる  
市史編さんで新資料

日 月 二 月 18年 3月 18

## 一の森遺跡で説明会 住民が活発に質問



一一



### 県内初の経塚群 一の森遺跡(伊賀市)

この遺跡が発見されたのは、昭和56年1月のこと。伊賀市下原町の農地で、土砂を運ぶために耕作用の機械が走った際、耕作用の機械が止まらなくなってしまった。そこで、機械の故障原因を調査するため、機械の運転手が土砂を運ぶために耕作用の機械を運んでいたところ、耕作用の機械が止まらなくなってしまった。そこで、機械の故障原因を調査するため、機械の運転手が土砂を運ぶために耕作用の機械を運んでいたところ、耕作用の機械が止まらなくなってしまった。

この遺跡が発見されたのは、昭和56年1月のこと。伊賀市下原町の農地で、土砂を運ぶために耕作用の機械が走った際、耕作用の機械が止まらなくなってしまった。そこで、機械の故障原因を調査するため、機械の運転手が土砂を運ぶために耕作用の機械を運んでいたところ、耕作用の機械が止まらなくなってしまった。

## 第一号 史研究市 を発刊

水準の高い論文ばかり

# 「甲斐武田氏文書目録」

市史編さん委が発行

## 全国の史料を集成

3252点を年代別に



### 占領下の地方自治実態解説へ



昭和11年(1936年)4月号

### 史料の調査乗り出す

調査報告書	調査報告書	調査報告書
調査報告書	調査報告書	調査報告書

調査報告書	調査報告書	調査報告書
調査報告書	調査報告書	調査報告書

調査報告書	調査報告書	調査報告書
調査報告書	調査報告書	調査報告書

### 郷土の歴史ひとでめぐらす

甲斐市史編さんだより毎日号

4000部白刷、無料で配布

調査報告書	調査報告書	調査報告書
調査報告書	調査報告書	調査報告書

明治期の政情に光  
甲斐市史研究会3分を発刊

昭和11年4月6日

### 甲斐市史研究会

調査報告書	調査報告書	調査報告書
調査報告書	調査報告書	調査報告書

### 山梨新報 第25号 発さん刊行計画

4月1日

年月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
令和元年	書籍					
令和元年一月	書籍	小冊子				
二月	書籍	小冊子				
三月	書籍	小冊子				
四月	書籍	小冊子				
五月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
六月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
七月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
八月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
九月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
十月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
十一月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子
十二月	書籍	小冊子	書籍	小冊子	書籍	小冊子



## 甲府市歴史編纂

第一回書籍近世町方(令和元年)

四月上旬配本  
予約受付中

### 1000部上回る申し込み 貴重な史料満載がうける

市立図書館  
4月1日  
史料編近世町方刊行

城下町の記録 451点収める



### 山梨新報

好評の甲府市史史料編近世町方全三巻

販売につけて  
市立図書館にて  
販売につけて

## 土塁の遺構を発見

川田館跡との見方も

2021.1.1

古文書さん



\* 広報担当から来たふと日々

甲府市は、市内を走る「今昔道」  
と「古文書さん」が連携して  
「古文書さん」と「今昔道」

市内各地で、歴史的風景を覗  
込ん。古文書研究では、さわ  
てあらためてこれまで、まだな  
く注目されなかったところもあり、新  
事がかかるやうだ。



ついでに、古文書さんで  
見つけたもので、甲府市内に残る古文書  
の現状をまとめた「古文書さんと今昔道  
連携事業実施報告書」を発行した。

## 通史めざし工夫も

甲府市は全14巻を計画

甲府市は、市内各地で、歴史的風景を覗  
込ん。古文書研究では、さわ  
てあらためてこれまで、まだな  
く注目されなかったところもあり、新  
事がかかるやうだ。

ついでに、古文書さんで  
見つけたもので、甲府市内に残る古文書  
の現状をまとめた「古文書さんと今昔道  
連携事業実施報告書」を発行した。



## 国分寺建立に関する 遺跡発掘の解明へ着手

施設建設の解明へ着手

甲府市は、



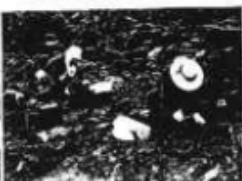
甲府市は、市内各地で、歴史的風景を覗  
込ん。古文書研究では、さわ  
てあらためてこれまで、まだな  
く注目されなかったところもあり、新  
事がかかるやうだ。

## 甲府市史 刊行物のご案内



山日 岐阜市史 (昭和2年) 第112号 2月号

### 土塁が樹形に屈曲



### 築城の解明に端緒

入戸口は高度な防護構造

山日 岐阜市史 (昭和2年) 第113号 3月号

### 信玄の活躍を中心

甲府市史の第3回配本始まる



山日 43

金鋳造に関する文献合め

貴重な資料多數を発掘

山日 43

山日 43

### 石造物の記録製作へ

戸籍簿づくりに着手



地図や道標 分布状況を調査

山日 43

山日 43

山日 43

1959年(平成元年) 10月17日 大曜日 山陽



## まちかど 山陽 市立 歴史 博物館

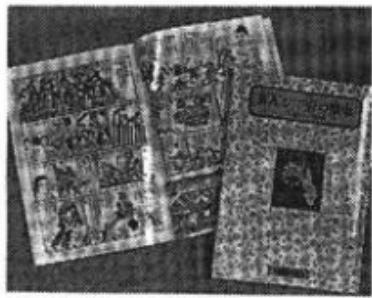
### 古代から歩み紹介

#### 金世帯に無料配布

10月17日(土)、18日(日)、20日(火)の3日間、金世帯に「古代から歩み紹介」の冊子を無料配布します。この冊子は、古墳時代から平安時代までの歴史を歩く旅を紹介するものです。



平成元年10月20日朝日新聞全国版



同市では金十五巻の市史も編集しているが、「小、中学生たちに読まれるもの」と、企画した。「公的機関が発行するものだから」との理由で、まんがどうより廻面譲。目の肥えた子供たちの興味を引くかどりか。

市制四十周年を迎えた甲府市が、記念事業の一環として「まんが甲府の歴史」(約三頁)と「金世帯に無料配布」、「廻面譲」(約三頁)を連載しました。現在開催中の「まんが博物館」で、農夫「甲助」とその孫たちの目を通して、約五百年前の歴史が描かれています。



10月29日

年 10月29日 日曜日 山日

# 火曜サンド

甲府市史研究



## 7人の労作を掲載

「甲府市史研究」第8号(1990年5月)は、7人の労作を掲載する。この号では、甲府の歴史をめぐる「甲府の歴史」、「甲府の文化」、「甲府の地理」、「甲府の経済」、「甲府の社会」、「甲府の政治」、「甲府の教育」の7つの分野から、各1篇の論文が掲載されている。

## 甲府市史研究 第8号

著者名

1990年(平成2年) 5月13日 日曜日

市史研究  
未開拓資料も紹介

街づくりの歩み足づく  
未開拓資料も紹介

# 空白の戦後復興史に光

GHQ活動資料を解明

市史通史編1号が完成  
「戊辰～終戦」を紹介



今後の課題となる資料を話し合う市史研究会員たち

教育民主化を最重要

1990年(平成2年) 5月13日 日曜日

甲府市史研究会

甲府

## 通史編・近世を発刊

一市史編さん室一

身近な庶民生活紹介



新たに作成された「通史編第二編」

「鏡後の暮らし克明に

市民が2335点を保管



金属回収や配給の通知も

### 戦時町内会史料を発刊

甲府市史  
編さん室

（本文）甲府市は、戦時中の「戦時町内会史料」を発刊した。この史料は、甲府市立図書館蔵の「甲府市立図書館蔵書目録」に記載されている。この史料は、甲府市立図書館蔵の「甲府市立図書館蔵書目録」に記載されている。

## 「甲府市史」来月完成



近く完成がそろう甲府市史

九十年の歳月かけ編さん  
全16冊一萬枚超える

## ちまねし

（本文）

（本文）

（本文）

## あとがき

△甲府市史編さん事業は昭和五十七年の一年間を準備の期間に充て、翌五十八年から実質的に着手し、以後は計画に沿った進展をみせ、間もなく終止符を打とうとしている。

△今号は、本事業の總集編と位置づけ、どのようなプロセスを経て市史編さんをするてきたかを一跡できる内容とした。これは中心となった市史編さん委員会が自らの足跡を印しておこうとする願いもさることながら、今後、斯様な事業を手がけられるであろう他の自治体誌のご批判・ご参考の対象になればと、そんな思惑もある。事細かな「事業日誌」を掲載するにはためらいもあつたが、委員各位の趣旨に従い、載せることとした。

本号はこの二月末日を以て閉じ、史資料は、福井県とともにへ移管し、市立図書館へ引継いでいる。その後の展望として建設が予定されている新市

が、市史編さん事業の総費用を算出した年度ごとの「経費見込」は、以後各年の予算確保を円滑なものにした。

その反対に人頭算保の要求は、かいじ固体（S-61）、全国スボレク（S-63）、市制百周年記念事業（H元）など、大型イベントの影響を受け、ままならず、ついに専任職員二名で終始した。それに市史編さんの最後の到達点とも言うべき「史料館」の建設は、実現には今も遠い位置にあり、委員会から寄せられたコメントを、事務局はより開設当局は肝に銘ずるべきであると思ふ。

△座談会・甲府市史編さんを終えて一では山長、委員長並びに各専門部会長から存分に伺えた。本来なら各部会ごとで同様に行なったかたが、日程が許さず、代わりにコメントをお願いするところとなつた。様々立図書館で、有効的に保存・活用される見込である。

△本号は市史編さん事業の總集編としたが、ここでは改めて「終刊」とは言わない。先ず「休刊」として置きたい。今後、廣大な史料の整理を通じて、必ずや「市史研究」誌の統刊が求められると思うからである。

△なくして、上余を要した事業は終わる。この間、ご執筆いただいた先生方をはじめ、実際に多くの方々のご支援・ご協力を賜つた。事務局一同、真心こめてお礼を申し上げたい。

(高木)

甲府市史研究（市史完成特集） 第10号

---

編集 甲府市市史編さん委員会

発行 甲府市役所市長室

〒400 甲府市丸の内一丁目18-1

☎ 0552(37)1161 内線2311

発行日 平成5年3月22日

印刷 株式会社少国民社

